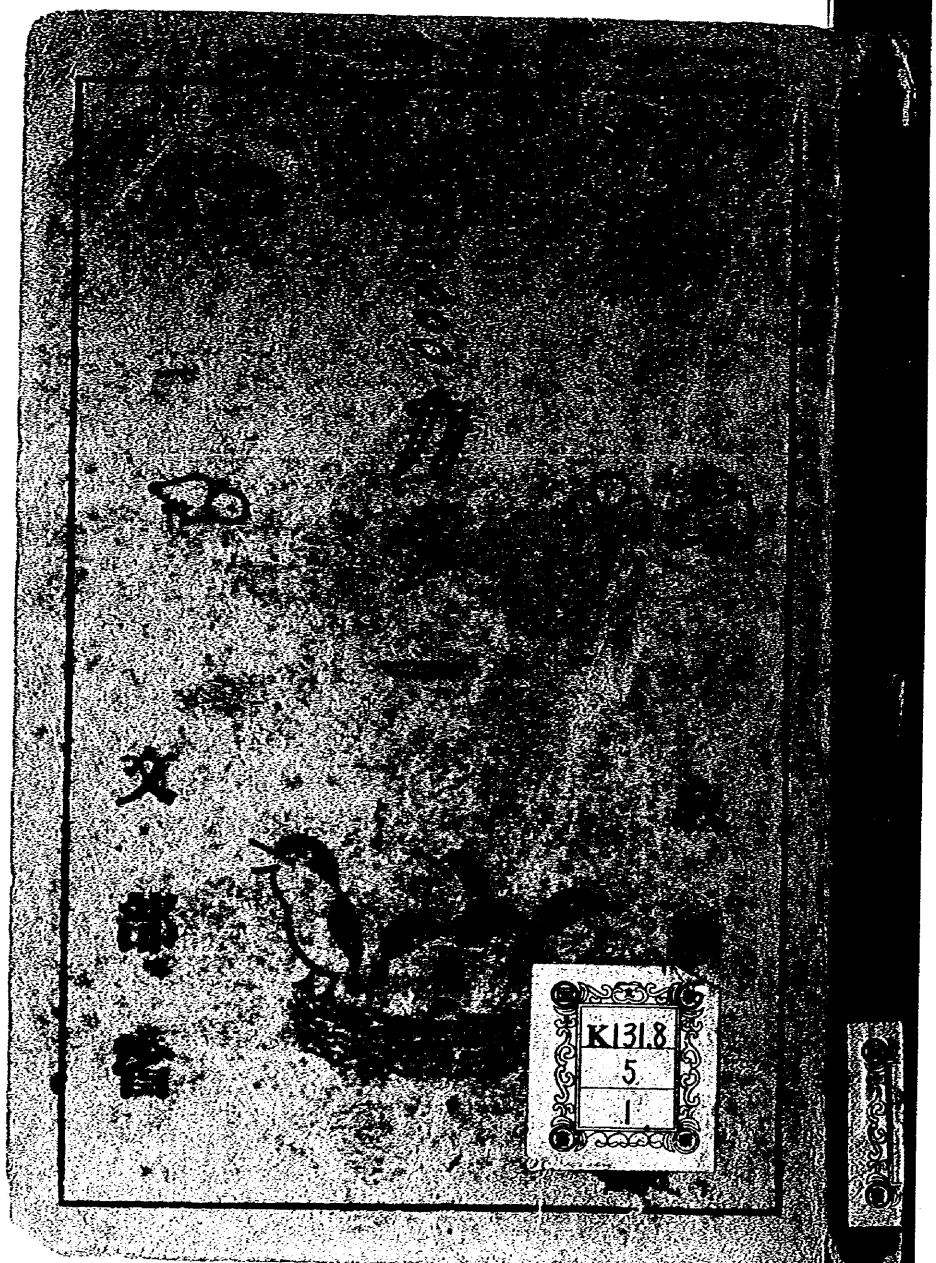


K131.8

5

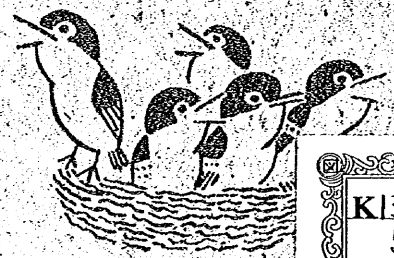
1

國語教科書

一

教師

文部省



K131.8
5
1

文部省教育研究所
教育図書館蔵書

夕

一

教師用

文部省

「ヨミカタ一」教師用目錄

總說

一　國民科指導の精神……七
(1)國民科の意義……七
(2)國民科に於ける教科と科目との關係……九
(3)國民科の教科書とその指導方針……一一
(4)國民科と他教科及び儀式學校行事との關聯……一六
二　國民科國語指導の精神……一九
(1)國民科國語の意義……一九
(2)國語指導の四分節……二二
分節の基礎……二二
音聲言語指導と文字言語指導……二三
讀み方……二五
綴り方……二八
書き方……三〇
話し方……三一
(3)國語愛護と國語の醇化……三三
三　國民科國語教科書……三九
(1)編纂方針……三九
(2)第一期の國語教科書……四一
ヨミカタ……四二
コトバノオケイコ……五一
教師用書……五三
掛圖……六四

各說

一　ラジオ體操……六七

二　枝庭の遊戯……六九
三　アカイアサヒ……七二
四　ハトコイ……七六
五　コマイヌサン……七八
六　ヒノマルノハタ……八二
七　ヘイタイサン……八五
八　アヒル……八九
九　ハシレハシレ……九二
十　ココマデオイデ……九四
十一　カミフウセン……九七
十二　ウシ・ヒバリ……九九
十三　ユフヤケ……一〇四
十四　オツキサマ……一〇六
十五　オハヤウゴザイマス……一〇九
十六　ホンダイサムサン……一一三
十七　エヲカキマシタ……一一六
十八　サヤウナラ・タダイマ……一一八
十九　ヒカウキ……一二二
二十　オツカヒ……一二五
二十一　デンワアソビ・オキヤクアソビ……一二八
二十二　シリトリ……一三三
二十三　カクレンボ……一三五
二十四　キヲツケ……一三八
二十五　アメガヤミマシタ……一四一
二十六　イケニフネ……一四四
二十七　ホタル……一四七
二十八　タナバタ……一五〇
二十九　ハコニハ……一五三
三十　ココハドコノホソミチダ……一五六
三十一　オミヤノ石ダン……一五九
三十二　アサガホ……一六二

三十三　オハカノサウヂ……一六五
三十四　花ツミ……一六九
三十五　ユフダチ……一七四
三十六　ニ　ジ……一七七
三十七　ア　リ……一八〇
三十八　川アソビ……一八四
三十九　メダカサン……一八七
四　十　トビトカメ……一九〇
四十一　シタキリスズメ……一九四
四十二　オ月サマ……一九八
四十三　モモタラウ……二〇三
四十四　カタカナ圖表……二〇八

附　錄

新出讀替文字一覽……二一一
運筆順序……二一九
鉛筆による書き方指導上の注意……二二〇
ヨミカタ一の發音……二二二
綴り方指導要項……二四四
指導の發展段階……二四四
初等科第一學年……二四五
一　指導要項……二四五
二　指導要項例……二五〇
三　參考文題……二五七
話し方指導要項……二六五
指導の發展段階……二六五
初等科第一・二學年……二六六

總　說

一　國民科指導の精神

(1)　國民科の意義

國民科の目的

國民學校は、皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲ爲スヲ以テ、その目的とする。國民科はこの目的を全うするために設けられた教科の一つであつて、特に國體の精華を明らかにし、國民精神を涵養し、皇國の使命を自覺せしめる點に於いて重要な任務を有する。

國體の精華

教育に關する勅語には

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深

厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

と仰せられてある。國體の精華を明らかにすることは、とりもなほさず皇國の道を明らかにすることであり、道を體得實踐して億兆一心の實を擧げることである。

國民精神

國民精神は皇國の道に基づいて發揮せられる。しかもそれは、無窮に生々發展する皇國の相を體現してあらゆるものを包攝する博大な精神である。義勇奉公を中核として活動することは勿論であるが、また優にやさしい「もののあはれ」を知る心もそれであり、外來文化を攝取して、これを自家藥籠中のものとなし、獨自の文化を創造展開して行く精神もそれである。

皇國の使命

皇國の使命は肇國の大精神に發源する使命であり、皇國の道を體とし、國民精神の發揮によつて遂行せらるべき使命である。隨つてこの使命は、肇國の事實に基づいて本來道義的であり、皇國の生々發展に卽して歷史的であり、また世界的であるといふことができる。さうした皇國の使命に就いての自覺を促し、將來の活動に資せしめんとするところに、國民科指導の窮極の目的はある。

(2) 國民科に於ける教科と科目との關係

皇國の道と國民科

皇國の道とは、教育に關する勅語に示し給へる「斯ノ道」に外ならないのであるが、「斯ノ道」を學ぶとすれば、先づ道の教に卽して國民道德を體得し實踐することが、國民科の任務の一重點となる。しかも「斯ノ道」は皇祖皇宗の御遺訓であり、皇祖皇宗の宏遠なる肇國、深厚なる樹德をはじめ奉り國史的事實に基づいての道であるから、かうした歷史的事實

に卽して皇國發展の相を明らかにし、皇國の大生命を感得せしめることによつて、皇國の道を學ばしめることが大切であり、ここに國民科教科內容の第二の重點がある。しかも歷史と分つべからざるものは我が國土であり、我が國土國勢を明らかにすることによつて皇國の道を學ぶことが大切である。ここに第三の重點がある。この三重點を通じて學ぶことによつて、始めて古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる「斯ノ道」が體得されるわけであるが、更になほ「斯ノ道」及び「斯ノ道」に基づいて發現する國民性・國民精神・國民文化等は、我が國の言語によつて表現され、理解される場合が極めて多いのであるから、國語の習得も亦國民科の重點となる。

國民科の四科目

卽ち國民科といふ教科は、皇國の道を明らかにし、これを體得實踐する立場から自ら右四つの重點を含むのであつて、これがとりもなほさず國民科が修身・國語・國史・地理といふ科目に分化する所以となるのである。隨つて國民科が四科目に分れることは、在來の小學校に於ける修身・國語・國史・地理が、簡單に國民科の中に束ねられたことを意味するものではなく、寧ろ逆に國民科の目的を遂行するための重點として四科目が分化するのであり、あくまでも原理的に一貫して國民的自覺を喚起し、信念に培ふ教科である。

(3) 國民科の教科書とその指導方針

教科書の分化と指導方針

國民科に屬する教科書は、その科目に應じてそれぞれ分身するものであるが、その目的に於いて精神に於いて一致するのは當然であつて、指導に際しては、先づこの點に對する十分な考慮が肝要である。

しかも教科書にはそれぞれの特色があり、教材は多種多樣であるが、しかしどの教科書どの教材を取扱ふにしても、常に大局から見て次の如き指導方針を見失ふことのないやうにしなければならない。

一、皇國に生まれたる喜びを感ぜしめ、敬神奉公の眞義を體得せしむること。

一、我が國の歴史・國土が優秀なる國民性を育成したる所以を知らしむるとともに、我が國文化の特質を明らかにしてその創造發展に力むるの精神を養ふこと。

一、他教科と相俟つて、政治・經濟・國防・海洋等に關する事項の教授に留意すること。

これらの條項はいづれも、我が肇國の大精神を堅持し、皇國の使命を自覺せしめんとするところから生まれ來るものである。天壤無窮の皇位を中心とし奉り、一君萬民、君民一體の國家活動に對する信念、正しく明かるい國民生活の展開に對する信念、無限の努力に基づく卓越した國民文化の創造に對する信念を周到なる注意のもとに獲得せしめなければならない。

教材の排列

但し、かくの如き指導目的は一足跳びに達成されるものではない。隨つて國民學校に於いては、教材を兒童心身の發達に即せしめ、その生活の實際並びに生活環境と照應せしめながら、段階を追うて進むものである。即ち教科書は教材を精選しつつ、左の四期に亘つて發生的に組織する。

第一期　初等科第一、二學年
第二期　初等科第三學年
第三期　初等科第四、五、六學年
第四期　高等科第一、二學年

右は國民學校の教科書全般に亘る編纂方針であるが、國民科に就いていへば、

第一期に於いては、特に兒童生活に於ける躾と國語の初歩的練習とを主とし、日常行爲にあらはれて來る事象に就いて見方、考へ方、並びに實踐を指導し、且想像力を豊かならしめるやうにつとめる。「ヨイコド

モ「ヨミカタ」はこの目的を達成するために編纂された教科書であつて、それらは修身・國語の教科書であるとともに、國史・地理の萌芽を含むものである。しかもこの期の兒童の心情と理解とに卽し、全國共通の兒童生活に取材するとともに、生活暦によつて排列されてゐることも見落すべきではない。

第二期に於いては、生活體驗に對する正しい理解力と發表力とを伸張せしめ、次第に道德的理想構成の方向に向かはしめようとするものである。この時期は兒童前期から兒童後期に移る過渡期として、特に考慮した教科書が編纂され、隨つてそれに應じた取扱が考慮さるべきである。

第三期に於いては、兒童を自覺的ならしめることに重點を置いてゐる。隨つて實踐の能力を助長するとともに、道德的判斷が十分に行はれるやうに輔導しなければならない。この時期に至つて、國民科は修身・國語のほかに、鄕土愛の念を涵養し、鄕土の觀察をなさしめるのであ

るが、同時にまた國史・地理の二科目を分化せしめ、それに應じた教科書を提出する。

第四期に於いては、第三期に至るまでの基礎的な錬成の上に、東亞の情勢並びに世界の動向を知らしめて、益〻國體の精華を明らかにし、大國民たるの資質に培ふものである。

第一期の教科書

「ヨイコドモ」と「ヨミカタ」は第一期の兒童に對する國民科の教科書として作られたものであつて、國民的自覺信念に培ふといふ點では一體であり、教材內容は相互に連絡し、補足し合つてゐる。いはば「ヨイコドモ」は國民生活の正しい筋道を明らかならしめる表側となり、「ヨミカタ」は國民的な感情情緒を豐かにして心の奥行を作る裏側になつてゐる。しかも「ヨイコドモ」は國民的自覺を喚起しながら、實踐行爲に躾けることを求めるものであり、「ヨミカタ」は、言語・文章を訓練してことばの實踐に導き、ことばの國民的思考感動を通じて、國民精神を養ふものであつ

て、そこに自ら取扱の相違があるのである。

(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との關聯

理數科との關聯

國民科は皇國の道を明らかにし、國民的自覺信念に培ひ、實踐せしめることを目的とする。隨つて皇國の新たなる伸長を意圖する限り、國民科は同時に科學の重要性の理解と文化創造の任務を自覺せしめるものでなければならない。その點全く理數科に於ける合理創造の精神の涵養と軌を一にする。また理數科的な考察處理を重んずる生活態度の養成と、自然の觀察への契機を與へる點で、極めて密接な關聯を有するものである。

體錬科との關聯

體錬科とは保健衛生に關する指導によつてかたく結びついてゐるが、心身一體の境地をめざす國民學校教育としては、同時に、獻身奉公規律協同服從公明正大の精神を涵養するとか、體錬に關する禮法の修練を基礎づけるとか、武道精神を鼓吹するとか、體錬科に於ける修練と不可分の關聯にある。

藝能科との關聯

國民科は國民精神の涵養を意圖するものであるが、そのなかには當然國民的情操を醇化し、高雅な趣味を涵養することを含んでゐる。隨つて藝能科ともまた不可分である。特に表現鑑賞の能力に培ひ、家庭生活の理會、婦德の涵養を期すること等、藝能科教育のめざすところと離るべからざるものがある。

實業科との關聯

實業科は一面に於いて、國民科の精神を實生活に具現することを意圖する教科である。特に職分を通じて公に奉ずるの精神を養ひ、產業の國家的使命を自覺せしめ、海外發展の素地に培ふ等、國民科に於ける

指導はそのまま實業科に於いて擴充せられるわけである。

儀式學校行事との關聯

儀式・行事等に對してその本義並びに由來を明らかにし、禮法を修練し、生活體驗を發表し整理する等國民科の分擔するところは極めて重大である。

二　國民科國語指導の精神

(1)　國民科國語の意義

國民學校令施行規則第四條に

國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ其ノ理會力ト發表力トヲ養ヒ國民的思考感動ヲ通ジテ國民精神ヲ涵養スルモノトス

とある。國民學校に於ける國語指導の範圍・方法・目的の三者がこの中に要約されてある。

「日常ノ國語」とは、日常生活に使用する國語の意義で、特殊・專門、乃至高尙な國語に對し、ここに國民學校教育としての限度が示してある。「日常ノ國語」は換言すれば普通の國語である。もちろん生活言語としての生きた國語を基礎とするが、といつて方言・訛語や蕪雜野卑な言語を含むもの

ではない。それらは教育的立場から當然矯正醇化さるべきものであり、どこまでも醇正な國語を對象とすべきものである。更に「日常ノ」といつたからとて、單に我々の日常の話しことば及びそれを基礎とする口語文に限るわけでなく、普通の文語や或程度の古典語をさへ含んでゐる。これを要するに「日常ノ國語」とは、普通の國民生活に必須であり、基本的規準的な國語を意味するものである。

日常生活に使用する國語には、いはゆる話しことばとしての音聲言語と、文字に書きあらはす文字言語とがあり、國民學校に於ける國語指導は、この兩者に亘つての理會力・發表力を養はなければならない。即ちその理會力は讀むこと、聽くことによる理會力であり、その發表力は、話すこと、書くこと、綴ることによる發表力であつて、ここに國語指導が「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」等に分節する基礎がある。

國語を指導する者は、豫め國語の本質を見定めておくことが大切である。

言語を單に思想傳達の道具とする考へ方は、極めて通俗的な言語觀であるが、これがためにしばしば教育上の過誤を來たすことがある。なるほど言語を結果からのみ見れば、一種の符徴であり、道具である。しかし言語によつて發表される思想は、元來言語を通して考へられ、感じられた所產である。換言すれば、我々は言語を通して思考し、感動して思想を構成するのである。思想と言語とが紙の表裏の如く一體不可分であるといふ理由はここに存する。これを國語に就いていへば、我々日本人は、國語を通して考へ、感じ、思想を構成する。我々の思考なり、感動なり、思想なりは、どこまでも國民共有——祖先傳來の國語と離るべからざるものである。さうしてここに國語指導の大切な鍵が祕められてゐるのである。

即ち國語指導の第一義諦は、國語そのものと分つべからざる國民的思考感動を通じて國民精神を涵養することにある。換言すれば、國語は國初以來國民がなし來つた思考感動の結晶體であり、國語指導は、この思考感動と一體たらしめることによつて國民精神を啓培することにあるの

である。

言語を思想交換の具とのみ見る者は、ややもすれば言語そのものを形式としてこれを輕視し、言語發表の題目たる材料を內容と考へてこれを尊重する結果、言語指導をして恰も實物そのものの指導の如き觀を呈せしめる。もとより實物そのものの指導は教育上大切なことではあるが、少くとも國語指導に於いては言語が主であり、實物は客であつて、この主客を顚倒するに至つては、既に國語指導は存在しないといはなければならない。

(2) 國語指導の四分節

分節の基礎

國語に音聲言語と文字言語の兩面がある以上、國語指導はこの兩者にかけての理會力發表力を養はなければならない。卽ち音聲言語の指導

には「話し方」「聽き方」が、文字言語の指導には「讀み方」「書き方」「綴り方」が分節し得るゆゑんである。但し實際問題として考へれば、「聽き方」は「話し方」の一面として相卽するのであるから、「聽き方」は「話し方」に包含するものとして、「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」の四つが國民科國語に於いて取立てられたのである。

音聲言語指導と文字言語指導

在來「話し方」は、國語指導の一分節として明らかに認識されてゐなかつた。ために我が國語指導はややもすると文字言語に限られがちであり、ここに國語指導の弱點があつたと考へられる。國民科國語に於いて新たに「話し方」が拾ひ上げられ、表面におし出されたのは、大に注意すべきことである。言語の發生的見地からすれば、いふまでもなく音聲言語が文字言語に先んじて出現し、音聲言語の地盤の上に文字言語が發達したのである。隨つて文字言語としての國語指導を徹底するためにも、その地

盤たる音聲言語としての國語が正しく豐かに培はれることが大切であつて、そこに「話し方」の重要性がある。

しかし、それかといつて、國語指導の窮極の目標が音聲言語にあるかの如く考へるのは、早計であり誤りである。殊に國内の兒童を相手とする國語指導は、國語を外國語として教へる日本語教授と、その出發點に於いて趣を異にする。學齢兒童は既に家庭なり社會なりから音聲言語を學び、數千の語彙をもつてをり、彼等の生活に必要な程度に於いてそれを自在に驅使してゐる。國内に於ける音聲言語の指導は、兒童のかうした生活言語を基礎として、次第にこれを醇化し、發音語法を適確ならしめ、進んでは音聲言語そのものを高めて行くことにある。さうして、かうした役目は、寧ろ文字言語の習得によつて果たされることが決して少くないのである。今日國内に於いて用ひられる話しことばが、文字言語によつて統一され、醇化され、高度化されて行くのと同じやうに、兒童の言語もまた文字言語の習得によつて統一醇化され、高度化されて行くのである。た

だ文字言語のみによる教育は、ややもすれば音聲言語の重要性を閑却し、その修練を等閑に附する結果、文字言語と音聲言語との分裂を來たし、文字言語は陶冶されながら、音聲言語は野卑な方言、訛語のままに放置される。その結果一般社會の音聲言語をして健全な發達をなさしめないで終ることになる。故に國語指導に於ける音聲言語・文字言語の指導は、互に相倚り相俟つてその効果を全うすべきものであることを忘れてはならない。

讀み方

「讀み方」は在來國語指導の主體であつたが、今後といへどもその重要性は決して變らないはずである。いはば「讀み方」は、國語指導の中核であり、その縮圖である。卽ち「讀み方」は、單に讀むことばかりでなく、書くこと、話すことをそれ自體に包含してをり、隨つて「書き方」「話し方」及び「綴り方」と密接不可分の關係をもつからである。

言語文章は思考・感動と不可分であり、それ自體生命的な存在である。正しく讀むことは、結局文字を通じてこの思考・感動と一體になることであるが、それが操作としては、先づ正しい發音・抑揚による音感から出發して、言語の意味・語感に沒入しなくてはならない。なほ讀むといふことは、文字の正しい發聲を出發點としていふのであるが、進んだ階梯に於いては發聲・階段を通過した默讀をも含むことはいふまでもない。

「讀み方」は、要するに正しく讀む力を養ふことを目標とするものではあるが、それがためには單に讀むことばかりでなく、種々の操作が必要である。殊に年少の兒童に對しては、教材に卽して種々の言語活動をさせることが、一面には意味感情に徹して讀みを深からしめるゆゑんであるとともに、一面には音聲言語の基礎練習をなさしめることになるのであるから、或は挿畫掛圖)や文章に就いて話合をさせるとか、或は文章を暗誦させ、又これを劇的に演出させるとかが、「讀み方」に於ける大切な操作となるわけである。かくの如くして「讀み方」と「話し方」とは指導の實際に於いて

相卽一致することが考へられる。

更に書くこともまた「讀み方」の一操作であると考へられる。卽ち文字の劃や筆順を正しく指導し、正確に書寫せしめることに始まつて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らしめることがそれであつて、ここに實際指導に於ける「讀み方」と「書き方」の相卽がある。この場合注意すべきことは、書くことを徒に器械的ならしめ、言語の取扱を形骸化せしめないことである。書くことは一面に讀む力を深めて行くための作業であり、言語・文章の意義とか構造とかは、讀むこと以上に書くことによつて體得されることが多い。隨つて書寫や書取は單なる文字練習として行ふべきでなく、適當な範圍內で教材の文章を書かせながら理會せしめることが大切である。特に韻文などは全文を書かせることによつて思考・感動に徹せしめることが取扱として望ましいことである。

以上の如く「讀み方」は、讀むこと、書くこと、話すことを包攝することによつて國語の正しい理會力を養成することを目標とするものであるが、こ

の理會力はやがて言語の發表力として、「話し方」「綴り方」に發揮せしむべきものである。

綴り方

「綴り方」指導は、「讀み方」指導に於いて養はれた文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を錬成する國語指導の一分節であつて、「讀み方」と密接な關係をもつものであることはいふまでもないが、しかもまた「綴り方」は、「話し方」と分離すべからざる間柄にある。即ち「綴り方」は、話すことの文字言語化であり、隨つて「話し方」の延長發展と見なすことができる。特に低學年に於ける「綴り方」は、「話し方」から出發することが大切であり、ここに指導の實際に於ける「話し方」「綴り方」の相卽があることを忘れてはならない。

「綴り方」は、話すことの文字言語化であるが故に、兒童の生活言語は「綴り方」を通しても醇化せらるべきであつて、ここでもまた當然方言訛語を矯

正し、醇正な國語による平易明白な文章を作らしむべきである。

「讀み方」の指導は、もちろん兒童生活を出發點とはするが、年級の進むに隨つて、漸く高次の國民生活、國民文化を主體とする教材に移行する。これに比べると「綴り方」は大體に於いて兒童生活に終始する國語指導である。いはゆる國語に於ける生活指導は、「讀み方」よりも寧ろ「綴り方」に於いていひ得ることである。そこで「綴り方」に於いては、兒童生活そのものを適正に指導することが大切になつて來る。換言すればその生活に卽して物の見方、考へ方を適正に指導することが大切なのである。この方面の指導が在來教育的に考慮されなかつたために、綴り方指導は或程度の發達を遂げながらも、不幸にして不健全な思想を釀成しないでもなかつた。殊に文學の自然主義的な傾向から、物の眞を描かしめようとして道を逸脱し、生活の物的方面に捕はれて理想を失ひ、甚だしきは現實生活の缺陷にさへ兒童の眼を向けさせようとした。「眞」を描く前に先づ如何なるものを書くべきかを指導する必要があり、「道」に照らして心にうつり行

く情意を表はさしめることが大切であらう。換言すれば教育の立場から要求される倫理性は、「綴り方」に於いても例外なく要求されるのである。

しかも「綴り方」は、國語による生活の表現であるが故に、そこには絶え間なき創造の營みがあることを忘れてはならない。國民學校の教育は兒童の創造力を育成することを念とするものであり、この觀點からすれば、國民科に於いてこれを擔當するものは國語を措いて外になく、しかもその最も積極的なのが「綴り方」である。即ち兒童の見方、考へ方の指導は、常に新しいものを創造して行くことに努力せしめ、創造力に培ふことが大切なのである。

書き方

「讀み方」「綴り方」に於ける文字書寫の基礎として「書き方」がある。國民學校の制度では在來の「書き方」の一部が「習字」として藝能科におかれたのであるから、國語の「書き方」は殆ど「讀み方」に包攝されることになる。即ち「書き方」は初等科一二年に於ける文字練習の基礎をなすもので、「讀み方」の書取と相俟つて明確端正に書くことを指導するものである。

話し方

音聲言語指導としての「話し方」の意義と、その重要性に就いては、既に述べたところであるが、しかも「話し方」指導の實際に就いては將來の攻究に俟つべきものが頗る多い。

音聲言語は、文字言語に先だつものであるから、「話し方」は文字言語から離れた自由な立場から指導すべきものとする考は一面の理であつて、實際的效果も甚だ疑問である　國民科國語に於いては、「話し方」の時間を特設しないのを建前とし、「讀み方」「綴り方」等と密接に關聯してその基礎練習を行ひ、更に他科目他教科に於いて常に話し方指導の擴充を期することとしたのは、專ら音聲言語と、文字言語との關係に鑑みて實際指導に意義あらしめ、實績を收めんがためである。

即ち先づ「讀み方」に即して兒童に自由簡明に發表させる機會を與へ、話す心構を作らせることを手始として、一面にはこれをことばの躾や、「讀み方」の文章に即應しつつ次第に醇化し、他面に「綴り方」に延長して文字言語化しつつ統制し、その間絶えず兒童の音聲言語を指導して、不完全より完全へ、正確へ雅馴へと進展させることを心掛くべきである。在來「話し方」と稱して兒童にお伽話や體驗を語らせ、それが言語發表として不完全であつても何等指導に工夫しないやうなだらしのない「話し方」でなく、躾を中心とした齒ぎれのよい「話し方」に導くことが大切である。

もとより時宜に應じて時間を特設し、感興深き兒童の共通話題を中心として談話させ、進んでは多數の面前で演述させることも大切であるが、しかも絶えず醇正なる言語の指導をすることを忘れてはならない。

「話し方」の半面たる「聽き方」に至つては、更に將來の研究を要するのであるが、先づ人のことばを落着いて聞く習慣を早くから養ひ、進んでは聽いた話の要領を語らせ、感想を述べさせる等、發表の進展と相即してその實

際を工夫すべきである。

なほ「話し方」の指導は、常に修身の禮法と結び、禮の精神を言語の上に體現せしめる指導が大切である。他人の感情を害し、他人の非を擧げて快しとするやうな言動を戒むべきはもちろん、口先のみ巧みで、然諾を重んじない氣風をなさしめるのは更に禁物である。如何なる場合に如何に言ひ、如何に言ふべからざるかをわきまへしめ、進んでは巧みに語る人に對してはよき聽き手となり、ことば少き人に對してはよき話し手となる等の社交上の心構をも一應は指導すべきである。

(3) 國語愛護と國語の醇化

國語が單なる思想發表の具でなく、國民的思考感動の結晶體であり、國民の思想精神と不可分のものであることを考へるとき、我々は今更に國語の重大な意義を知るとともに、如何にこれを尊重愛護しなければならないかを痛感する。隨つて國語指導は國民をして國語の重大性に目醒

めしめ、國語尊重愛護の念を啓培することに徹しなければならなくなつて來る。

國語の尊重愛護は、國語に對する道を闡明し、これを實踐することである。さうして國民學校に於ける國語指導は、先づその實踐によつて國語の規準法則を體得させ、進んで國語の特質を知らしめ、國語を醇化愛護するの念に培ふことを任とすべきである。

卽ち國民學校に於いては、先づ發音を正し、抑揚に注意することによつて國語の道の實踐に入らしめる。發音を正しくすることは、在來既に久しく唱道せられ、一部教育の實績に見るべきものがないではないが、國內全般としては前途なほ甚だ遼遠の感がある。抑揚にはいはゆるアクセントをも含めていふのであるが、これが實際指導は更に多難であることを思はせる。しかし今日、國語が東亞共通語として重大な役割をなさんとしつつあるを見れば、その發音なりアクセントなりは、在來の如く方言的に放置せらるべきでなく、話しことばとしての標準語の指導とともに、

發音アクセントの醇化統一を徹底し、以て東亞共通語として、更に進んでは世界語としての文化的資質を備へしめることが今日の急務であり、しかもそれが專ら教育によつて果されることを考へなければならない。

發音アクセントばかりでなく、國語はなほそれ自體の法則を有する。我々が日常使用する國語が、この法則に支配されてゐればこそ、我々はその意義を解し、又誤なく傳へることができるのである。國語の法則は卽ち語法であるが、我が國語の語法は、所謂文法として一見簡單であるやうであつて、その實、運用の上に甚だ微妙性があり、それがことばの選びや、言ひまはしにまで延長して修辭法に密接なつながりを持つてゐる。國語指導はこの點に鑑み、適宜語法修辭に注意し、無意識的な使用を意識化し、法則の體得實踐に導くことが大切である。國民學校に於いては、敢へてそれを系統的知的に授けることを期するものでなく、重點的に指導し、しかも常に實踐的に導くことをなさなければならない。

かくの如くして國語指導は、音聲言語に於ける標準語の使用のみなら

ず、文字言語に於いても常に醇正なる國語の使用に留意し、これを他科目他教科の指導に擴充するはもちろん、兒童の生活の上にまで體現させることを目指さなければならない。そこには非常の困難があり、在來の國語指導はこの困難を克服することに於いて甚だ不徹底であつた。しかし試みに臺灣、朝鮮、南洋に於いて正しい國語の普及徹底を期し、その他外地に於いても、この理想の實現に努力しつつある今日であることを思へば、國語指導は正に在來の墮眠から目醒めなければならない時である。

國語愛護の精神に培ふためには、以上の如き實踐的指導と共に、なほ理念として國語の特質をも或程度認識させることが大切である。

例へば我が國語はこれを歴史的に見るとき、未だかつて外國語に征服されたことのない國語であり、肇國以來連綿として傳統し、發展し來つた國語である。よし多數の漢語及び漢語法を取入れ、又近世歐米語に若干の影響を受けたとはいへ、國語の生命は脉々として連なり、生々發展し來つたのである。この歴史面から見て我が國語は、一面に包容性に富むと

ともに他面に儼として純粋性を保つてゐる。「あはれ」「うれし」「かなし」等、多數のやまとことばが、殆ど上代そのままの姿で、今日の生活語に用ゐられてゐることや、純粋なやまとことばによつて表現される和歌の如き文學が、國初以來傳統し來り、しかも現代に於いていよいよ盛に行はれてゐることなどにそれを見ることができる。しかも我が國語は前述の如く歴史的に外國語の影響を受けたことも多大であつて、そこに包容性のあることは見遁し得ないところである。この點から往々國語の混亂を來たすのであるが、そこに又我が國語が世界語として發展すべき素質を藏してゐるとも見ることができるのである。

又我が國語をその表現に即して特質を考へるとき、和歌、俳句の如き短い文の中に豐富な意味感情を盛り得る含蓄性があり、しかも又物語文學の發達に見る生活の精細な描寫をなし得る描寫性を併せ具へてゐることが、何よりも著しい特徴として考へられる。

かくの如き國語の特質を知らしめることは、やがて國語愛護の念に培

ふゆゑんであり、更にその尊重愛護が一面の理に走つたり、末梢に流れたり、乃至頑迷固陋に陷つたりせしめないゆゑんになるのである。

國語は生命體であり、常に生動し發展するものである。隨つてこれを使用する國民の心掛如何によつて國語はよくもなればわるくもなるのである。我々が發音を正しくすれば、國語そのものの發音が醇化される。我々が醇正な國語を使用して話し、又文章を書けば、國語そのものが次第に醇化される。ここに國民として國語に對する實踐道があるのである。

されば、醇正な國語とは、決して固定した觀念のものでなく、將來の國語に對する理想をもつて考ふべきものである。即ち國語の醇化は、單なる外國語の排斥でもなく、飜譯語の忌避でもない。要は國語の法則に基づき、特質に鑑み、又その傳統と實際に照らしつつ、音聲言語に於いても文字言語に於いても平明雅馴を保ち、文化性、創造性を賦與することに努力することに外ならないのである。

三　國民科國語教科書

(1)　編纂方針

國民科國語教科書は、國民科の教科書であり、隨つて國民科全般に通ずる教科書の編纂方針に基づき、これを國語の立場から具體化することによつて編纂される。

先づ國語教科書の教材は、醇正なる國語を通じて國民精神を涵養し、情操の醇化、創造力の啓發に資し、併せて國語愛護の念に培ふものであることを期する。

さうして、これらの教材は第一期乃至第四期の段階に卽して排列されるのであるが、國語教材はその表現面たる文章と、素材たる表現對象と、この二つの方面から排列を考慮し、系統を樹立しなければならない。

文章の系統　第一期は言語の發生系統を考慮して叫び聲・獨言・對話その他專ら主體的な敍述を按配し、第二期に入つて次第に客觀的な敍述に移り、第三期に至つて口語文・文語文に分化する。第四期には更に文語の書簡文や名家の作品をも採擇する。なほ韻文としては、第一期の叫び聲から出發して、第一期第二期を通じて童謠・童詩の類を排列し、第三期に入つて現代詩・和歌・俳句等に分化せしめる。

表現對象の系統　表現の對象は兒童の生活から出發して國民生活の諸相に分化展開させる。即ち第一期は專ら遊戯・童話等を中心とする兒童生活を表現の對象とし、これを以て第二期以降の教材の母胎たらしめる。童話は傳說・寓話等を經て、第二期に於いて神話・英雄物語に移行し、第三・四期に於いて更に歷史物語・歷史的文化財に發展させる。遊戯は、模倣・作業運動・觀察等を經て、次第に現代の國民生活・文化の諸相に展開させる。特に第一期第二期に於いては修身教科書と相俟ち、國史及び地理の教材の萠芽を啓培して、第三期にそれぞれ科目を分ける母胎たらしめる。

以上は第一期乃至第四期の國語教科書の教材の體系であるが、なほ文字・語彙・語法の提出も亦右體系と相俟つて自ら基準が定まるのである。今その提出の基準を極めて概括的にいへば次のやうである。

(1) 簡單にして基本的なものから始め、次第に複雜なものに及ぶ。
(2) 兒童の生活や心情に關係の深いものから始める。
(3) 具體的意義を有するものを先にし、抽象的意義を有するものを後にする。

(2) 第一期の國語教科書

第一期の國語教科書として「ヨミカタ」と稱する國語讀本と、これを言語的作業的に展開する「コトバノオケイコ」と、更にこれを國語指導の全分野に擴充する「ヨミカタ」教師用書の三種を編纂する。いふまでもなく前二者は兒童用書であり、後者は教師用書である。

なほ第一期に於いては掛圖をも編纂する。

ヨミカタ

在來の國語讀本に該當するもので、卷一から卷四まで之を一聯として見るべき組織を有する。

特に卷一は第一部乃至第三部から成り、專ら言語の發生系統を考慮してこれを具象化した形にできてゐる。即ち第一部は兒童の主體的な叫び聲、及びそれからやや發展した韻律的言語を教材とするもので、その排列は發音指導の展開に即せしめたものが多く、隨つてこれをできるだけ大きく叫ばせることによつて發音の基礎練習をなさしめ、且訛音の矯正につとめしむべきものである。第二部に入つて先づ躾の言語を與へ、これを手がかりとして教養ある言語への關心を高め、教養ある話しことばを基礎として兒童の生活を表現するとともに、旁ら第一部の素朴な韻律的叫聲を調へて次第に童謠童詩に展開し、第三部に入つて童話的敍述に移行する。

卷二以降卷四に至る教材の文章は、專ら卷一のそれを母胎として展開し、次第に複雜と深みとを加へて行くのであるが、しかもこの四卷を通じて注意すべきは、表現が常に兒童の主體的態度に即して、あるがままに客觀的に敍述されてゐないことである。動物はもとより、心なき自然物が多かれ少かれ擬人化され、童話化されてゐる。更にこれと同じ立場から、敬語の使ひ方にも略一貫してゐるものがある。即ち、おとうさん、おかあさん、おぢいさん、おばあさん等の言動を敍述する場合、常に敬語的に表現されてゐる。これら目上の人の行動は「オッシャイマシタ」であり、「イラッシャイマシタ」であり「ホメテクダサイマシタ」であつて、「オトウサンガイヒマシタ」「オカアサンガイキマシタ」などいふ言ひ方は、「モモタラウ」「花サカヂヂイ」の如き説話的敍述の外には全くないのである。これが第二期以降に於いて、徐ろに「オトウサンガイヒマシタ」「父ガイッタ」といふやうな敍述の客觀性へ進展するのである。

しかも第一期は國語指導上、話しことばの基礎練習をなさしめる重要

な時期であるに鑑み、この期に於ける散文教材は敬體口語文を以て建前とし、僅かに韻文の一部に常體口語文を用ひた。これは大體在來と同じ行き方ではあるが、しかも在來以上に音聲言語を重視する立場から、卷一卷頭の二教材は文字を用ゐず、專ら兒童の話合のための教材とした。僅か二教材に過ぎないのではあるが、これによつて先づ文字以外に國語指導が存在することを宣言するとともに、この精神は「ヨミカタ」の教材のすべてに亘つて音聲言語指導の重要性を物語るものであることを忘れてはならない。

なほ、音聲言語指導を重視する立場から、「ヨミカタ」に對話教材劇教材を多く挿入したばかりでなく、すべての教材を音聲言語として取扱ふべき手がかりを「コトバノオケイコ」に示し、教師用書に於いて更にこれを擴充した。

第一期に於いては全教科の教科書に亘つて、童心を重んじ、躾及び初步訓練を重視すること、全國に共通な兒童生活に取材し、生活暦に隨つて教

材を排列すること、各教科に亘り或程度共通な事項に主題を求めて教材を作成すること、兒童用書に登場する兒童人物の名性質等をなるべく一致させること等、細心の注意の下に編纂されてゐるのであるが、これらは兒童生活の全體的表現を期する「ヨミカタ」に於いて最もよく體現されてをり、單に國民科教科書として「ヨイコドモ」と一體たる關係にあるばかりでなく、理數科藝能科の各教科書と殆ど餘すところなきまでに連絡相卽してゐるのである。けだしこの期に於ける兒童は、見方感じ方理解の仕方に於いて未分化的であり、全體的直觀的である關係上、これによつて學習を未分化的全體的ならしめることを期するものである。

しかもかくの如く兒童心身の發達に卽應して細心の考慮をなすことは、決してかつての兒童中心主義の如く、兒童のために兒童を開放せんとする自由主義からなされるのでなく、どこまでも兒童を皇國民として錬成するための過程として教育的方法の遺憾なきを期する立場からなされてゐるのである。隨つてこの第一期と雖も、兒童の生活に卽し、その心

情理解に適應する限りに於いて、國體の尊嚴にめざめしめ、敬神崇祖の念に培ひ、高度國防國家體制の確立に資するやうな事項はつとめてこれを採擇し、「ヨイコドモ」「ヨミカタ」一體たる立場に於いて、互に提携し相補ひつつ國民科教科書たるの面目を發揮してゐるのである。

しかも「ヨミカタ」教材の特色は、かくの如き事項を決して理念的に注入するものでなく、どこまでも國語の力を通じて感動的に與へようとするものである。即ち國語の教材は、その表現をはなれて成立するものでなく、教材の精神は表現の進展と相俟つて次第に擴充し、浸潤するのである。かくの如くにして、「ヨミカタ」四卷を通じ、教材は彼此關聯し相互に展開發展しつつ、殆ど網の目の如く相結んでゐるのである。

先づ「アカイアサヒ」「ヒノマルノハタ」(卷一)「日本ノシルシ」(卷二)「富士の山」(卷四)に國土の誇が漸層し、これらが「二重橋」(卷三)「菊の花」「金しくんしやう」(卷四)を中核として國體の尊嚴を具象化し、これらと結んで「ハトコイ」と呼び、「コマイヌサン」と呼びかけ、「オミヤノ石ダン」を登り、「オハカノサウヂ」を

し、(以上卷一)「お祭」に參拜し、(卷三)「神だな」(卷四)を飾る一聯が敬神崇祖の精神を目ざめさせ、祖父の父を見る「ユメ」や、「机とこしかけ」の話や(以上卷二)祖父の語る「川」の話(卷三)が、兒童の生活を過去の傳統に結び、「シタキリスズメ」や「モモタラウ」や(以上卷一)「サルトカニ」「花サカヂヂイ」(以上卷二)の童話から、「うらしま太郎」(卷三)「早鳥」「羽衣」(以上卷四)の傳說、「國引き」(卷三)「白兎」(卷四)の神話への連繫が、歷史的色彩を次第に濃厚にする。あらゆる自然教材がこの國土の美しさをたたへて文學を育てるとともに、地理や理科を育てるのである。しかも「ユフヤケコヤケ」を歌ひ、「カクレンボスルモノ」を叫び、「ココハドコノホソミチダ」に遊び暮らし(以上卷一)「ねんねんころりよ」(卷二)の歌に夜の夢を結ぶ古謠の魅力が、今も兒童を健やかに育くんでゆくのである。

尊い國柄、美しい國土の四面は海である。「イケニフネ」を浮かべ、「日本ハウミノクニ」とたたへ(以上卷一)、「山ノ上」はるかに海を眺め(卷二)、遂に「海」へ來てその躍動の姿に驚喜する(卷三)。この海を越えて「ラジオノコトバ」が世界に擴がり、「西ハタヤケ」の滿洲をしのび(以上卷二)、「滿洲の冬」を眺め、「金の牛」の物

語を聞き、「支那の子ども」(以上卷四)を讀んで東亞新建設の相をまざまざと見る。そこで子どもらは「ラジオ體操」をし、「校庭の遊戯」をし、「ヘイタイサン」の畫をかき、「キヲツケ」の號令で兵隊ごつこをし、(以上卷一)「兵タイゴッコ」の劇を演じ(卷二)、「ヒカウキ」(卷一)や「らくかさん」(卷三)に夢中になり、あつぱれ「軍かん」通となり(卷三)、「こうあほうこう日」に感激し(卷三)、「海軍のにいさん」を喜び迎へ、「にいさんの入營」を送り、「病院の兵たいさん」を見舞つて、(以上卷四)やがては自分も大君の御楯と立ち、科學、國防の戰士となり、銃後のまもりを堅くする心構をつくりつつあるのである。

かく觀じ來れば、「ヨミカタ」の教材はその一つ一つが、それぞれの意義と感動を有するばかりでなく、それらが相卽展開するところにいはゆる高度國防國家體制をさながらに具現し、意義と感激をいよいよ深からしめるものがある。指導者はこの點に留意し、徒らに一教材に躊躇して抽象的理念を注入することなく、常に全般の教材を見通し、表現の具體に卽し、連絡の絲をたどりつつ取扱ふことが大切である。

なほ文字の提出に就いて在來の方法を改めた點を述べると、大體次のやうである。

(イ) 新出讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げなかつたこと

新出並びに讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げることは、國語讀本の長い傳統であるが、これがためにややもすれば國語指導卽文字教授の感を抱かしめ、指導方針を誤る向がないでもなかつた。殊に音聲言語の重要性を認め、音聲言語、文字言語兩面に亘つての理會力發表力を修練する國民科國語の立場からすれば、この方法は絶對に改める必要がある。よつて在來の方法を變更し、兒童用書の欄外に文字を掲げないこととしたのであるが、しかし兒童用書の卷末及び教師用書の各課に於いて仔細に指摘し、以て指導上の手がかりとした。もちろんかくの如き方法の變更は、決して文字の意義を輕く視たのでなく、國民科國語に於いては、國語そのものの指導を徹底せしめる點からして、ことばとともに文字指導の任務は寧ろ一層重要である

ことを考ふべきである。

(ロ) ひらがな初歩の練習を專らコトバノオケイコに讓つたこと

カタカナによる教材に習熟してから、これをひらがなに置きかへることに就いての在來の方法は、合理に偏して一時教材の質を低調ならしめ、却つて學習の實際に卽しないものがあつた。よつてひらがなの提出及び初歩練習は、專ら「コトバノオケイコ」に讓り、「ヨミカタ」と相俟つて習熟せしめることを期した。

(ハ) 漢字の提出

教材が單純で、しかも兒童の器械的記憶力の旺盛な時期に漢字を多く提出することが適切であることは、教育の實際に於いて意見の一致するところである。小學國語讀本が既にこれを或程度實行して來たのであるが、國民科國語教科書に於いては一層その程度を進め、第一期及び第二期に於ける漢字數を在來よりも多くし、第三期第四期に於いてはこれを減少して、專ら漢字使用の應用を自在ならしめ

ることを期した。

コトバノオケイコ

「コトバノオケイコ」は「ヨミカタ」に相卽して、兒童に國語活動をなさしめるための編纂物である。「ヨミカタ」と一體のものであり、「ヨミカタ」と同時にこれを使用せしめるものであるから、「ヨミカタ」の一課毎に「コトバノオケイコ」もこれに應じて課が設けられてある。

その內容は、「ヨミカタ」の教材の特質に應じてそれぞれ變化はあるが、大體に於いて「ヨミカタ」の教材を話すことに發展させる部分、發音・語法・カナヅカヒに注意せしめる部分、綴り方へ橋渡しをする部分、書き方を修練せしめる部分等から成立ち、時に教材を劇化し、補充的な教材を挿入した部分などもある。

要するに「コトバノオケイコ」は、兒童が「ヨミカタ」を理解する手がかりとなるものであるとともに、これにすがつて働くことによつて、自ら國語の

道を實踐するものである。又これを指導する側からいへば、讀み方指導の指針となり、その擴充ともなるのである。隨つて「コトバノオケイコ」の存在は、別段兒童の負擔を重くするものでもなければ、授業の時間に影響を與へるものでもないのである。

兒童にいろいろな言語活動をさせて、言語・文字を身につけさせることは、低學年の國語指導として極めて大切なことであるが、しかしそれは實際指導に於ける生きた問題によつてこそ生きた指導が行はれるのであつて、これを豫め教科書の上に規定することは、ややもすれば教材を死物たらしめ、指導を固定せしめる結果に陷りがちである。隨つて「コトバノオケイコ」は問題を極めて重點的に選び、取扱の基準と方向を暗示することに止めた。指導者はこの精神に鑑み、つとめて指導の實際に卽して問題を生かすことにつとめることが大切であり、特に煩瑣に陷るが如きは絶對に戒むべきである。

教師用書

「ヨミカタ」は國語教科書の中軸であり、これを兒童の國語活動にほぐしたのが「コトバノオケイコ」であるが、更にこの二者を包括して國語指導の全分野に擴充するのが、この「ヨミカタ」教師用書である。名は「ヨミカタ」教師用書であるが、實は國語教師用書なのである。

「ヨミカタ」教師用書は、「ヨミカタ」の教材に卽して教材の趣旨、文章、取扱の要點、注意すべき發音・文字・語句語法等備考の五項に分つて說明し、更に附錄及び綴り方指導要項、話し方指導要項が併せ掲げてある。今これらの項目に卽して簡單に說明と注意とを加へておく。

(イ) 教材の趣旨

主として教材を採擇した意義を說き、隨つて教材の目的を述べる部分であるが、讀み方教材の意義や目的は決して一言で盡くせるものでなく、見方によつていろいろの面に擴げて考へられるのが常であり、又或

程度それが當然でもある。大體、教材の思想感情に卽して解說したのがこの項で、それは專ら指導の心構ともなり注意ともなる部分である。決してそのままを兒童に與ふべきものではない。なほ卷一に限り、次の文章に關することもこの項に簡單に述べてある。

(ロ) 文章

教材を表現面に卽して說明した部分で、これも亦主として指導の用意として揭げたものであり、そのまま兒童に與へるものと考へてはならない。

(ハ) 取扱の要點

教材の如何なる點を如何に兒童に與へるかに就いて重點的に示したもので、卷一ではそれをやや順序的に說き、卷二以降は「讀むこと」「話すこと」「書くこと」「文字の指導」「ことばの仕事」等に別けて項目的に列擧してある。しかし何れにせよ取扱の重點を示すのが本旨であり、順序を說くのが本旨ではない。元來取扱の順序の如きは、指導の實際に卽してきまることであり、又指導者の好む方法によつてもきまることであるから、卷一と雖も決してその順序に從ふべきものと考へなくてよい。今、更にこれらの細目に就いて一通り說明する。

讀むこと は朗讀を主體とし、齊讀・微音讀・默讀等、或はその場合に應じ、或は兒童心身の發達の程度に應じて適宜採用さるべきであるが、要するに讀むのは文字言語を理解し、それを通して兒童の體驗や思想を豐富ならしめるのが目的である。隨つて「讀むこと」は決して直接に實物によつて理解させることでなく、文章を通すことによつて理解させるのが本體である。もちろん文章の理解を助けるために說明を加へ、又實物を觀察させることも或程度大切であらうが、それはどこまでも文章理解の手段であることを忘れてはならない。

なほ「讀むこと」は反復的に習慣づけることによつて正しくも讀み、理解に到達し得るのであるから、何れの兒童にも反復して讀ませるやうにすることが大切である。

しかも音聲言語指導の立場から、先づ「讀むこと」に於いて正しい發音の練習をさせ、訛音方言を矯正することが極めて肝要であり、それもできるだけ早期に於いて基準を示し、これによつて習慣づけるやうにすべきであるから、卷一に於いては特に發音上の注意が具體的に示してある。

「讀むこと」には當然解釋を伴なふ。いはゆるセンテンスメソッドの觀點から、最近語句の解釋を等閑視する傾向があるが、兒童の理解力を向上せしめるには、何を措いても反復朗讀させることと、語句を適切に解釋することが大切である。解釋はできるだけ具體的になすべきであり、低學年に於いては「ことばの仕事」と相俟つて動作に訴へさせ、又必要に應じては方言と比較して意味を把握させることも機宜を得た處置であらう。

話すこと　「讀み方」指導に於ける「話すこと」は極めて簡單な發表をさせることを目標とする。即ち教材を共通な話題として兒童と問答し、簡明

な話をさせることを意味するのであつて、指導者は絶えずその話に留意しながら、よきことばを取上げ、誤れることばを正し、つとめてことばとしてよき發表に導くやうにし、これによつて「話し方」の基礎練習をなさしめるとともに、「ヨミカタ」教材の理解に資するものである。しかも「ハイ」「イイエ」「何々デス」「何々ダト思ヒマス」「サウデハアリマセン」「マチガヒマシタ」「ヨクワカリマシタ」の如き發表を絶えず練習させ、これを身につけさせることが最も大切である。

在來も「讀み方」指導に於いて種々問答や話合は行はれたが、それは多く教材の意義に躊躇し、甚だしきは教材から或種の理念や思想を導き出さうとする底のものであつた。兒童の理解に負擔のある話題では、言語練習には役立たない。ここに「話すこと」といふのは、專ら兒童に言語の躾をなすとともに、教材に卽して兒童の心情を明朗に端的に發表させることを期するものである。

書くこと　「コトバノオケイコ」に鉛筆による「書き方」手本が示されてある

のでも、わかるやうに、この「書くこと」は、「書き方」指導を主體とするが、更になほ適當な書寫及び書取の指導をも含むものである。卷一・卷二に於いて手本に點線の文字が併記してあるのは、いふまでもなくそれをなぞらせることを意味するが、ただそれだけで終るのでなく、更に筆記帳に反復して書かすべきである。すべて、手本の分量は最少限度に止めてあるから、指導者はつとめて「ヨミカタ」の中から適當の教材を選び、書寫又は書取を行はせ、書くことによつて文章を理解させるとともに、文字の記憶を確實にし、又筆寫力を養成すべきである。なほ「書き方」指導に關する注意が附錄に掲げてあるから、藝能科習字と相俟つて適切な指導をなすことが大切である。

文字の指導　新出並に讀替文字を中心として指導することはいふまでもなく、常に書くことと關聯して文字の記憶を確實にすべきである。次にカナヅカヒに就いては、主として「コトバノオケイコ」に掲げられたものに就いて適切な指導をする。

元來、カナヅカヒの學習に關しては、これを非常に困難なものとして最初からその指導を放棄するものと、又反對に字音ガナの末に至るまで強制して兒童を無用に苦しめるものとがある。

カナヅカヒの指導に際し特に重視すべきは、それが我が國語の法則に關係し、隨つて廣く國民生活・國民感情にまで喰入つてゐる部分であつて、兒童にとつて將來漢字の中にかくれるやうな字音ガナの如きは、大部分讀ませる程度に止むべきであり、國語カナヅカヒと雖もカナ書にする習慣の少いものは、强ひてこれを穿鑿すべきでない。故にカナヅカヒの指導に當つて最も大切なのは、助詞と用言の語尾と、その他極めて少數のものに限られることになる。「コトバノオケイコ」には今日實際生活上極めて必要な部分を選擇し、法則的に關係あるもの、使用上極めて誤られ易いものを、或は類別的に或は對照的に排列して、兒童の理解と直觀に訴へ、且同じ種類のものを幾度か反復することによつて記憶の手がかりとした。指導者はこの點に留意して適切な指導をなす

ことが大切である。

ことばの仕事 言語を動作にあらはすことによつてその意味を理解させることは、低學年の指導に於いて極めて適切なことである。「コトバノオケイコ」には、「ヨミカタ」の教材中から、動作にあらはし易い短文を選んで掲げてあるが、敢へてこれに限らず適當の語句文章を選んで隨時動作化させるがよい。兒童劇はいはば全文を動作にあらはさしめるものである。なほこの外に、文章中に語句を記入させたり、語彙・語句によつて文章を作らせたりすることも「コトバノオケイコ」にその例が多いのであるが、これらは「讀み方」指導の擴充であるとともに、一面「綴り方」への橋渡しをするものである。

(二) 注意すべきことば 文字 語句語法等

地方的に誤られがちな發音・訛音方言等を指摘して矯正の手がかりとし、新出讀替の文字を掲げて文字指導の便りとし、又注意すべき語彙・語句・語法・修辞等を重點的に掲げて指導上の參考としたのがこの項である。特に卷一に於いては訛音方言等に關し、やや詳細に引用注意して發音の基礎練習に資してある。

アクセントに就いては、特に誤られ易いもの、同音異語に關するものに就いて注意を促す程度に留めてある。

(ホ) 備考

教材相互の連絡、「ヨイコドモ」の教材との連絡、他教科の教材との連絡を指摘して取扱上の考慮を促し、又極めて必要と思惟せられるものに限り、教材の參考資料・出典等を掲げたのがこの項である。

元來、「讀み方」教材は、文章そのものが教材であつて資料や原據は單なる素材に過ぎないのであるから、これによつてみだりに教材を補充したり、殊に單純化することによつて始めて教材となつたものを逆に複雜にしたりして、兒童を困惑せしめ、況んや資料原據によつて教材を變更するが如きは最も戒むべきである。かかる見地から、資料や出典の掲載はできるだけ少數の限度に於いてなしたのである。

附錄

附錄として次の四つのものが掲げてある。いづれも指導上の參考に資するものである。

新出讀替文字一覽

運筆順序

鉛筆による書き方指導上の注意

「ヨミカタ」の發音

右に就いては一々説明するまでもないが、ただ「ヨミカタ」の發音に就いては一言を要する。これはカタカナを發音符號的に使用し、「ヨミカタ」教材全部をこれによつて表記し、ガ行鼻濁音に記號を附したものである。

綴り方指導要項

話し方指導要項

「綴り方」「話し方」ともに教師の實際指導に俟つて始めて生かされるのであるから、特に教科書は編纂しないのである。しかも大切なことは、どこまでも國語指導の精神に鑑み、各分節が密接に提携して行はるべきことであり、「話し方」の如きは施行規則にも時間を特設しないことが建前となつてゐる。

この見地から新たに「綴り方」「話し方」ともに要項を定め、第一期乃至第四期に卽する指導段階を設け、更に各學年の指導に就いてその大綱を定めた。

なほ「綴り方」は右大綱の外に、參考として各學年の文題をも併せ掲げた。これら文題は、廣く「ヨイコドモ」「カズノホン」「自然の觀察」「ウタノホン」「エノホン」等の教材と連絡を取り、兒童生活の實際を考慮して選んだもので、かくの如くして「綴り方」に於いても亦國語表現の全體性の發揮を期するのである。

「話し方」はこの要項に定めたところに隨つて、一面には「讀み方」指導に卽

して基礎練習をなさしめ、一面には兒童の自由な發表を「綴り方」と結んで音聲言語の醇化をはかり、更に各教科の指導及び兒童の生活に卽して絶えずよき言語を躾けることを心掛くべきである。なほ、時に時間を特設する場合には、「綴り方」指導要項に掲げた文題を參考とし、これを話題として指導することも可能であらう。

掛圖

第一期に於いては「讀むこと」「話すこと」一體たる立場から、掛圖は「讀み方」教材の一部として、文章挿畫と一體的に取扱ふやうにすべきである。「ヨミカタ」から離れて、これと無關係に掛圖のみを取扱ふ弊におちいらない注意が肝要である。

各說

一　ラジオ體操

教材の趣旨

教材は、櫻の花の爛漫と咲いてゐる校庭で、全校の兒童が朝のラジオ體操をしてゐる光景をあらはした繪である。話し方・讀み方・未分化の教材で、兒童の實際の經驗や見聞と結んで、この繪を主題に先づいろいろの話をさせる。卽ち入學の喜びや、春の樂しさ、花の美しさ、元氣でほがらかなラジオ體操等に就いて話合をさせ、最後に體操の號令「一二三四、五六七八」に導き、特に「一二三四」を焦點として發音の訓練をする。

四拍子のリズムを有する叫び聲であるから、リズムの快感にひたらせつつ、大きく叫ばせ、正しく發音させる。發音の覗ひどころは、主として「イ」母音である。それは「イチ」の「イ」に限らず、「チ」も「ニ」も「シ」も「イ」が共通母音であることに留意して指導することが大切である。

取扱の要點

ヨミカタの繪(掛圖)のあらはす愉快で潑剌たる光景を讀みとらせ、兒童の體驗や見聞と結んで簡單に愉快に話をさせる。すべての兒童に話をさせることが大切である。しかも、指導者は兒童の勝手な話をよく整理しながら、最後にラジオ體操の號令「一二三四、五六七八」に導き、特に「一二三四」を當面の問題とする。

號令「一二三四」はリズムある叫び聲であるから、指揮棒を振り、又は體操の動作と結んで、リズムの快感にひたらせながら、兒童に大きく、ゆつくり叫ばせることが大切である。發音の基礎練習として叫び聲を教材とするのは、一つには、正しく發音せしめるためであることに留意して取扱ふべきである。

注意すべき發音

「イ」を「エ」と誤り、「チ」を「ツ」、「ニ」を「ヌ」または「ネ」、「シ」を「ス」と誤る地方は甚だ多い。これらは、その一つ一つを分離して別々に矯正することも大切ではあるが、常に母音「イ」を基礎として正すことが肝要である。その意味に於いて、「イチ」「ニ」「シ」の如き「イ」音を共通母音とする音の連續する本教材の叫び聲は、頗る有效と思はれる。敢へて本教材に限らず「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「リ」の發音の不完全な地方では、常に五十音圖のイ列の

聯關に於いて、基礎母音「イ」の矯正をもととする心掛が大切である。

備考

本課及び次の「校庭の遊戯」は、ヨイコドモ上「ガクカウ」と連絡して取扱ふ。自然の觀察一「學校の庭」、ウタノホン上「ガクカウ」と連絡して取扱に考慮する。

二　校庭の遊戯

教材の趣旨

教材は校庭に於ける兒童の愉快さうな遊戯をあらはした繪である。これも前課と同樣、話し方、讀み方未分化の教材で、兒童の實際の體驗や見聞と結んでこの繪を主題に、先づいろいろの話をさせる。繪の大部分は、校庭で一年の兒童が先生に導かれながら樂しさうに圓陣を作つて行進するところ、左の上部は上級の兒童が巧みに飛び箱の上で逆立ちをしてゐるところである。さういふことに氣づかせながら、次第に

話を進めつつ、「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」といふ歎聲的な叫び聲に導いて行く。これも大きく正しく、ゆつくりと發音させる。さうしてコトバノオケイコの繪と結んで、更に話合をさせ、「ウレシイナ」「オモシロイナ」「エライナ」のことばの練習をさせる。

發音練習の主たる覗ひどころは、「ウ」「オ」「エ」の三母音であるが、前課と關聯して「シイ」「ロイ」の發音にも或程度の指導を要する。

取扱の要點

ヨミカタの繪及び掛圖を中心に、兒童の體驗や見聞と結んで、簡單に愉快に話をさせる。指導者は兒童の話に注意し、よく整理指導しながら、「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」等の叫び聲をできるだけ兒童の話の中から拾ひ上げることにつとめる。

この三語を一通り發聲させてから、**コトバノオケイコ**二頁・三頁の繪と結んで、またいろいろの話合をさせ、ことばの內容を深める。

コトバノオケイコの繪は、二頁が入學祝に叔父さんからでも貰つた玩具の飛行機を飛ばしてゐる男の子と、叔母さんからでも貰つた人形を抱いてゐる女の子であつて、男

の子は飛行機を飛ばして「オモシロイナ」と感激し、女の子は人形を抱いて「ウレシイナ」の表情に充ちてゐる。三頁は犬の訓練の繪で、犬が高く跳躍してゐるのは、まさに「エライナ」の感を起させる。これらを話の主題として「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」の內容を深める。

この三語を、最初は別々にゆつくりと、後には或は三語を連續的に發聲させて、常に發音――特に母音「オ」「ウ」「エ」の正しい練習をさせる。時に、「オー」「ウー」「エー」の如く、母音を長く引き、「オーオモシロイナ」「ウーウレシイナ」「エーエライナ」の如く發音させて、母音を正しく認識させ、正しく大きく發音させる。なほ「ウレシイ」の「シイ」、「オモシロイ」の「ロイ」、「エライ」の「ライ」は、「イイ」「オイ」「アイ」の重母音を含んでをり、「イイ」は「イ＝イ」でなく、「イ、イ」であつて、寧ろ「イー」に近く、「オイ」「アイ」は、「オ＝イ」「ア＝イ」でなく、「オ、イ」「ア、イ」である。但し、ここに重母音といふのは嚴密な意味で歐米語のDipthongと同一のものでなく學者によつては連母音といつてゐる者もある。

注意すべき發音

「ウ」を「オ」と混同し、「エ」を「イ」と混同する地方では、特にこの教材によつて、母音の練習をなす必要がある。又「ウレシイ」「オモシロイ」の「シ」を「ス」と訛る地方では、前課と關聯し

て矯正に心掛くべきである。
更に「オモシレ」「エレ」又は「オモシレー」「エレー」の如く、「オイ」「アイ」を「エー」と訛る地方もあるから併せて正すべきである。

三　アカイアサヒ

教材の趣旨

東亞日本の春の夜は明けて、東に眞紅の太陽がのぼる。「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」はこの壯美に感動した兒童の叫び聲である。

始めて文字にあらはされた文章を教材とする。しかし、ここで讀み方と話し方が全く分化したものと考へてはならない。教材はなほ當分挿畫と組んで多分に話し方を要求し、その歸結として文字教材があり、文字教材に卽して書き方も必然に起つて來る。「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」は極めて素朴な文である。眞紅な朝日の美しさに對して感

激的に叫ばれた聲である。

發音としては、母音「ア」の基礎練習をするとともに、前課の「エライナ」と關聯して重母音「アイ」を含む「カイ」を練習させる。「ヒ」の發音も指導を要する。

第一課のラジオ體操は爛漫たる櫻花の下で行はれてゐるが、本教材では壯麗な朝日が正面に出て來てゐる。自然に對する國民的な感情が教材の中に溶け込んでゐることに留意して取扱ふべきであるが敢へてそれを兒童に說明すべきでなく、挿畫なり、文なり、話合によつて、自然に感得させる程度に止める。

取扱の要點

挿畫（掛圖）によつて先づ話をさせる。春の朝であること、子どもが五人ゐること、犬がゐること、みんな喜びに滿ちてゐること、景色の美しいこと、眞紅の太陽が今のぼること、子どもたちがそれに感動してゐること、彼等が何といつてゐるか、などの話合から文章の取扱に入る。

兒童は始めて文字に接するのであるが、大部分の兒童はカタカナのいくつかは知つてをり、殊に父兄に敎へられて、この文を初から讀むであらう。もちろん讀みは素朴で、文字を離れた暗誦的のものであらうが、それを拾ひ上げて、正確に、できるだけ自然に文字と讀みとを結合させて行く。

先づ發音に注意して指導する。第一課、第二課に續いて、ここでは「アカイ」「アサヒ」によつて母音「ア」の基礎練習をする。次に重母音「アイ」を含む「カイ」の發音に注意して指導する。ここで**コトバノオケイコ**四頁の挿畫「タヒ」「アヒコ」に就いて話合をさせ、「タヒ」「アヒコ」の發音と聯絡して「アカイ」の「カイ」の發音を理解させ、練習させる。文字を一字づつ指でさせて讀ませることを敢へて不可とするのではないが、それがために「アカイ」といふやうな讀みくせをつけさせてはならない。どこまでも「アカイ」といふことばの發音を基準とし、特に重母音を含む「カイ」の發音を正しく指導すべきである。更に「アサヒ」に就いては「サ」の發音、及び特に地方的に訛られがちな「ヒ」の發音を矯正することに注意を要する。

かうして正しく讀むことができるやうになれば、**コトバノオケイコ**四頁によつて文字を書かせる。筆順を正しく指導し、點線の上を鉛筆でなぞらせ、更に筆記帳に書かせて正しく書くことに馴れさせる。鉛筆の持方は絶えず指導する。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「ア」母音はさして誤られることはないと思はれるが、地方により又兒童によつて樣々であり曖昧であるから、口を十分開かせて明瞭に發音させる。「カイ」は「カ＝イ」でなく「カイ」である。「アヒコ」「タヒ」又は返事の「ハイ」等と關聯して明瞭に、しかも自然に發音するやうに導く。（「アカイ」と「タヒ」「アヒコ」はカナヅカヒを異にするが發音としては共通である。）又地方により「アキャー」「アケー」などと訛るものは更に矯正的指導が大切である。

幼兒語的發音のまだぬけきらないところから、「サ」を「シャ」と訛る者は、「サラ」「サクラ」等適切な例と關聯してできるだけ早く矯正につとめる。

「ヒ」は地方により「フ」と混同し、又「シ」「フイ」と訛るところがある。これらはハ行の關聯、イ列の關聯に於いて正し、なほ「ヒバチ」「ヒシモチ」等適當な例によつて矯正する。

文字　新字――**ア　カ　イ　サ　ヒ**

語句語法　「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」は極めて素朴原始的な表現であるが、「アカイゾ、アサヒダ」といつた氣持の文的表現で、決して「アカイアサヒ」といつた靜的な句

的表現ではない。もちろんかうした解釋を兒童に示すべきでなく、讀みの上にさういつた氣持をあらはすだけで十分である。

四　ハトコイ

教材の趣旨

さしのぼる朝日に對する感動から、神社のお參りに展開する。先づ神社の參道の敷石に遊んでゐる鳩が、子どもの興味の中心となつて「コイ、コイ」と呼びかける。挿畫(掛圖)と兒童の體驗見聞とを結んで話合をさせ、その結果この叫び聲を拾ひ上げて行くことは前課と同樣である。

發音としては重母音「オイ」を含む「コイ」に重點がある。

なほ教材は神社の崇敬、動物の愛護等の精神にふれてをり、「ハト、コイ、コイ」は後者の具體的表現でもあるが、さういつた精神を正面から說明すべきでなく、自ら感得させる程度に止める。

取扱の要點

繪によつて先づ話をさせる。神社のこと、早朝の參拜のこと、その體驗感想、神社にゐる鳩のこと、鳩のかはいらしいこと、鳩に豆をやること、繪の子どもが鳩を呼んでゐること等から「コイコイ」の呼聲を導き出して、教材の文章の取扱に入る。

讀み及び書くことは前課に準じて適當に指導する。

發音は重母音「オイ」を含む「コイ」を特に留意して指導する。「コ=イ」でなく「コイ」である。

コトバノオケイコ五頁の挿畫に「コヒノボリ」があり、その下の子どもは「オーイ」と呼んでゐる。これに就いて話合をさせ、「オーイ」の呼聲を基礎とし、「コヒノボリ」及び「コイ」の發音を練習させる。なほ前課と關聯して「カイ」「コイ」の正しい發音の區別と類似を知らせ、練習させる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　分析的に指導して「コ=イ」と發音するやうなくせを附けてはならない。又地方により「コイ」を「ケー」「コー」と訛るところでは、矯正につとめる。

文字　新字――ハ　ト　コ

語句語法　「ハト、コイコイ」は「ハトガキル。コイコイ」といつた氣持の表現である。「ハ

トヨ、コイコイ」と解釋しては實際生活のことばとしてやや無理がある。兒童にかうした解釋を述べるべきではないが、ただ讀みの上にその氣持をあらはし、「ハト」で句切り、やがて「コイコイ」と續けて讀むやうにする。

五　コマイヌサン

教材の趣旨

神社におまゐりした子どもが、やがて左右に並ぶコマイヌの前を通る。何氣なくコマイヌに呼びかけてみた。それが「コマイヌサン」である。見ると向かつて右のコマイヌは口を開けてゐる。「ア」と答へたやうに思はれる。今度は左のコマイヌに「コマイヌサン」と呼びかける。これは口を閉ぢてゐるから「ウン」と答へたのであらう。教材はこの時期の兒童の空想卽現實の心理に卽して、素朴な對話形式の上に成立つてゐる。

挿畫(掛圖)と兒童の體驗とを結んで、コマイヌのことに就いて話をさせ、適當にこの文章に導入する。

發音としては「サン」「ウン」による鼻音の練習をなし、又「イ」「ア」「ウ」の母音を復習させる。

前課と關聯して神社尊崇の念に培ふ。

取扱の要點

豫め適當なコマイヌの實物を選定しておいて、理數科の自然の觀察などの機會に、そのコマイヌのある神社に參拜させ、コマイヌを觀察させておく。コマイヌにはいろいろあるから、(備考參照)特にこの教材に適當なのを見せる必要がある。

先づ挿畫(掛圖)と見聞とに基づいてコマイヌの話合をさせる。この時期の兒童の空想現實未分化の心理に訴へて、「コマイヌサンと呼びかけると、一方は口を開けてゐます。何と返事をしたのでせう。」「一方は口を閉ぢてゐます。何と返事をしたのでせう。」等と發問しながら、次第に文章に導入する。「ア」「ウン」は特に長く「アー」「ウーン」の如く取扱ふ方が發音練習に役立つであらう。

發音として特に注意すべきは、「ザン」「ウン」の鼻音の基礎練習で、鼻音「ン」は、わが國では單獨に發聲されることが殆どなく、上に來る音に伴なつて發音されるのであるから、**コトバノオケイコ**六頁の「インキ」「エンピツ」「イヌノウンドウクヮイ」(ウンドーカイと發音するのを標準とする)等と併せて發音を體得練習させる。(その前に**コトバノオケイコ**の挿畫によつて適當に話合をさせることは、前課に準じる。)

次に「コマイヌ」及び「イヌノウンドウクヮイ」によつて「イヌ」の發音を正確にし、更に「ア」「ウン」によつて母音「ア」「ウ」を復習させる。

讀み及び文字を書くことに就いては、大體前課に準じて行ふ。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音 「イヌ」を「エヌ」「エン」「エニ」「イニュ」「イン」「エニュ」などといろいろ訛る地方があり、又兒童によつていろいろ誤ることがあるから、注意して正しく指導矯正すべきである。「コマイヌ」は「コマ」と「イヌ」の複合語で、「マ」と「イ」は「アイ」重母音を含む「マイ」でなく「コマイヌ」と正しく發音せしめる。

「ウ」を「オ」と混同し、「ウン」を「オン」、「ウンドウクヮイ」を「オンドウクヮイ」などいふ地方では、母音「ウ」の矯正が大切である。

文字 新字——マ ヌ ン ウ

備考

コマイヌには種々あつて、角のあるもの、ないものがあり、又兩方共に口を開けたもの、兩方共に口を閉ぢたものもあるが、向かつて右にあるものが口を開け、左にあるものが口を閉ぢてゐるのを多く見かける。教材はこの最後のものによつた。

地方によつては「コマイヌ」といはず專ら「カラシシ」で代表されてゐる。元來コマイヌとカラシシは、別のものであると思はれるが、ここではさうした穿鑿をしないで「カラシシ」といふ地方では、それがコマイヌであるとして取扱つて差支ない。

「ア」「ウン」は元來佛教の阿吽から來てゐるが、ここでは決してさうした問題にふれるべきでない。ただ子どもが「コマイヌサン」と呼掛けたのに對する返事として輕く取扱ふ。又吽の發音は元來母音を含まぬ「ン」又は「ム」であるが、我が國語の發音に卽して「ウン」と發音すべきである。

六　ヒノマルノハタ

教材の趣旨

天長節の朝である。これを前課の發展として天長節の早朝、神社におまゐりをし、歸途どこかで大空にひるがへるヒノマルノハタを見かけて、感激的に「バンザイ」を叫んだと見れば、教材としてなほ深みが出るであらう。（さうすれば、「アサヒ」以降は一脈の關聯を持つことになる。）

挿畫の中に子どもは出てゐない。それは「アサヒ」の構圖と重複するからであるが、掛圖には子どもが添へてある。

天長節のこと、日の丸の旗のことの話合から、この教材の文章に導入する。卷頭のラジオ體操の櫻の花以降、國民的感情はここに至つて高調する。

取扱の要點

挿畫（掛圖）を中心として、天長節のこと、日の丸の旗のことの話合をさせ、特に日の丸の旗に就いては、旗の美しいこと、祝日や祭日などにはそれを掲げること、日の丸の旗は日本の國旗であること等を適當に話合の中心として展開させる。挿畫の右端の木の若葉も天長節らしい自然であることに氣づかせる。

日の丸の旗を見て「バンザイ」と叫ぶのは、國民的感情の高調した場合で、ここでは特に天長節と關聯して意義のあること、及び畫中の日の丸が如何にも雄麗で見るものをして自ら萬歳を叫ばしめるものがあることに留意して、適當に教材の文章を取扱ふべきである。

發音としては「ノ」「ル」「タ」「バ」「ザ」等の新しく出た音を文章に卽して指導し、特に兒童に困難と思はれる「ザ」「ル」に注意し、又前課と聯關して「ヒ」、鼻音を含む「バン」「アイ」の重母音を含む「ザイ」等を適當に練習させる。

なほ**コトバノオケイコ**七頁の挿畫に就いて話させ、「クルマ」「ヒバチ」「ヒバシ」「サザエ」等の語を拾ひ上げて、「ル」「ヒ」「ザ」の練習を擴充する。

讀むこと、書くことに就いては前課に準じ、**コトバノオケイコ**七頁の文字を正確に書かせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音　「ヒ」を「フ」又は「フィ」と誤り、「マル」を「マー」と訛る地方では、これまでの教材と聯關して矯正につとめる。「ハタ」を「ハダ」と訛る地方では、その矯正も大切である。「バンザイ」を「バンジャイ」と誤るのは幼兒語的な發音の拔け切らないものであるから、つとめて速かに正させるやうにする。

文字　新字――ノ　ル　タ　バ　ザ

語句語法　「ヒノマルノハタ、バンザイ、バンザイ」は、大體「ハト、コイコイ」と似た趣の表現で「ア、ヒノマルノハタダ。バンザイ、バンザイ」といつた氣持のあらはれであるから、その心持を讀みの上にあらはし、「ヒノマルノハタ」と句切つて「バンザイバンザイ」を叫び聲らしく讀ませる。

備考

ヨイコドモ上「テンチャウセツ」と密接に連絡して取扱ふ。カズノホン一（三頁）、ウタノホン上「ヒノマル」、ヱノホン一「ハタ」「ハタヲアゲル」と連絡して取扱に考慮する。

七　ヘイタイサン

教材の趣旨

前課の「ヒノマルノハタ」と關聯し、ヨイコドモの天長節の觀兵式から呼起される兒童の遊戯的衝動をとらへて、兵隊の行進を遊戯的に表現した教材である。挿畫（掛圖）もこれに卽應して兒童の描く畫によつてあらはされてゐる。國防的意義を兒童の生活によつて表現した教材としても注意すべきである。

「ヘイタイサンススメススメ」と「チテチテタ」とは不可分の教材であるが、便宜上これを分けて取扱つても差支ない。「ヘイタイサンススメ」は、畫中の子どもの描く兵隊の行進から、自ら呼起される韻律的な叫び聲であつて、この韻律の興味が、畫中の男の子をして兵隊を續々と描かせ、見てゐる女の子はそれをはやしてゐるやうな趣である。

この叫び聲の韻律はやがて次のラッパの旋律を呼起す。「チテチテタ」はドトタテチの階名によつて唱へられるラッパの旋律で、一般の兒童に廣く唱誦されてゐる。ヨミカタの教材であつても、この部分は曲譜をはなれては絶對に成立しない。發音としては、「ヘ」の長音「ヘイ」、サ行音の連續「ススメ」及びタ行音の連續として注意すべきである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)によつて先づ話させる。畫中の男の子は兵隊の繪をかいてゐること、女の子がそれを見てゐること、男の子はいくつもいくつもかきつづけてゐること、ラッパを吹いてゐるヘイタイがかいてあること、女の子たちはヘイタイの繪を見ながら、拍子を取つて何かいつてゐること等から「ヘイタイサンススメススメ」の文章を讀ませ、特にその韻律的表現に隨つて讀ませる。

「ヘイタイ」は「ヘータイ」と發音するを標準とする。「イ」によつてあらはされるエ列長音、例へば「テイ」「ケイ」「セイ」等、すべて「テー」「ケー」「セー」と發音させることにつとめる。「ヘイタイ」の「タイ」は重母音「アイ」を含むことに留意して練習をさせる。

「ススメ」は、サ行音「ス」の連續として、特に發音の練習をさせる必要がある。又「シ」「ス」の區別の曖昧な地方では、「イ」「ウ」の母音と關聯して、正確な發音をさせる。

なほ**コトバノオケイコ**八頁の挿畫によつて塀の上に止つてゐる雀を話題としていろいろ話させ、「ヘイ」(ヘー)「スズメ」の語によつて發音練習を擴充する。

「ヘイタイサンススメススメ」の韻律は、やがて自ら次の「チテチテタ」の喇叭の旋律を呼起す旋律であるから、韻律とともに音の高低をも合せて讀まなければ意味をなさず、寧ろ滑稽になるであらう。

コトバノオケイコ九頁の挿畫に就いて話合をさせ、行進ラッパの旋律を更に深く味はせる。

コトバノオケイコ八頁・九頁によつて文字を正確に書かせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「ヘイタイ」を「フェータイ」と訛り、「ススメ」を「シシメ」と訛る地方では矯正を要する。「チテチテタ、トタテテタテタ」はタ行音の連續で、發音はやや困難のものに屬するから、くりかへし練習させる。「ツテツテ」と訛る地方では矯正する。

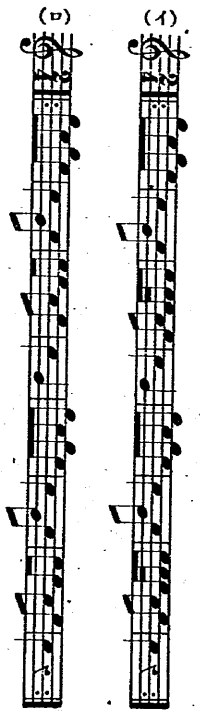
文字　新字――ヘ　ス　メ　チ　テ

語句語法　「ヘイタイサン」は呼掛であり、「ススメススメ」は命令文で兒童の願望的意欲の發現である。

備考

ヨイコドモ上「テンチャウセツ」の發展として取扱に考慮する。

「チテチテタ、トタテテタテタ」は、速歩行進の喇叭の旋律で、これを樂譜にあらはせば次のやうである。



元來は(イ)によつて唱へられ、これによれば「チテチテタ、トタテッテテタテタ」となるが、今、これを單純化して(ロ)による唱へ方を採つたのである。

八　アヒル

教材の趣旨

アヒルが地上をややあわて氣味に急いで歩いて行く情景を主題とした教材である。子どもに追はれた時など、よく見受けられるアヒルの行動である。

「ガアガア」はいふまでもなくアヒルの鳴聲であつて、實際は「グェグェ」或は「ギャギャ」といふやうな聲であるが、多少類化して「ガアガア」といつたのである。

「ヨチヨチ」はアヒルの走り行く恰好で、水禽であるアヒルが地上を走るとき、尻をふつてよちよち歩くやや滑稽な姿をあらはしたのである。

發音としては、濁音「ガ」を指導し、同時にその長音「ガア」を指導する。濁音としての「ガ」は、やがて第十二課に出る鼻濁音「ガ」の指導の前提として

大切である。

取扱の要點

豫めアヒルを觀察させておけば、指導上都合がよいであらう。

挿畫（掛圖）を中心に、兒童の見聞を語らせる。アヒルは水の上を上手に泳ぐこと、地面の上を歩くのは不得意であること、アヒルがあわてると、「ガアガア」といひながらお尻をふつてよちよちと走ることなど話合をさせて、文章に導入する。語の最初に來るガ行濁音は單純の濁音で、「ガアガア」はそれである。（「ガラス」「ガタガタ」等も同樣である。）これは、第十二課の「ソラガハレタ」「ウシガナク」の「ガ」の鼻濁音を指導する前提として基礎練習をさせるものである。

そこで**コトバノオケイコ**十頁の挿畫に就いて話合をさせ、「グンカン」「ゲタ」「ゴイシ」「ゴバン」等によつて、ガ行濁音を會得させ、練習させる。

「アヒル」の「ヒ」「ル」は、「アサヒ」「ヒノマル」等と關聯して、正しく發音の練習をさせる。

文章は童謠的な叫び聲であるから、讀みには韻律を生かし、大きく正しく讀ませる。

表現の滑稽味を讀みとらせるにはアヒルの樣子を動作にあらはさせつつ讀ませるのも一つの方法である。

コトバノオケイコ十頁によつて、文字を正確に書かせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「ガア」は長音であるから「ガー」と發音させる。「ガア」ではない。

「アヒル」を「アイル」と訛る地方ではその矯正も大切である。その外「アフル」「アヒリ」「アフィリ」などはいづれも矯正することが大切である。

文字　新字――ガ　ヨ

語句語法　「カアカアカラス」などと同樣、兒童的な語法によつた表現である。「ガアガア」「ヨチヨチ」は「アヒル」といふ名詞を修飾するのでなく、「アヒル」の動作を修飾する副詞であるから、述語はなくても表現は自ら動的である。

備考

自然の觀察一「春の野」に於いて、豫めアヒルに就いて觀察させておけば、取扱に便利であらう。

（以上　四月）

九　ハシレハシレ

教材の趣旨

アヒルの行進から發展して、春季に行はれる學校の運動會を教材の主題とする。挿畫が示すやうに、徒競走に於いて白熱する應援の聲を以て、韻律的に力強く表現されてゐる。多勢の者の交錯した聲によつて成立つてをり、特に「シロカテ」と「アカカテ」とは別々の聲であることに留意し、取扱の上に生かす必要がある。

運動會に於ける體驗や、見聞を話させ、この教材に導入して明朗快活の氣性を養ふ。

「ハシレ」「シロ」「カテ」の「シ」「レ」「ロ」「テ」等發音として指導を要する。

取扱の要點

運動會に就いていろいろ話させる。運動會で自分のしたこと、自分の級のしたこと、

上級生のしたこと、何が一番面白かつたか、白組赤組のこと、徒競走のこと、應援のことなどを話させ、更に挿畫(掛圖)を中心にして話合をさせてから、文章に導入する。

發音を正しく指導する。「ハシレ」「シロ」「カテ」等發音上注意すべきものがある。

コトバノオケイコ　十一頁の挿畫によつて話合をさせ、「ハシ」「ハスノハナ」の語に就いて練習させる。なほ「シ」「ス」の混同はイ列の關聯に於いて正すがよい。

讀みは、韻律を生かすこと、力強く讀ますこと等何れも大切であるが、特に「シロカテ」と「アカカテ」とは、叫ぶ者が別であることに留意し、適當に扱ふ必要がある。例へば全級の兒童を二組に分けて、「ハシレ」「ハシレ」「シロカテ」「アカカテ」と交互に齊讀させれば、その趣が兒童にも理解されるであらう。

コトバノオケイコ　十一頁によつて、文字を正確に書かせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「ハシレ」を「ハスレ」「ハシデ」と訛り、「シロ」を「スロ」「シド」「シト」と訛り、「カテ」を「カデ」と訛る地方では、十分矯正につとめなくてはならない。

文字　新字――シ　レ　ロ

語句語法　「ハト、コイコイ」「ヘイタイサン、ススメ、ススメ」などと同樣、命令の語法によ

つてできた教材である。命令形は、兒童の希望的意欲の表現であつて、兒童の言語として非常に一般的である。

備考

春秋二季に行はれる運動會の行事、及びカズノホン一（七八頁）と關聯して取扱に考慮する。

十　ココマデオイデ

教材の趣旨

家庭生活の一風景を主題とする。あんよを始めたばかりの幼兒に「オイデオイデ」「ココマデオイデ」など呼びかけながら、愛撫の中に歩行の練習をさせるのが、日本の家庭の一般であるが、その時に呼びかけることばを韻律的な童謠風に表現した教材である。挿畫（掛圖）によると、かう呼びかけてゐるのは幼兒の兄であり、その姉が幼兒のそばに立つて

ゐる。文章と挿畫と組んで、家庭に於ける兄弟愛があらはされてゐる。兄が一年生で、姉は三年生くらゐと見て、兒童に先づ話させ、次いで讀みにはいるべきである。發音としては、「デ」「ソ」が新しく提出された音であるが、「ココマデ」「ソロソロ」の語に卽して指導上種々注意を要する。「オイデ」には「オイ」の重母音がある。

取扱の要點

家庭に於ける兒童の體驗見聞等に基づいて、挿畫（掛圖）を中心にいろいろ話させる。小さい弟や妹のこと、それらのかはいいこと、何といふ名であるかといふこと、おとうさん、おかあさん、おぢいさん、おばあさんなどがおかはいがりになること、自分たちがどんなに弟や妹をかはいがるかといふこと、やつと歩きかけた子どもを歩かせる時何といふか、などの話合から、この文章を讀ませる。韻律のある文章であるから、できれば拍子を取つて讀ませるやうに指導するがよい。

發音としては「ココ」「マデ」「オイデ」「ソロソロ」等を正確に指導する。「オイデ」の「オイ」は重母音で、「オイ」である。「オ」と「イ」とを分解して「オ＝イ＝デ」など讀むくせのつかないや

うにしなくてはならない。

コトバノオケイコ 十二頁の挿畫によつて話合をさせ、「デントウ」「デンワ」「ソロバン」等の語を拾ひあげて「デ」「ロ」の發音練習を擴充する。なほ地方によつては前課と關聯して「レ」「デ」の發音の混同を正し、明瞭に發音させることも大切である。

コトバノオケイコ 十二頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば全文を書かせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 地方によつては、「コ」を「ゴ」といひ、「マデ」を「マンデ」といひ、「オイデ」を「オイレ」、「ソロソロ」を「ソドソド」などと訛るのがある。いづれも矯正につとめる。

文字 新字——デ オ ソ

語句語法 「オイデ」は動詞の「イデ」(出デ)に敬語「オ」の添はつたもので、「オイデ」は「オイデナサイ」が略された形である。元來「イデ」(出デ)は文語的語法で、口語では「デ」となるべきであるが、敬語法としては文語の形がそのまま固定して、口語に用ひられるのである。「ナサイ」の略された形は、親しい間、目下の者に對して用ひられる。この教材も命令的語法によつて表現されてゐるが、敬語が添つてゐるだけに柔か

であり、そこに幼者に對する愛撫の心もあらはれてゐる。

十一 カミフウセン

教材の趣旨

紙風船をもつて遊ぶ兒童の遊戯を主題とした教材である。紙風船をふくらます操作、卽ち「フウフウ」と吹くことと、その結果紙風船が大きくふくらんだよろこびの叫びとを結んで、韻律的に表現してある。もちろん、そこには紙風船をついて遊ぶ心が躍動してゐるのである。

發音としては「フ」「ク」「ミ」「セ」が新しく出て來るが、同時に「フ」の長音「フウ」にも注意を要する。「フウ」「フ・クレタ」「カミフウセン」等の語に卽して練習させるべきである。

取扱の要點

先づ紙風船に就いての體驗を、挿畫(掛圖)を中心に話させる。紙風船の美しいこと、そ

の色のこと、どうしてふくらますかといふこと、大きくふくれた時のよろこび、つく檢快さ、畫中の男の子は何をしてゐるかといふこと、女の子は何をしてゐるかといふことなど話合をさせてから、文章に導入する。

紙風船をふくらます時、「フウフウ」と吹く音は、實際は無聲音であるが、ことばとしてあらはすものは有聲音である。隨つて言語指導の上からは「ゴー」の音でなく「hu」の音による。なほ「フウ」は「フ」の長音「フー」で、「フ=ウ」と發音させてはならない。

前課及び前々課と聯關して「レ」「デ」の區別を明瞭にし、練習させる。

「カミフウセン」の「セ」は、地方により指導上注意を要する。**コトバノオケイコ**十三頁の挿畫に就いて話させ、「センセイ」(センセー)「セイト」(セート)の語を拾ひ上げて、「セ」の練習を擴充する。

コトバノオケイコ十三頁によつて文字を正確に書かせ、なほ全文をも書かせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音 「フクレタ」を「フグレタ」「フクデタ」など訛る地方や兒童がある。前課の「ココマデ」「オイデ」及び前々課の「ハシレ」などとと關聯比較して明瞭に指導し、矯正する。

「カミフウセン」の「セ」は「シェ」と訛る地方に於いて特に正しく發音するやうに指導し、

今後も常に矯正に心掛くべきである。

文字 新字——フ ク ミ セ

語句語法 「フウフウフウ」は紙風船を吹く擬聲音で、これによつて「フウフウ」と吹いてゐることをあらはしてゐる。次の「フクレタ、フクレタ、カミフウセン」は、吹いた結果大きく美しくふくれた喜びを叫聲的にあらはしたもので、「カミフウセンガフクレタゾ」の心持の表現である。これを「フクレタカミフウセン」の靜的な句の表現と見てはならない。

「フクレタ」の「タ」は完了の助動詞である。

十二　ウシ・ヒバリ

教材の趣旨

自然の觀察の「春の野」と聯關して、晩春の悠々たる自然を主題として教材とした。「ウシガナク」と「ヒバリガアガル」とは一聯の教材で、挿畫は

見開きになつてゐる。いはば晩春二題といふところである。兩者を一緒に取扱つても、又便宜上分けて取扱つても差支ない。

「ソラガハレタ」――春は何れかといへば、薄ぐもりにくもりがちであるが、既に晩春初夏の候となれば一般にかがやかしく晴れ渡る。日は悠々として長い。その悠々たる趣を、牛の聲と、雲雀の歌とであらはしたのであるが、さういつた自然の高い趣を兒童に直接に與へようとするものではない。兒童の好きな動物、殊にその好む鳴聲によつて、春の趣をそれとなく感ぜしめようとするものであり、挿畫もその趣をあらはしてゐる。かうした教材による自然の趣が、無心の兒童に潜んで、やがては「もののあはれ」をわきまへ得る日本人に育つて行くことを忘れてはならない。發音としては「ラ」「ナ」「モ」「ピ」「リ」が新しく提出される外に、鼻濁音としての「ガ」及びオ列の長音「モウ」、イ列の長音「ピイ」等、それぞれ指導上注意を要するものがある。

取扱の要點

先づ話合をさせる。自然の觀察一の「春の野」乃至「草花とり」の觀察と連繫し、體驗見聞と結んで挿畫(掛圖)を中心に話させる。牛を見たことがあるか、牛はどういつてなくか、雲雀を見たことがあるか、雲雀の聲を聞いたことがあるか、雲雀はどういつて鳴くか、畫中の牛は何をしてゐるか、ひばりはどこにゐるか、その外に何がゐるか、天氣はよいかどうか、天氣がよいと空はどうなるか、天氣のよい日、牛の聲を聞いたり、雲雀の聲を聞いたりするとどんな感じがするか、等に就いて適當に話させてから、文章を讀ませる。本課では「ラ」「レ」「リ」「ル」等のラ行音が多い。「シロ」「ハシレ」「ソロソロ」等と關聯し、兒童により地方によつて訛られがちなラ行音を十分訓練する。

次に本教材で鼻濁音「ガ」が始めて出る。卽ち"nga"を標準とするのであるが、地方によつてはこの發音が中々困難である。**コトバノオケイコ**十四頁の挿畫によつて話合をさせる。そこには手拭をかぶつたおかあさんが掃除をしてをり、「リンゴ」「カゴ」があり、ダルマには「ヒゲ」がある。「テヌグヒ」「リンゴ」「カゴ」「ヒゲ」の「グ」「ゴ」「ゲ」は何れも鼻濁音であることに注意し、「ソラガ」「ウシガ」「ヒバリガ」の「ガ」とともに鼻濁音の指導をする。しかしこれは一回や二回の指導では何の効もないから、今後教材に卽して常に鼻濁音に注意し練習させることが大切である。なほ「テヌグヒ」の「グヒ」は、重母音

「ウイ」を含んでゐるから、「アイ」「オイ」に聯關して指導すべきである。

「モウ」は、「モ」の長音で「モー」と發音させる。**コトバノオケイコ**十四頁の挿畫におかあさんが持つてゐる「ハウキ」(ホーキ)と併せて、オ列の長音を練習させる。

「ビイチク」の「ビイ」も長音「ビー」である。**コトバノオケイコ**十五頁の挿畫に就いて話させ、おもちやの笛の音から「ピー」の音を練習する。本教材は發音指導が甚だ複雜であるから、「ウシ」と「ヒバリ」とは別々に取扱ふ方が便利であるかも知れぬ。

コトバノオケイコ十四頁・十五頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書かせる。

コトバノオケイコ十五頁に雲雀の畫をのせて、參考に供した。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　語中又は語尾のガ行音は鼻濁音(nga ngi ngu nge ngo)を以て標準とする。

中國・四國・九州・沖繩及び新潟・群馬・埼玉・千葉・岐阜・愛知の一部は、鼻音で發しない地方であるが、少くとも鼻濁音が標準であることを認識させ、絶えずその練習をなさしめる。

「モウ」は文字に拘泥して"mou"と發音させてはならない。すべてオ列の長音はカナ

ヅカヒの如何に拘らず"oi"であつて"ou"でない。

「ヒバリ」は訛音の多いことばで、「ヒバル」「ヘバル」「フバリ」「シバリ」「ヒワリ」等いろいろであるから、矯正が大切である。

「テヌグヒ」の「グイ」は「ウイ」の重母音を含む。「テネゲー」「テネゴー」などと「ウイ」の重母音は訛られがちであるから、これも注意を要する。その他地方により「ハレダ」「ナグ」「ビイチグ」「テンマンデ」などの訛音を注意して矯正する。

文字　新字――ラ　ナ　モ　ビ　リ

語句語法　本教材に於いて始めて「何ガドウスル」といふ文型が出る。「ウシガナク」「ヒバリガアガル」がそれであり、「ソラガハレタ」はその完了形である。「アカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ」「フクレタ、フクレタ、カミフウセン」等も、「アサヒガアカイ」「カミフウセンガフクレタ」といふ心持ではあるが、驚嘆的な心の激動が倒置的な表現を取り、助詞を挿む餘裕なからしめてゐる。しかもそれが感動的な兒童には寧ろ普通の表現なのである。

「ウシガナク、モウトナク」は「ウシガナク、ウシガモウトナク」を韻律的に制約した形であり、「ヒバリガアガル、テンマデアガル」もそれと同樣である。

十三　ユフヤケ

教材の趣旨

「アカイアサヒ」に明けて、「ユフヤケ」に暮れてゆく春を思はせるやうな排列である。

晩春初夏の頃になると、そろそろ夕ばえが美しく、夕やけもしばしば見られよう。教材は傳統的に唱へられる夕やけの童謠で、もと關東地方に起り、今では殆ど全國にうたはれてゐる。自然教材ではあるが、大人の見る自然と違つて、頗る主體的に動的に表現されてゐるところに子どもらしい自然がある。美しい國土の自然に對し、かうした童謠を通して感激を深からしむべきである。

本教材では「ユフ」といふカナヅカヒが始めて出る。發音としては「ユフ」は「ユー」であり、既修の「フウ」と同樣ウ列の長音である。

取扱の要點

先づ挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗に基づく話合をさせる。夕やけの美しいこと、夕やけが出ると大抵翌日は天氣であること、繪に八人の子どもがゐること、向かふの空が赤くやけてゐること、子どもは歩きながらその方へ向かつて何かうたつてゐるらしいこと等の話から文章へ導入する。

古來の童謠で韻律はもちろん曲もある。**ウタノホンー**と連繫して、讀みの上にそれをあらはすやうにすべきである。

文字としては「ユフ」のカナヅカヒがある。**コトバノオケイコ**十六頁の例によつて、カナヅカヒを記憶するやうに指導する。同頁の繪は、夕焼・夕方・夕飯をあらはしたのである。

發音としては「ユフ」が長音「ユー」であること、「アシタ」を「アヒタ」に誤らぬこと、「ユーヤケ」「テンキ」などに誤らぬこと等に注意して練習させる。

「ナアレ」は「ナレ」が韻律によつて延びたもので、「ナーレ」と長音に發音すべきであるが、曲の關係上「ナアレ」の「ア」が別に出るやうになりがちである。しかし「ナーレ」の氣持を失はないやうに讀ますことが大切である。

コトバノオケイコ十六頁によつて文字を正確に書かせ、なほ全文をも書かせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「アシタ」の如く「タ」の上に來る「シ」は「ヒ」に訛られがちである。又地方により「テンキニ」を「テンキネ」或は「テンキン」などと訛ることもある。何れも指導を要する。

「ニ」「キ」の音の不明瞭な地方では「イ」母音と關聯して矯正する。

文字　新字――ユ　ヤ　ケ　キ　ニ　（ユフ）　以下括弧を附したものは、讀替文字とみなして本欄に掲げた。

語句語法　「ユフヤケコヤケ」は「タイコバシコバシ」「オホサムコサム」など童謠的な修辭法で、「コヤケ」の「コ」に特に意味はないものと見てよろしい。

「ユフヤケコヤケ」は呼びかけの心持でなく、「ユフヤケコヤケダ」といふ意味の表現である。「テンキニナアレ」は命令形で、希望意欲の發現である。

備考

ウタノホン一「ユフヤケコヤケ」と連絡して取扱ふ。

十四　オツキサマ

教材の趣旨

夕やけが消えて夜のとばりがおりると、月があらはれる。

歩きながら月を見ると、月は自分と共に動くやうに見える。子どもにはそれが驚異である。「ワタシガアルク、オツキサマガアルク」は、さうした子どもの驚異の心をあらはした教材である。「ユフヤケ」と同じく頗る主體的な表現ではあるが、一方がはなやかで激動的であるのに對し、これはぐつと落ちついてゐる。そこに「ユフヤケ」と「ツキ」との自らなる感じの相違が見られよう。又「ユフヤケ」が傳統的な歌謠であるに對し、これは現代的個性的な詩である。

取扱の要點

月に就いて兒童の體驗と挿畫（掛圖）とを結んで話合をさせる。日が暮れると月が出ること、月は三日月になつたり圓くなつたりすること、月の美しいこと、月を見ながら歩くと月もついて歩くやうであることなど、話合をさせながら文章を讀ませる。

韻律的な文章であることに注意し、二拍子に讀めば「オツキ」「サマガ」の各を一拍子に

讀むことになり、ツキサマ――をややつめて讀む。「ガ」が鼻濁音であることに注意する。「ワタシ」、「オッキサマ」の「シ」「ツ」の發音にも注意する。「ツ」に就いては、**コトバノオケイコ**十七頁の挿畫によつて話をさせ(又は話をしてやる)「ツル」、「キツネ」の語を拾ひ上げて發音練習を擴充する。

コトバノオケイコ十七頁によつて文字を正確に書かせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「ワタシ」を「ワタス」に近く訛り、「オッキサマ」を「オチキサマ」に誤る地方では十分に矯正する。何れも「イ」「ウ」の母音に關聯して正すことが大切である。「キ」の發音の曖昧なのも同樣である。

文字　新字――ワ　ツ

語句語法　「ワタシガアルクト、オッキサママモアルク」といつた心の表現であるが、文は頗る素朴である。「アルクト」といふ因果關係に考へず、「ワタシガ」、「オッキサママモ」といつた主客的地位も考へないで、素朴に羅列した形であり、そこに自ら理知を拔去つたあどけなさがある。

「ワタシ」は「ワタクシ」の「ク」の脫落したもので、特に親しい場合に用ひられ、又目下の

者を對手とする時に用ひられる。教科書では「ワタクシ」を標準とし、對話や韻文に於いては「ワタシ」を許容的に用ひる。

「オッキサマ」の「サマ」は「コママイヌサン」の「サン」と同樣敬語であつて、「サン」は「サマ」の音便である。教科書では「サン」を標準とし、「サマ」は「神サマ」、「お日サマ」、「オッキサマ」等、一段高い敬語として、若しくは傳統的に固定した敬語として用ひる。

十五　オハヤウゴザイマス

教材の趣旨

朝起きてから學校へ行くまでの子どもの生活を主題とし、家庭に於ける挨拶のことばをとらへた教材である。

第一部の教材は、兒童の素朴な生活語を取上げてこれを韻律的に調へ、專ら誦謠的に讀ませることによつて、發音の基礎的練習をなさしめたのであるが、第二部に入ると、先づ兒童の生活――殊に言語生活の向

上に必要な躾のことばを與へてそれを身につけさせ、これを基礎としておもむろに教養ある國民としての標準語たる話しことばを修練せしめ、話しことばに基礎を有する文章の理解力と發表力を養はうとするのである。

第一部が終つて再び新しい朝が來たやうな教材の排列である。この教材以下四課は家庭及び學校に於ける兒童の生活として一聯の關係を持つ。挿畫(掛圖)の人物は次課に出る「ホンダイサム」である。

取扱の要點

朝起きてから家を出るまでの生活に就いて話合をさせる。朝起きて先づ何をするか、おとうさんやおかあさんにどう挨拶するか、御飯をいただく時にどういふか、學校へ行くため家を出る時何とあいさつするか、挿畫の子どもは何をしてゐるか、等に就いて話させる。これは修身の指導と餘程關係の深いことであるから、**ヨイコドモ**で今まで學んだことと連絡をとりながら話すやうにすることが大切である。右の話合の中から、「オハヤウゴザイマス」「イタダキマス」「イッテマキリマス」のことばを拾

ひ上げて、一通りそれを發音的に指導してから教材を讀ませる。躾のことばであるから發音を明瞭にしつかりと讀ませ、更にことばと作法とを結びつけて指導し修練せしめる。

コトバノオケイコ十八頁の□に就いて入れるべきことばを考へさせる。

先づことばで

オカアサン、オハヤウゴザイマス。
オヂイサン、オハヤウゴザイマス。
オバアサン、オハヤウゴザイマス。
センセイ、オハヤウゴザイマス。
オトウサン、イッテマキリマス。
オカアサン、イッテマキリマス。

など練習的にいはせ、なほ

ニイサン、オハヤウ。ネエサン、オハヤウ。

など、相手を種々豫想させて練習的にいはせる。

コトバノオケイコ十九頁によつて文字を正確に書かせる。

なほ同書十八頁の「オハヤウ」「ゴザイマス」「マキリマス」によつて、カナヅカヒを指導する。「オハヤウ」は「ハヤイ」と比較して記憶の手がかりとし、「ゴザイマス」「マキリマス」は相對照して記憶させるやうにする。

コトバノオケイコ 十八頁の□に適當の文字を書入れさせる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音 「オハヤウ」は「オハヨー」(オ列長音)と發音する。「ゴザイマス」の「ゴ」は鼻濁音ではない。「ザイ」は重母音「アイ」を含む。「イタダキマス」「イッテマキリマス」の如く語頭に來る「イ」は母音として明瞭に發音し、「エ」と誤る地方では特に矯正する。「マキリマス」の「マキ」は「マイ」と發音する重母音「アイ」を含んでゐる。「キ」を「ki」と發音させてはならない。

文字 新字——ゴ ダ キ (ヤウ イッテ)

語句語法 挨拶の語は固定的な語法が多いから、これを暗誦するまで指導し、動作と結んで身につけさせるとともに、敬語法の理解の手がかりとする。「オハヤウ」「イタダク」「マス」「ゴザイマス」「マキリマス」等の使ひ方に注意する。

備考

本課以降第十八課「サヤウナラ」までは、**ヨイコドモ上**「ガクカウ」「センセイ」「トモダチ」及び**カズノホン一**(十五・十六頁)と連絡して取扱に考慮する。

十六 ホンダイサムサン

教材の趣旨

朝の教室に於ける兒童の生活を主題とし、出席簿によつて自分の名を呼ばれるのに對して、「ハイ」と返事をする場面をとりあげて教材としたもので、これもことばの躾に關する教材である。既にこの頃になれば、入學以來日々の實踐によつて兒童も返事に馴れてゐるであらうが、それが文字にあらはされることによつて、新たな興味も起るであらうし、又これによつて或反省をなすであらう。出席を呼ばれて、ただかたの如く答へ得るばかりでなく、先生や兩親などに呼ばれた時、何時でも「ハイ」と答へ得るやうに指導し、實踐せしめることが大切である。本教

材にはホンダイサム以下四人の子どもの名が出てゐるが、この四人は結局ヨミカタはもちろん、ヨイコドモ・カズノホンを通じてしばしばあらはれる教科書中の主人公であつて、學習する兒童の心の友となり、兒童と共に學び、遊び、生ひ育つて行くのであつて、既に前課の挿畫の人物もこの課と連繫してホンダイサムになつてゐる。教材の發展に隨つてこの四人を中心として副的人物があらはれるやうになつてゐるが、それら副的人物は大體この四人の級友若しくは兄弟等である。

取扱の要點

先づ挿畫(掛圖)によつて話合をさせる。この四人の名を指摘させ、それらは何年生であるかを考へさせる。みんな仲のよいお友だちであること、前課の挿畫の子どもがこの中にゐること、今何をしてゐるところであるか、など話させ、學校の先生に呼ばれた時、すぐ何とお答へするか、うちでおとうさんや、おかあさんに呼ばれた時どうするか、などに就いて反省させつつ話させて教材に導入する。

先づ發音を正しく指導して讀ませる。

コトバノオケイコ 二十頁によつて文字を正確に書かせる。

コトバノオケイコ 二十頁によつて、「マサヲ」「ヨシヲ」「タケヲ」「フサヲ」等は(「男」「雄」「夫」の何れを問はず)カナヅカヒが「ヲ」であること、「ハルエ」「トシエ」「ユキエ」等は(「江」「枝」などは)「エ」であることに注意してカナヅカヒを指導する。(兒童の實際の名には、女の子に「トシヱ」「ユキヱ」などをそのまま戸籍名としてゐるものもあるから、立入つてそれらを指摘すべきではない)

コトバノオケイコ 二十頁の□に兒童自身の名をカタカナで書かせ、書けないものは特に指導してやる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音　「イサムサン」の「イ」は語頭の母音で、前課の「イタダキマス」などと關聯して明瞭に正しく指導する。「エ」と訛る地方は矯正を要する。「ハイ」は重母音「アイ」を含む。「ヲ」は「オ」と發音させ、"wo"と發音させてはならない。

文字　新字——ホ　ム　ベ　ヲ　ズ　エ

語句語法　「サン」——男の子を呼ぶのに學校では「クン」を用ひることが多いやうであるが、一般的な敬語「サン」を用ひて、あまりに實感に陷ることを避け、以て書中の主人

公たるにふさはしからしめた。

「ホンダイサムサン」といふ呼掛、「ハイ」といふ返事、何れも語法としては獨立の文である。

十七　エヲカキマシタ

教材の趣旨

前課に聯繫して、教室に於ける兒童の生活を主題とした教材である。特に圖畫の作業を選んだのは「エ」の文字を提出するためであるとともに、教室に於ける兒童の作業的創造的活動を重んじた意味がある。登場人物は前課をうけて四人とし、四人それぞれにすきな繪を描かせて、しかも國民精神を昂揚し、兒童の心情に適應する「ラッパ」「グンカン」「サクラ」「フジサン」に畫材を求め、なほ男女の特性に應ずることをも併せ考へてある。「ラッパ」はもちろん陸海軍に共通であるが、「グンカン」と對

照したところに、陸軍を象徴するものがある。もちろんかうした用意を悉く兒童に示すべきでなく、自ら感得させる程度に止めたい。

文章の方からいふと、第一部の兒童自然の韻律的叫聲的言語を、第二部に入つての躾のことばと結んで、ここに始めて兒童生活の最も簡單な散文的表現に移つた。爾後低學年の散文は、日常の話しことばと最も密接な關係を持つ敬體口語文を以て建前とする。

取扱の要點

先づ挿畫(掛圖)に就いて話させる。この四枚の繪はそれぞれ何が書いてあるかをいはせ、「ラッパ」「グンカン」「サクラ」「フジサン」に就いて話合をさせ、最後にこれらは誰が書いたのであらうかを考へさせてから文章に導入する。

發音を正しく指導する。四つの「ガ」はいづれも鼻濁音であるが、「グンカン」の「グ」は鼻音を含まない濁音である。「エ」「ヲ」は「エ」「オ」と發音させる。

コトバノオケイコ二十二頁によつて文字を正確に書かせる。

カナヅカヒとして「エ」と「ヲ」とに注意させる。**コトバノオケイコ**二十一頁によつて數

例を比較しながら、カナヅカヒの理解と記憶とに導く。

コトバノオケイコ 二十一頁の□□にことばを入れさせる。ただ形式的に入れさせるのでなく、話合によつてホンダイサム以下四人の作業に、自分も亦加はるやうな氣持でことばを選ばせ、最後に記入させる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音 「ガ」行鼻濁音は、教材に卽して常に指導と練習とを怠らないやうにする。

「ヱ」は「エ」"e"、「ヲ」は「オ」"o" と發音させ "we" "wo" と發音させるくせをつけてはならない。地方によつて「ヱ」を「イェ」"ie" と發音するところがあり、「ラッパ」を「ダッパ」と訛るところが多い。何れも注意して矯正すべきである。

文字 新字——パ ヱ グ ジ

語句語法 「マシタ」——第十五課の「オバヤウゴザイマス」「イタダキマス」「イッテマヰリマス」の現在形を受けて、「マシタ」の完了形が提出してある。

備考

ヱノホン一 「グンカン」と關聯して取扱に考慮する。

十八　サヤウナラ・タダイマ

教材の趣旨

前課から更に展開して、歸校に際し先生に對してする挨拶及び家に歸つてする挨拶のことばを教材とする。

挿畫の人物は前課につながるハナコである。

第十六課及び第十七課に出た躾のことばの擴充である。これらは作法の精神及び動作と結合して指導し、それを實踐に導かなければならない。（家庭に於ける挨拶に就いては特に家庭と連絡して指導し、學校の教育を家庭でも實踐させるやうにすべきである。）

「タダイマ」といふ挨拶の相手を「オカアサン」としたのは、大體一年生の兒童が學校から歸つた時、父親は不在と見るべきであるからである。

第十六課以降家庭と學校に於ける兒童の生活を主題として發展し

來つた教材は、一先づここで終結する。

取扱の要點

學校から歸る時、先生にどうごあいさつをするか、家へ歸つた時おとうさんやおかあさんや、その他に對してどういふごあいさつをするか、挿畫の子どもはだれであらうか、それは今何をしてゐるか、等に就いて話合をさせ、挨拶語を拾ひあげて、これに伴なふ作法を實行させてから、文章に導入する。

發音を正しく讀ませる。「センセイ」「オハヤウ」など、發音の指導に注意すべきものがある。

コトバノオケイコ　二十三頁によつて文字を正確に書かせる。

なほ**コトバノオケイコ**二十三頁によつて、「サヤウナラ」のカナヅカヒに注意させ、又夜ねる前に、おとうさんやおかあさんなどにどういふごあいさつをするかに就いて話合をさせつつ、「オヤスミナサイ」を指導して挨拶のことばを擴充する。□の中には適當なことばを入れさせるがよい。

注意すべきことば　文字　語句語法等

發音　「センセイ」の「セ」を「シェ」と發音する地方では矯正が大切である。「セイ」は「セー」と發音させる。

「サヤウナラ」は「サヨーナラ」と發音させ、「サイナラ」といはないやうに注意する。

「タダイマ」を「タライマ」などと誤らぬ注意も大切である。

「オトウサン」「オカアサン」は「オトーサン」「オカーサン」と發音させる。

語句語法　「サヤウナラ」を標準とし、話しことばとしては「サヨナラ」を許容する。又家を出かける時に「タダイマ」といふ地方もあるから、「イッテマキリマス」と「タダイマ」を區別して適正に使用するやう指導すべきである。

（以上　五月）

十九　ヒカウキ

教材の趣旨

飛行機が編隊をつくつて、爆音すさまじく飛んでくる。雲一つない晴れた紺碧の空だ。たちまちにしてあらはれ、たちまちに飛び去つてしまふ飛行機の速さ、勇ましさ、美しさ――思はず叫んだことばをとらへて、韻律的に調へたのがこの教材である。

初めに「ヒカウキ、ヒカウキ」とくりかへしてあるのは、天の一角にあらはれた飛行機を發見した歡喜の聲であり、「アヲイソラニ　ギンノツバサ」は、まさに頭上を轟々と渡りつつある勇姿に對する驚嘆の叫びであり、最後の「ヒカウキ、ハヤイナ」は、みるみる遠く去りゆく姿を追ひながら、名殘惜しげに見送つてゐることばなのである。兒童が魂を全く飛行機にうばはれて、大空を見あげてゐる姿は、この韻文のかげにおのづから見える。教材に卽しつつ飛行機に關する話合をなし、子どもにふさはしい國防觀念を養ふべきである。挿畫は、重爆擊機の九機編隊が、悠然と飛翔してゐる圖である。

取扱の要點

飛行機は、兒童にとつてもつとも興味のあるもので、すでに種々な知識をもつてゐるから、挿畫（掛圖）によつて話合をさせる。ひととほり飛行機に就いて兒童の觀念を整理し、挿畫の情景を話させて、文章に導入する。

發音を正しく讀ませる。韻文であるから、韻律や感情を生かしながら、すなほに何度もくりかへして讀ませる。

コトバノオケイコ　二十五頁によつて、文字を正確に書かせる。時間に餘裕があれば全文を書かせる。

コトバノオケイコ　二十四頁「アヲイソラ　アヲイウミ」によつて、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ　二十四頁の「トビガキマス。ツバサヲヒロゲテトンデキマス。タ

カイソラヲトンデキマス。」を讀ませて、「ツバサ」の語を具體的に會得させるとともに、本教材の文章を理會させる手がかりとする。

コトバノオケイコ 二十四頁の繪を、クレヨンで塗らせ、詩の情景の理會に資する。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音　「ヒカウキ」―ヒコーキ　「アヲイ」―アオイ　「オイ」の重母音を練習させる。「ハヤイナ」で「アイ」の重母音を練習させる。「ギン」の「ギ」は鼻濁音ではない。

文字　新字――**ギ**（カウ）

語句語法　「アヲイソラニ」の「ニ」の使ひ方は、やや程度の高いものであるが、さうしたことに拘泥せずに直觀的に讀みとらせる。

「ヒカウキ、ヒカウキ」は、呼びかけではなく、「飛行機が來た」、あるひは「飛行機だ」といふ緊迫した表現である。

「ヒカウキ」と第一句をきり、「ギンノツバサ」と第二句をきり、おしまひに「ハヤイナ」と詠嘆したところに、飛行機の速さが階段的に表現されてゐる。

二十　オツカヒ

教材の趣旨

親しいをぢさんのところへのお使ひは樂しいものである。をぢさん、をばさんの家へ行つて、「よく來たね」と迎へられ、やさしい心からなるもてなしを受けることは、子どもにとつては、何よりも嬉しいことである。が、その樂しいお使ひにも、往々途中の不安や億劫がつきまとふことがある。そこで、「シロモ、ヨロコンデツイテ行く必要がある。本教材は第十五課乃至第十八課の發展であつて、勇が學校から歸つて、又は日曜日にお使ひに行くところである。文章の方からいへば第十七課の「ホンダサンガ、ラッパノヱヲカキマシタ」といふ最も簡單な散文から進んで、「イサムサンガ、ヲヂサンノトコロヘオツカヒニイキマス」、「シロモ、ヨロコンデツイテイキマス」の如く、やや複雜な文章に展開してゐる。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせる。お使ひに行つたことがあるか、誰の所へおつかひに行つたか、誰といつしよに行つたか、寒い時であつたか、暖い時であつたか、どんな道を通つて行つたか、をぢさん・をばさんがいらつしやるか、おぢいさん・おばあさんがいらつしやるか、をぢさん・をばさん・おぢいさん・おばあさんのところへお使ひに行くと何といつて迎へてくださるか、などの問によつて話させ、文章に導入する。

句讀點段落に氣づかせながら、發音を正しく讀ませ、文字語句を指導し、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 三十六頁の

オトウサン　オカアサン　オヂイサン　オバアサン

ヲヂサン　ヲバサン

オツカヒ　オコヅカヒ　コヅカヒサン

ヤマヘイキマス　ノハラヘイキマス　ウミヘイキマス

等によつて、「オ」と「ヲ」、「ヒ」「ヘ」のカナヅカヒを練習させ、「オコヅカヒ」「コヅカヒサン」の

「ヅ」が「ズ」にあらざることを知らしめるとともに、語彙を擴充する。

コトバノオケイコ 二十七頁・二十八頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書かせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音　「イサムサンガ」の「ガ」が鼻濁音であること、「オツカヒ」の「カヒ」、「ツイテ」の「ツイ」が重母音を含むことに留意して指導する。

「ヲヂサン」――オジサン　「トコロヘ」――トコロエ　「オツカヒ」――オツカイ

「イサムサン」を「イサムサー」「エサムサン」、「ヲヂサン」を「オジサー」「オッサン」、「トコロヘ」を「トコロサ」「トコレー」、「オツカヒ」を「オッケー」「オッキャー」、「シロ」を「ヒロ」「イロ」等と訛らないやうにさせる。

文字　新字――ヂ　(ヘ　ヒ)

語句語法　「ヲヂサンハ、トコロヘ」の如き補語、「ヨロコンデ」の如き修飾語が始めて出たので、文がやや複雜になつてゐる。

二十一　デンワアソビ・オキャクアソビ

教材の趣旨

子どもの生活は、大部分が遊びである。ものを作つたり、花や虫などを取つたりして遊び、動物といつしよに遊びもするが、また一面、電話遊び、お客遊び、お醫者遊び、郵便遊び、兵隊遊び、學校遊び等の如き模倣遊戯をも好んでする。

本教材は、かかる兒童の模倣遊戯をとりあげて、電話遊びとお客遊びの二つの場面に仕立てた。この兒童の遊戯生活を通して、興味を覺えさせながら自然に、挨拶や躾のことばを兒童の身につけさせようと意圖したのである。即ち無邪氣に電話遊びをしたり、お客遊びをしたりしてゐる間に、電話特有の名乘合がわかつたり、自然に敬語が使へるやうになつたり、返事の仕方がわかつたり、訪問の際のお互の挨拶ができるやうになつたりするのである。さうして、いくら丁寧なことばを取りかはしても、それが模倣遊戯である以上、少しも不自然に感じられないで、知らず識らずのうちに躾のことばが會得されるのである。

最初の電話遊びでは、ハナコがキヌコに電話をかけて、ハルエが來てゐるから遊びに來るやうに誘ふのである。この呼び出しに應じて、キヌコがお客になつてハナコとハルエのところへ來たのが後半のお客遊びである。勿論最初から、ハナコもハルエもキヌコも同じ場所に居るのではあるが、距離をへだてて電話をかけたり、訪問したりするつもりでしてゐるので、決して遠方に離れてゐるのではない。その點にあくまでも遊びの境地がある。

全體が對話のみによつて書かれてあるから、話しことばが直接讀みの對象となつてゐる。かうした對話形式は「コマイヌサン」「ホンダイサムサン」に、その萠芽があり、本教材に至つて始めて完全なものとなつたのである。對話に鉤が附けてないが、活字の組み方によつて、對話者

の區別がはつきりつくやうにしてある。

取扱の要點

先づ電話に就いて話合をさせる。電話はどんなものか、どんな風にして使用するか、電話で話す時にはどんなことばで話すか、電話遊びをしたことがあるか、など話させ、次にお客樣に就いて話合をさせる。お客樣に行つたことがあるか、その時どう挨拶したか、おうちにお客樣がいらつしやつた時どう挨拶するか、など兒童の體驗を話させた後、挿畫(「オキャクアソビ」の掛圖)を中心に話合をさせ、文章に導入する。一通り讀ませてから對話が誰のことばであるかに就いて話合をさせる。

發音を正し、できるだけ對話の調子を、讀みの上にあらはすやうに指導する。繰り返し讀ませて暗誦させ、兒童を指名して實際にやらせてみるべきである。

コトバノオケイコ二十九頁によつて、「ハ」のカナヅカヒに注意させ、[　　]の中に適當に名前を記入させる。

コトバノオケイコ二十九頁の

ハイ、ザウデス。

イイエ、ザウデハアリマセン。

ドウゾ、コチラヘ。

オシキクダサイ。

を讀ませ、これらのことばを使ふ場合に就いて話合をさせ、躾のことばを擴充する。

コトバノオケイコ三十頁によつて、「アリガタイ」「オメデタイ」の「タイ」と比較して、「アリガタウ」「オメデタウ」のカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ三十頁三十一頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音　「ハルエサンガ」「アリガタウ」「オアガリクダサイ」の「ガ」、「スグ」の「グ」が鼻濁音、「ゴメンクダサイ」の「ゴ」が濁音であること、「クダサイ」の「サイ」が重母音を含むことに留意して指導する。

「ザウデス」——ソーデス　「ワタクシハ」——ワタクシワ　「アリガタウ」——アリガトー

「マキリマス」——マイリマス　「ドウゾ」——ドーゾ

「モシモシ」「ワタクシ」の「シ」を「ス」と訛らないやうにする。また「キヌコサン」「キテイラッシャイマス」の「キ」が訛り易いから注意させる。「アナタ」を「アンタ」、「イラッシャ

イ」を「イラッサイ」「イラッシェー」、「マセンカ」を「マシェンカ」、「スグ」を「シグ」と訛らないやうにする。

文字　新字――ビ　ド　ゾ（ザウ　ハ　シャ　タウ）

語句語法　「モシモシ」は呼びかけの語で、電話では常に用ひられる。

本課に於いて、「キヌコサンデスカ」「ハイザウデス」「ワタクシハハナコデス」のやうな、「何が何だ」といふ文型が出てゐる。隨つて「デス」の用法に注意する。又「ゴメンクダサイ」「オアガリクダサイ」の「クダサイ」の用法を理解させるやうに指導する。

「イラッシャイマス」は、元來「來る」の敬語で、動詞的な用ひ方と助動詞的な用ひ方と二つあるが、「ハルエサンガキテイラッシャイマス」の場合は、「キマス」の敬語として用ひられ、「ヨクイラッシャイマシタ」の場合は、「ヨクキマシタ」の意味に用ひられてゐる。「アリガタウ」は「アリガタウゴザイマス」の意である。

備考

本課以降二十四「キヲツケ」までは、**ヨイコドモ上**「トモダチ」「ゲンキョク」と關聯して、取扱に考慮する。

二十二　シリトリ

教材の趣旨

前課の發展として、しりとり遊びの遊戯を教材とする。ハナコ、キヌコ、ハルエが、この遊びをしてゐるものとして扱へば、一層興味が深いであらう。

一人が初めに「ペンキ」といひだす。するとそのことばの最後の音を取つて、次の子どもが「キツネ」といふ。次の子どもは同じやうにして「ネコ」といふ。かうして順々にことばをうけ渡したり、うけ取つたりしてことばを連絡させていつて遊ぶのであるが、だんだんうけ取る音がむづかしくなり、ことばが少くなつていく。本教材でも、「タンポポ」から「ポンプ」と來て、次の人は、ゆきづまつたのである。しかし、この次をいはないと負けになるといふので、困つたあげく「プカプカドンドン」といふ

樂隊の音をもちだした。これは擬聲音であるが、困つた時の一案として子どもらしいおとしであつて、それにおのづから笑ひが伴なつてゐる。教材は清音「ネ」を提出し、半濁音「ペ」「ポ」「プ」を提出するために構成されたものであり、本教材に至つて、カタカナ清音半濁音は全部提出されたわけである。

しりとり遊びは、ことばの音によるつながりを遊びのきつかけとする。これによつて子どもたちは、自らことばの發音に注意することにもなれば、自分の語彙をふりかへる機會が與へられることにもなるから、或程度これを教育的に利用することが可能である。

取扱の要點

しりとりの遊びに就いて話合をさせ、教材に導入する。教材は文ではなく、單語の羅列であるから、つづけて朗讀させずに、一語一語はつきりと、あたかもしりとり遊びをしてゐるやうに讀ませる。さらに兒童から兒童へ、一語一語讀みわたすやうに讀ませることも大切である。

コトバノオケイコ 三十二頁の繪によつて、しりとり遊びをさせる。スズメ、メダカ、カヤ、ヤマ、マナイタ、タヌキ、キシャ、シャツ、ツクエ、エバガキ、キップの順序である。なほこのしりとりとヨミカタの教材のしりとりとを組合はせてみるのもよい。また初めのことばを黑板に書いておいて、これに續くしりとりを考へさせ、それを兒童のめいめいの筆記帳に書かせて、讀ませてみるのもよからう。

コトバノオケイコ 三十二頁によつて文字を正確に書く練習をさせる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音　「キツネ」を「キチネ」「ケツネ」といはないやうに注意する。

文字　新字――ペ　ネ　ブ　ポ　プ

語句語法　文字面からみれば、ただ單語の羅列であるが、この裏に、首尾の音がつながつてゐること、これをとほして子どもが遊んでゐることを考へさせるがよい。

教材の趣旨

二十三　カクレンボ

カクレンボの遊びは、全國の兒童に共通した遊びである。その遊び方や、遊びに伴なふ韻律的なことばは、地方的に多少の相違はあらうが、本教材は大體東京地方に於いて行はれるものを取りあげた。

「カクレンボスルモノ、ヨットイデ」といひつつカクレンボの仲間をよび集める。集つたら鬼をきめるために「ジャンケンポンヨ、アヒコデシヨ」と呼びながら、ジャンケンをする。鬼がきまると、鬼は目をつむつて、「モウイイカイ」といつて、仲間がかくれてしまふまで待つてゐる。かくれ場所をさがす子どもたちは、「マアダダヨ」といひながら、急いでかくれようとする。鬼は又「モウイイカイ」をくりかへす。まだかくれおほせない場合には、「マアダダヨ」をくりかへす。かくれてしまつた後、鬼が、「モウイイカイ」といふと、かくれた子どもが「モウイイヨ」といふ。そこで鬼がさがしに行くことになる。

實際の遊びの場合には、これらのことばは一種の旋律に乘せられて何べんもくりかへされるものであり、兒童には十分親しまれてゐるもの

のである。かうした遊びのことばを拾ひあげて、ことばの音聲的練習をなすのが、本教材の目的である。

取扱の要點

文章挿畫(掛圖)を中心にして、兒童の體驗と結んで話合をさせる。この際カクレンボの遊びにも、地方的にいろいろの條件があるであらうから、その地方に行はれる遊びをもととして話合をさせ、文章に導入する。

發音を正しく指導して讀ませる。なほ**コトバノオケイコ**三十三頁の「ミンナデ、カクレンボシテキマス」以下の文を讀ませ、挿畫(掛圖)と聯關させて、「ワタクシ(ハナコ)とイサムとハルエとマサヨがカクレンボ遊びをしてゐること、鬼をきめるためにジャンケンをし、ハナコが鬼になり、他の子どもがかくれることなどの話合をさせ、兒童自身が畫中の子どもと一體となる心持で、本教材の文章を何べんも讀ませる。

コトバノオケイコ三十三頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「カクレンボ」とか、「ジャンケンポン」とかには、地方によつて種々變つたことばが

ある。教材のことばを標準として取扱ふ。「イイ」が「エイ」「エー」などとならないやうに注意する。「アヒコ」―アイコ、「モウ」―モー、「マアダダヨ」―マーダダヨ。

文字　新字――ボ（ジャ　ショ）

語法　「ヨットイデ」は「ヨッテオイデ」が韻文的制約によつてつまつたものであり、「アヒコデショ」は地方によつては「アイコデサイ」などいひ、「ショ」「サイ」は掛聲と思はれる。「イイカイ」は「イイカ」の意味である。

備考

ウタノホン上「カクレンボ」と連絡して取扱ふ。

二十四　キヲツケ

教材の趣旨

いろいろな遊びをしたが、おしまひに男の子どもたちは兵隊ごつこをやる。一人の子どもが指揮官になつて號令をかける。ほかの子どもは、その號令によつて動作をする。初めに「キヲツケ」といふと、並んで

ゐる子どもたちは「キヲツケ」の姿勢をする。次に「ミギヘナラヘ」と號令をかける。みんなは右にならつてならぶ。それを見て「ナホレ」をかける。次に「バンガウ」といふと、子どもたちは、「一、二、三、四、五、六」と元氣よく番號をとなへる。この番號によつて並んでゐる子どもたちは、六人ゐることがわかる。六番目の子どもの次に白い犬もすわつてゐる。軍用犬のつもりであらう。犬も「ワン」と番號をいひたげにしてゐる。

教材は號令であるから、簡單明瞭に發音させねばならない。大きな聲で發音を練習するには、恰好の教材である。しかもその號令（ことば）が、ただちに動作・行爲を伴なふものであるから生きたことばの練習ができる。さきに挨拶や躾のことばによつて、ことばづかひは丁寧に靜かに話すべきことを練習したのであるが、ここでは元氣にはつきりといふべきことを教へねばならない。しかしこれも模倣遊戯としての兵隊ごつこであることに注意し、一年生の體錬科の實際としひてあはせる必要はない。

この教材に於いて始めて數漢字を提出する。兒童の自然に卽したことばとして教材化したことに苦心がある。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、兒童の體驗と結んで話合をさせ、教材に導入する。

文章は號令であるから、發音に注意するとともに元氣にはつきりと讀ませ、兒童を指名して、實際にやらせる。

コトバノオケイコ 三十四頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ適當に書寫又は書取をさせる。同頁の「マヘヘススメ」以下を讀ませて、發音練習をさせるとともに語彙を擴充し、同頁の「一ツ二ツ三ツ……」によつて「一二三……」の讀替として數の唱へ方を練習させる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「ミギ」の「ギ」、「バンガウ」の「ガウ」は鼻濁音であり、「五」の「ゴ」は鼻濁音ではない。「ミギヘナラヘ」は、「ミギエナラエ」と發音し、ナラヘに「アエ」の重母音がふくまれてゐる。「バンガウ」は「バンゴー」、「ナホレ」は「ナオレ」と發音する。「ナオレ」には重母音「アオ」が含まれてゐる。「キヲツケ」は、「キヲチケ」とならないやうに注意する。

「一二三四」の發音は、卷頭のラジオ體操の掛聲と同じやうに、正しく練習させる。

文字 新字――一(イチ) 二(ニ) 三(サン) 四(シ) 五(ゴ) 六(ロク)(ホ ガウ)

語句語法 「キヲツケ」は命令文であり、「バンガウ」も「番號をかけよ」の意味、「一二」も「一番であります」「二番であります」といふ意味であつて、すべて文的表現である。

二十五　アメガヤミマシタ

教材の趣旨

季節と結んだ教材である。

六月の梅雨の晴れ間に、涼しい風が吹き木の葉がそよそよとゆらぐ。雨後の爽快な自然が教材の主題であるが、どこまでも子どもの感動の表出に卽してできた文章である。故に本教材は、客觀的な叙景描寫を外部から兒童に與へようとするものではなく、爽やかな雨後の自然が、子どもの心に映じて、それからうける感動を獨言の形で表出したもの

とみるべきである。但しその場合、「アカイアサヒ」「ウシガナク」等よりは感動が靜的であり、客觀的叙述もかういふところから次第に發展してゆくものと考へられる。

梅雨のない地方では、單に雨上り後の場合としても差支ない。

又次の「イケニフネ」と不卽不離の關係に於いて聯關させ、その課を出して行く準備としての効果をも同時に擧げて居り、後の「ユフダチ」「ニジ」とも一脈の連絡を持つものである。

挿畫(掛圖)は便宜上次の課と一體にあらはしてある。

取扱の要點

雨上りのことに就いて話合をさせる。梅雨は、じめじめした餘り心持のよいものではないが、梅雨の晴れ間に太陽を見た時は嬉しいこと、雨あがりの後には、何處からか涼しい風が吹いて來たり、虹が出たりして氣持がよいこと、そよそよと吹く風にゆられて木の葉がそよそよ動くのは、何ともいへない、よい氣持であること、等の話合をして、文章へ導入する。

發音を正し、段落に氣づかせ、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

この課では「木」の字が新出文字であるから**コトバノオケイコ**三十五頁「木ノハ」「マツノ木」「木ノエダ」等によつて、語彙を擴張するとともに、「木」の字を確實に習得させる。又「ソヨソヨ」のことばに關聯して、「ザワザワ」「ヒラヒラ」等の副詞を、例へば「木ノハガザワザワウゴイテキマス」とか、「テフガヒラヒラトンデキマス」などといはせて、これらのことばを會得せしめる。更に、

スズシイ
アタタカイ
ツメタイ

によつて、□の部分に、例へば、「カゼ」の語を當てて、「スズシイカゼ」「アタタカイカゼ」「ツメタイカゼ」などといはせたり、「カゼ」「ゴハン」「ミヅ」等のことばを當てて、「スズシイカゼ」「アタタカイゴハン」「ツメタイミヅ」といふやうにいろいろいはせ、最後に適當に記入させる。その際「カ、イ」「タイ」の重母音に注意して、正しく發音させることも忘れてはならない。**コトバノオケイコ**三十五頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば、書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば、文字、語句、語法等

發音　「アメガ」の「ガ」、「カゼガ」の「ガ」、「木ノハガ」の「ガ」、「ウゴイテ」の「ゴ」等は鼻濁音で、「ウゴク」を「イゴク」、「イノク」等と訛る地方では矯正する。又「スズシイ」は訛り易い語であり、「カゼ」は「カジェ」、「カデ」等と訛る地方がある。「木ノハ」の「ハ」を近畿地方では「ハー」と長音に發音する。いづれも矯正が肝要である。

文字　新字――ゼ　木

語句語法　「スズシイ」、「ソヨソヨ」の形容詞、副詞の使用に注意させる。「ブイテキマス」と「ウゴイテキマス」の「キマス」と「キマス」との相違にも氣づかせる。

備考

自然の觀察一「雨あがり」と連絡して取扱に考慮する。

二十六　イケニフネ

教材の趣旨

本教材は前課の發展であり、不可分の關係を持つが、必ずしも雨上りに、舟を浮かべたといふことにしなくともよい。

きれいな水がいつぱいにたまつてゐる池に、舟を浮かべて遊ぶ。その舟は、この子どもたちがこしらへたものであらう。やうやくできあつた舟を池におろすと、うまく水に浮かぶ。浮かんだことだけでも嬉しいのだが、それが風をうけてそろそろ動きだした。だんだん速さをまして走つていく。これを見て子どもたちは、愉快でたまらない。この歡喜を表現したのが本教材である。

四面海にかこまれてゐるわが國に於いては、國防的見地からいつても、少年時代から海に親しませることが大切である。しかも海にかこまれた國土とはいへ、兒童の中には、まだ海を見たことのないものが甚だ多い。それで、池に舟を浮かべるといふ遊びをとほして、おもむろに海のことを想像させ、興味をもたせ、やがて、ヨミカタ一の「トビトカメ」や、ヨミカタ二の「山ノ上」などの教材によつて海洋へのあこがれを喚起し

ながら、次第に海洋のことを知らしめるやうになつてゐる。

教材は四つの單文からなつてゐるが、第一節は子どもの動作を示した完了形であり、その他は眼前の情態であるので現在形を用ひ、舟の動きをあらはしてゐる。

取扱の要點

挿畫(掛圖)によつて兒童の體驗を話させ、文章に導入する。

發音を正しく讀ませ、文字語句を指導し、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 三十六頁の問によつて答へさせる。

コトバノオケイコ 三十六頁「ミヅノ上」「ヤマノ上」によつて語彙を擴張するとともに「上」の字を確實に習得させる。

コトバノオケイコ 三十六頁の「ヨチヨチ　ソロソロ　ズンズン」の語を使つて短かい文をいはせる。例へば「アヒルガヨチヨチハシル」「ソロソロオイデ」「ズンズンアルク」等の類である。

コバトノオケイコ 三十七頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ適當に書寫又は書取をさせる。

コトバノオケイコ 三十六頁の繪によつて、舟に就いて自由に話合をさせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「ホガアリマス」の「ガ」は鼻濁音である。「ミヅ」は「ミズ」と發音する。「ホ」を「ホー」と長音に訛る地方では矯正する。「カゼ」を「カジェ」「ミヅ」を「ミジ」「ズンズン」を「ジンジン」等と訛るのも同樣である。

文字　新字――ヅ　上

語句語法等　「イケニ、フネヲウカベマシタ」は「ワタクシタチガフネヲウカベマシタ」といふ意味であり、「カゼヲウケテ、ハシリマス」は「フネガカゼヲウケテハシリマス」の意味である。

二十七　ホタル

教材の趣旨

六月の夕方の空に飛び交ふ螢は、子どもの好むもので、螢狩は全國の兒童の夏の生活にはなくてならないものである。笹を手に兄弟や友

だちとうちつれ、水邊の草叢に螢の姿を求める兒童の口をついて流れ出るものは、「ホウホウ、ホタルコイ」の歌であらう。この歌はいろいろな形式で、殆ど全國に歌はれ、懷しい鄕土的なかをりと旋律を伴なつてゐるが、かうした鄕土的な章句と韻律を生かして、新しい童謠に仕立てたのが本教材である。

「ホウホウ、ホタルコイ」は螢に呼びかけ、螢を招く子どもの心さながらな表現であり、螢の淡い光を「小サナチャウチン」と見たてて、それをさげて來いといふのである。このやうに、螢を擬人化し、螢を親しい友だちとして呼びかけ、夏の夜空に降るやうにまたたいてゐる星と考へ合はせて、「ホシノカズホド」たくさん「トンデコイ」と、子どもらしい希望を四句二聯の童謠にあらはしたものである。さうして、この「ホシノカズホドトンデコイ」の餘韻は、直ちに次の「タナバタ」の課に連絡するやうになつてゐる。

藝能科ウタノホン上と結んで本教材の理解を深くすることが肝要

である。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。螢を取りに行つたことがあるか、誰と行つて幾匹取つたか、空には星が光つてゐたか、螢を取る時どんな歌を歌ふか、螢の光は何に似てゐるか等話させて、**コトバノオケイコ** 三十八頁の文を讀ませ、今までの話合を整理してから、「ヨミカタ」の文章へ導入する。發音を正し、文字語句を指導するとともに、韻律を生かして、讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 三十八頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、全文を書かせる。

コトバノオケイコ 三十八頁の「小サナイメ」「小サナトリ」「小サナハナ」を讀ませ、又は書かせて、「小」の字の習得を確實にする。

なほ**コトバノオケイコ** 三十八頁の挿畫は、螢の理解に資する。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音　「ホウ」は「ホー」、「チャウチン」は「チョーチン」と發音する。「サゲテコイ」の「ゲ」は鼻濁音、「コイ」は重母音を含む。「ホタル」を「ホータル」「ホータロ」などと訛つたり、「小サ

ナ」を「チッチャナ」「チッコイ」等といはないやうに導く。

「サゲテ」のアクセントは、「サ|ゲテ」(携持する)、「サ|ゲテ」(下におろす)の二つの場合がある。ここでは「サ|ゲテ」である。

文字　新字――小ササナ　ゲ（チャウ）

語句語法　「ホウホウ」は呼び聲であり、「チャウチンサゲテコイ」は、散文ならば「チャウチンヲサゲテコイ」とあるべきである。

備考

ウタノホン上「ホタルコイ」と連絡して取扱ふ。

（以上六月）

二十八　タナバタ

教材の趣旨

前課の發展である。七夕祭は子どもたちにとつては、年中行事中樂しいなつかしいものである。その夜子どもたちの目は遠くはるかな

天上の星へ向けられる。星はみんなふだんよりも光つてゐるやうに見える。お祭のせゐか笑つてゐるやうにさへ見える。地上の子どもたちは「タナバタノアマノ川」などとかいた短冊や、切紙などをかざつた竹又は柳などを立てて、お祭をする。教材はこのときの子どもの心持を主體的にあらはした韻文である。五五の韻律は、かうした兒童の感情を素朴に結晶させてゐる。「タナバタノアマノ川」は、短冊に書く文句であるが、それを生かして七夕の夜の天の川の美しさを歌つたのである。この天の川をはさんで、たくさんの星が光つてゐる。それがにこにこと笑つてゐるといつた氣持で、この際「オホシサマ」をあへて牽牛と織女の二星に限るものと考へさせる必要はない。

「ピカピカ」「ニコニコ」の副詞は、星の樣子を無邪氣に具體化し、「オホシサマ」と二度くりかへしてゐるところに兒童の喜びがあふれてゐる。かうした氣持によつて、自然に親しませ、日本的なこの季節的行事の喜びを感得させる。

取扱の要點

挿畫を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせ、文章に導入する。

發音を正し、韻律を生かして讀みを指導し、くりかへし讀ませて讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 三十九頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ全文を書寫させる。

コトバノオケイコ 三十九頁の挿畫に色を塗らせ文字を書かせて作業的に取扱ふ。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音 「アマノ川」の「ガ」は鼻濁音である。

「オホシサマ」を「オホスサマ」といつたり、「オホシシャマ」などと訛らないやうに注意する。

文字 新字 —— アマノ川

語句語法 三句とも名詞どめになつてゐる。「タナバタノアマノ川」は「七夕の夜の天の川の美しさよ」の意味、「ピカピカトオホシサマ」は「ぴかぴかとお星さまが光つていらつしやる」の意味、「ニコニコトオホシサマ」は「にこにことお星さまが笑つていらつしやる」の意味で、いづれも文的表現である。

この詩が明かるくほがらかにひびくのは、開口音の「ア」及び「オ」母音が多くふくまれてゐるからである。

備考

カズノホン一二十一頁と連絡して取扱に考慮する。

二十九　ハコニハ

教材の趣旨

兒弟仲よく箱庭を作る。最初土を高くして山を作り、山に木を植ゑ、苔を附け、山の傍に川を作つて石や橋を並べ、段々と箱庭を作つて行く。工程の進むにつれて、漸次箱庭の形ができ上つて行くのは樂しみである。その樂しさの中に兒童を浸らせながら、形無きところから形あるものを作り出して行く工夫創造の喜びに感動させようとするのである。本教材は、兒童の作業生活をそのまま寫したもので、作業生活の一つの指針となると同時に、それを報告する報告文の一例とも見られ、隨

つて兒童の綴り方への關聯を示唆する。又この主題は、地理的教材としての意義を多分に持つもので、山・川・橋等を關係的に把握させると同時に、素朴な模型圖を作ることにもなるのである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせる。箱庭を作つたことがあるか、どんな箱庭を作つたか、誰と作つたか、等の問答をして、體驗を呼び醒し箱庭作りの情景を心の中に思ひ浮かべさせながら、文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導して讀みを確實にする。比較的長文であるから、段落句讀點に留意させ、なほ話合によつて全文を要約させながら讀ませる。

コトバノオケイコ四十頁の

ハコニハヲツクリマシタ。
山ヲツクリマシタ。
川モツクリマシタ。
オヂイサンニミテイタダキマシタ。

を讀ませて、それが本教材の要約であることに氣づかせる。

コトバノオケイコ四十頁の

ハコニハ　ニハトリ　ニハイシ
ウヱ木　ハチウヱ　タウヱ
小サナ川　川ノミヅ　アマノ川

等によつて、「ニハ」「ウヱ」のカナヅカヒを練習させ、「川」の字の習得を確實にするとともに、語彙の擴充をする。

「小サイ」の「サイ」は重母音を含んでゐる。

コトバノオケイコ四十一頁によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

注意すべきことば　文字語句語法等

發音　「ニイサン」「ツチ」「オヂイサン」の方言は全國いろいろあるから注意して指導する。「ハコニハ」を「ハゴヌリ」「ツクリ」を「チクリ」「ツグリ」、「ツチ」を「ツヂ」又は「チチ」、「小サイ」を「ツーサエ」「チツチャイ」「チツコイ」、「フチ」を「フツ」又は「フヂ」、「イシ」を「エヂ」又は「エシ」「ハシ」を「ハヂ」等と訛らないやうに注意する。なほ「デキテ」を「デケテ」といはないやうにする。

「ハシ」のアクセントは、「ハシ」が橋、「ハシ」が箸、「ハシ」が端であることに注意して指導する。

文字　新字――山　本

語句語法　「スッカリデキテカラ」の「カラ」の使ひ方を例によつて會得させる。

オヂイサンニミテイタダキマシタ

ホメテクダサイマシタ

の「イタダキマシタ」「クダサイマシタ」の敬語に注意する。

「ホホウ、コレハヨクデキタネ」――對話が地の文に挿入された場合の書きあらはし方に就いて注意させる。

三十　ココハドコノホソミチダ

教材の趣旨

地方地方に傳誦される童謠はいろいろあつて、子どもたちはそれを歌ひながら樂しく育つていく。歌のひびき・調子・ことば・意味などがしらずしらずの間に子どもの心にしみこんで、日本の子どもらしい感情を養ふのである。

この教材は、歌が對話の形で構成されてゐる。卽ち一人の子どもが、「ココハ、ドコノホソミチダ」と歌でたづねる。するとほかの子どもは、「テンジンサマノホソミチダ」と歌で答へる。そこで「ドウゾ、トホシテクダサイナ」とたのむ。「ヨウノナイモノ、トホシマセン」とことわる。おしまひに「テンジンサマヘマキリマス」といつてたのむ。「ソレナラ、トホシテアゲマセウ」と、やつと許されて、そこをとほりぬけることができるのである。

この歌には、これに伴なふ遊戯があつて、よく日暮の町かどや、あき地等で行はれてゐる。この歌詞は、地方によつていろいろ方言的に歌はれてゐるが、本教材はできるだけ標準語に近くした。

遊びの中におのづから敬神の心がこもつてゐることに注意すべきであり、この精神は、次の「オミヤノ石ダン」に發展する。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。どんな歌を歌ひながら遊ぶか、その遊び方はどんな風にするか、等の話合をして、文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導し、韻文であるから韻律を生かすやうに讀ませ、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 四十二頁「アゲマセウ　アゲマセン」「イキマセウ　イキマセン」によつて、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ 四十二頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ全文を書寫させる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「アゲマセウ」の「ゲ」は鼻濁音。「ドウゾ」は「ドーゾ」、「トホシテ」は「トーシテ」、「ヨウノナイモノ」は「ヨーノナイモノ」、「マキリマス」は「マイリマス」、「アゲマセウ」は「アゲマショー」と發音する。

「テンジンサマ」を「テンジンシャマ」、「ヨウノナイモノ」を「ヨウノネーモノ」、「クダサイ」を「クダセー」、「ソレナラ」を「ソンナラ」「ソレダベ」と訛る地方では、矯正する。

文字　新字――(セウ)

語句語法

「ココハ、ドコノホソミチダ
テンジンサマノホソミチダ」

のやうに敬語のないことばから始つて、「ドウゾ、トホシテクダサイナ」以下のやうに敬語的な表現に移つてゐるが、これはむしろ子どもらしいおもむきがあらはれてゐるものと見るべきである。

三十一　オミヤノ石ダン

教材の趣旨

「ハトコイ」「コマイヌサン」に出發した敬神教材は、「ココハドコノホソミチダ」の韻文を經て、本課に至つて、更に一層の發展を示してゐる。お宮の石段を一二三と數へて登つて行つて、神前で、私たちが元氣で暮すことができるのも、神樣のお蔭だといふ氣持で拜禮する場面を、前後二

聯の韻文の形式であらはし、神前に於ける二拜二拍手一拜の禮法も生活的にあらはしてある。特に文字の點からは、「キヲツケ」の課の延長として、七から十までの新字が、極めて自然に提出されてある。カズノホンに於いては、六月に、既に十を超える數の數へ方を教へてゐるから「二十五ダン」の「二十五」の數も、兒童にとつては無理ではなからう。「二十五ダン」の「五」と、「ゴシンゼン」の「ゴ」とが同じ韻であり、「二ドオジギシテ、手ヲウッテ、モ一ツウッテ、オジギシテ」は、二拜二拍手一拜を意味し、「ワタクシタチハゲンキデス」は、神樣のお蔭で私たちはこんなに元氣でありますといふ意味である。本課は前課と關聯させ、不卽不離の關係に於いて指導すべきである。挿畫は、お宮の石段を圖案化して示したものである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。又「ハトノコイ」「コマイヌサン」の課と聯關させて問答をする。お宮にお參りすると鳩がゐる、そのほかに鳥居もゐるし、コマイヌもある。コマイヌはどんな樣子をしてゐるか、お宮へお參りする時には石段をのぼつて行く、石段を數へて登るのは面白いものだが、誰か數へた者はないか、お參りしたら、神前でどうして拜むか、みんなどんな氣持で拜むか、等の問答をして文章に導入する。なほ**コトバノオケイコ**四十三頁の「マサヲサントハチマンサマヘオマキリシマシタ」から「カミサマノマヘデヲガミマシタ」までを讀ませて、話合の整理をなすとともに、この韻文の背景を與へておくがよからう。

韻文であることに注意し、發音を正しく明瞭に、韻律的に朗讀させ、文字語句を指導することによつて讀みを確實にする。

石段の數へ方は、「一 二 三、四 五 六 七、八 九 十」と數へるが、「モ一ツ」の「一ツ」を手がかりとし、又**コトバノオケイコ**四十三頁と連絡して、「一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツ、九ツ、十」といふ數へ方を練習させ、十一以上は「十一、十二、十三、十四……」であることに氣づかせる。

コトバノオケイコ四十四頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文をも書かせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「二十五」の「ゴ」、「ゴシンゼン」の「ゴ」、「ゲンキ」の「ゲ」等は純然たる濁音であるが、「オジギ」の「ギ」は鼻濁音であることに注意する。「十」「二十五」の「十」を「ジー」又は「ズー」、「手」を「テー」と發音しないやうに注意する。

文字　新字――石　七　八　九　十（ジュー）　手

語句　韻文であるから、散文と違つて表現が集約されてゐる。「二十五ダンデゴシンゼン」は、二十五段登つたらそれで石段が終つて、神前に出たといふ意味であり、「ワタクシタチハゲンキデス」は、「お蔭樣で」といふ氣持を言外に持つのである。

三十二、アサガホ

教材の趣旨

おとうさんが心をこめて育てた朝顔が、始めて花を咲かせた朝の情景である。咲いた朝顔の花を見つけたおとうさんが、思はず「アサガホガサイタヨ」と誰にいふともなく大きな聲でいふ。それを聞きつけた「ボク」が、すぐそこへ行つて見ると、鉢植の朝顔が二つ咲いてゐる。紫

色の大きな花である。何ときれいなみづみづしい花であらう。「ボク」はその美しさに見とれてゐたが、「さうだ、これを寫生をしてみよう」と思ひついて、畫用紙とクレヨンを持つて來て、濡縁に腰かけた。かき始めてゐると、ラジオがひびいてくる。ピヤノの曲だ。

教材はこのすがすがしい夏の一情景を表現し、自然への關心を深めるとともに、また家庭の温情にひたらせる。なほ本教材はヨイコドモの「ナツヤスミ」と關聯して取扱ひ、あはせて綴り方の練習に資する。

取扱の要點

挿畫を中心に、兒童の體驗や、朝顔の花に就いて話合をさせる。朝顔の花はいつ咲くか、朝顔の花の色にはどんなのがあるか、寫生をしたことがあるか、何を寫生したか、等の話をさせて、文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ　四十五頁によつて□の中に適當なことばを記入させて讀ませる。

コトバノオケイコ 四十六頁の「アサガホ　ユフガホ　ワタクシノカホ」によつて、「カホ」のカナヅカヒに注意させる。

また「大キナハタ　小サナハタ」によつて、「大」と「小」とを對照して、語彙の擴張をはかるとともに、「大」の字の習得を確實にする。

コトバノオケイコ 四十六頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「オトウサン」「アサガホガ」「ビヤノガ」の「ガ」は、何れも鼻濁音である。

「オトウサン」――オトーサン　「アサガホ」――アサガオ　「ハチウエ」――ハチウエ　「大キナ」――オーキナ　「シャセイ」――シャセー

「二ツ」を「フタチ」「ヒターチ」と訛らないやうに指導する。

「オトウサン」には、いろいろな方言がある。「オトーサン」を標準として指導することが大切である。

「花」は「ハナ」、「端」は「ハナ」、「鼻」は「ハナ」のアクセントに注意して指導する。

文字　新字――大キナ

語句語法　「オッシャイマシタ」は、「イヒマシタ」の敬語である。

「イッテミルト」は「ボクガイッテミルト」の意味である。

「大キナハナデス」と現在形になつてゐるのは、實感を強調したものである。

「アサガホガサイタヨ」といふやうに、對話が地の文に挿入された場合の書きあらはし方に就いて注意する。

備考

本課以下「ハナツミ」まではヨイコドモ上「ナツヤスミ」と連絡して取扱ふ。

三十三　オハカノサウヂ

教材の趣旨

お盆には、佛壇を飾つたり、お墓をきれいに掃除したり、香花や供物をしたりして、先祖の靈をまつる。それは全國的に行はれる年中行事で、この行事を通して、兒童に崇祖の精神を體得させるのが本教材の目的

である。ただかうした年中行事が、地方によつて或は陽暦で行はれ、或は陰暦で行はれるので、教材とすることに惱みはあるが、併しその精神を生かして末節に拘泥しない心構が大切であり、指導上地方的に生かすことが大切であらう。

教材は、姉と自分が、母についてお墓の掃除に行つたことの生活記錄であるから、兒童には主題表現ともに親しみ易く、隨つて兒童の綴り方に直接關聯を持ち得るものである。

お墓の掃除をすることは、祖先を大切にする精神のあらはれであるが、お墓のそばに祖父の好きな萩の花が植ゑてあり、その萩の根もとに水をかけてやる母の心は、崇祖の精神を最もよく具體化したものである。隨つて、

「ハギハ、オヂイサンノオスキナ花デシタヨ。」

ト、オカアサンガオッシャッテ、ソノネモトニ、水ヲオカケニナリマシタ。

は、本教材の項點として、非常に感銘的であることに注意すべきである。

なほこの教材では、作者が一年生であり、ねえさんは三年生ぐらゐと見てよからう。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。お盆になるとどんなことをするか、お墓の掃除に行つたことがあるか、誰と行つたか、等の話合をして、文章に導入する。

發音を正し、地の文と對話とを意識して讀ませ、文字語句を指導して讀みを確實にする。なほ話合によつて文章を要約させながら、**コトバノオケイコ**四十七頁

オハカノマハリノ草ヲトリマシタ。

オハカノ石ヲ水デアラヒマシタ。

オハカノソバニハギガアリマシタ。

の文章を讀ませ、それが本教材の要約であることに氣づかせる。又これを手がかりとし、教材に卽して話させるのもよい。

コトバノオケイコ四十七頁の

オトウサンノオスキナ花ハ、□□□デス。

以下の□□□の中に花の名を記入させ、語彙の擴張をなす。

コトバノオケイコ 四十八頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「オカアサンガ」「アカイ花ガ」の「ガ」、「ハギ」の「ギ」は、共に鼻濁音である、「サウヂ」は「ソージ」「マハリ」は「マワリ」と發音し、「マーリ」とならないやうにする。「ツイテ」の「ツイ」、「アカイ」の「カイ」、「サイテ」の「サイ」は重母音を含むことに注意する。又「二ツ三ツ」と熟した場合の「三ツ」は「ミツ」と發音する。「イキマセウ」が、「イギマショー」と濁音にならないやうに注意する。

文字 新字——草(クサ) 水(ミヅ) 花(ハナ)

語句語法 「ネエサントフタリデ」は、「ネエサントワタクシトフタリデ」の意味で國語特有の言ひ方であることに注意する。

「オハカノマハリノ草ヲトッタリ、オハカノ石ヲ水デアラッタリシマシタ」の「タリ」の用法に留意する。

「ハギハ、アカイ花ガ二ツ三ツサイテキマシタ」の如き、「何は何が」の形は、國語固有のもので、例へば「象は鼻が長い」「今日は天氣がよい」「私はごはんがたべたい」などと形式を一にするものである。

次の諸例によつて、敬語の用ひ方に注意させる。

オカアサンガ／オカアサンガ／オッシャイマシタ。
オカアサンガイヒマシタ。

オスキナ／スキナ花デシタ。
スキナ花デシタ。

水ヲ／水ヲ／オカケニナリマシタ。
水ヲカケマシタ。

三十四　花ツミ

教材の趣旨

前課にひきつづいての季節教材であり、姉と妹が、近くの野原に出か

けて花つみをする生活の表現で、「ワタクシタチ」のワタクシは一年生、妹は五つぐらゐと見るべきである。これも綴り方と關聯を持ち得る。

二人が草の中を歩いてゐると、初めにナデシコの花を見つけた。それからまたさがして行くと、今度はヲミナヘシの花が咲いてゐた。松の木かげには、紫のキキャウの花が咲いてゐた。花つみの興味は漸層的に高まる。妹がキキャウの蕾をそつと指先でつまんでみた。まるくてやはらかい、ふくらんだ蕾は、いかにもかはいらしいので「カハイラシイネ」と姉にささやく。ここにこの教材の感動の頂點があるとともに、兒童の生活に對する指導性がある。即ち子どもは、かうした場合、蕾をつみ取るであらう。ただつまんで「カハイラシイネ」とささやくだけで、つみ取らないところに自然に對する愛撫の心があらはれてをり、そこに指導性があることに注意すべきである。最後の「ワタクシタチハ、手ニモチキレナイホドツンデ、ウチヘカヘリマシタ」は、結局この文の餘韻である。

教材は、花つみの樂しさを味ははせ、女の子どもらしいやさしさを感じさせ、特に日本的な草花としてのナデシコ・キキャウ・ヲミナヘシなどをとほして、國土の自然への愛着を持たせようとするのである。

本教材にあらはれる植物は、ナデシコ・ヲミナヘシ・キキャウの三つであるが、さきに、アサガホがあり、ハギがあり、後にススキも登場して、卷一の自然風景を飾つてゐる。

取扱の要點

挿畫（掛圖）を中心として、兒童の體驗と結んで話合をさせる。花つみに行つたことがあるか、誰と花つみにいつたか、どんな花をつんで來たか、花の色はどんな色であつたか、等の話をさせてから、文章に導入する。

發音を正し、花つみのたのしさを心に描きつつ讀ませ、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ四十九頁の文章を讀ませて、それが本教材の要約であることに氣づかせる。また逆にこれを手がかりとして、教材に即して話をさせてみるのもよいで

あらう。

コトバノオケイコ五十頁の

ノハラヘイキマシタ
ウチヘカヘリマシタ
花ヲミツケマシタ
花ヲツミマシタ
カハイラシイネ
カハイイコトリ
アカチャンヲカハイガッテヤリマス。

によつて、カナヅカヒに注意させる。

「松ノ木ヲ五本ウエマシタ」と「カハイラシイ草花モウエマシタ」とによつて、「松」と「草花」の文字を習得させ、語彙の擴張をはかる。

コトバノオケイコ五十一頁によつて、文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

コトバノオケイコ四十九頁の繪に、それぞれ色を塗らせて作業的に取扱ひ、花の理會に

資する。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「カゲ」の「ゲ」は、鼻濁音。

「イモウト」――イモート　「ヲミナヘシ」――オミナエシ　「キキャウ」――キキョー　「カハイラシイ」――カワイラシー　「イヒマシタ」――イーマシタ

「ツレテ」を「チレテ」、「ツミニ」を「チミニ」、「ウチヘ」を「ウチサ」、「カヘリマシタ」を「ケーリマシタ」と訛らないやうに注意して指導する。

文字　新字――松（ショウ）（キャウ）

語句語法

「ナデシコノ花ヲミツケマシタ。」
「ヲミナヘシノ花ヲミツケマシタ。」
「キキャウノ花モサイテキマシタ。」

によつて、「モ」の用法に注意させる。

最初に「ノハラヘ花ヲツミニイキマシタ」と書き、終りに「ウチヘカヘリマシタ」と結んだ首尾一貫せる文章構成に留意して指導する。

各文の主格は「ワタクシ」又は「ワタクシタチ」であるが、それを掲げないところに、むしろ國語固有の表現がある。

三十五　ユフダチ

教材の趣旨

暑さにあへぐ夏の日、ざあつと降つて來る夕立は、降り方が勇壯であるばかりでなく、必ず雨後の爽快さを伴なふから、大人にとつても子どもにとつても喜ばれる人氣者である。もつとも、夕立には雷が附きものので、兒童の中には夕立を餘り好まない者がゐるかも知れない。しかし雷をこはがらないで、平氣でおかあさんの手傳をして、雨戸を閉める強い子どもであるやうに仕向けて行かなければならない。

この教材は、夕立の光景を子どもらしい感じで叙し、夕立の降る前の空や木の様子から、大粒の雨が落ちて來て雷が鳴り、ざあつと篠突くやうな大雨となる過程が描かれてある。その夕立を背景にして、おかあさんと子どもが、あわただしく戸を閉めるのであるが、そこにも子どもの心がはたらいてゐる。しかも總てのものがあわただしく動いて、瞬時瞬間急速に情景が變化してゐる。その點を、次の夕立後の様子と比較しながら讀み取らすことが大切である。

取扱の要點

挿畫を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。夕立が降つて來た時のこと、明かるかつた空が急に暗くなること、どこからともなく風が吹いて來ること、木の葉がゆれること、大つぶの雨が二つ三つぽつぽつ降つて來ること、雷がなること、夕立が降つて來た時、どんなことをしたか、等話合をさせて文章に導入する。

發音を正し、文字語句を指導し、讀みを確實にする。特に文の持つ爽快なしかもあわただしい感じを讀みによつて會得するやうに指導する。

本教材には、「ザワザワ」「ピカリ」「ゴロゴロ」「ザアッ」等の擬聲語が多く用ひられてをり、それらがこの文を具體的にしてゐるから、これらのことばを指導することが大切で

ある。

コトバノオケイコ五十二頁によつて□□の中に適當なことばを入れ、まとまつた文を作らせる。例へば、

カゼガ、ザワザワトオトヲタテマシタ。

カミナリガ、ゴロゴロトナリマシタ。

トケイガ、カチカチトナツテヰマス。

アメガ、ザアツトフツテキマシタ。

ユキガ、チラチラトフツテキマシタ。

木ノハガ、パラパラトオチテキマシタ。

の類で兒童にある程度工夫させて記入させるがよい。

コトバノオケイコ五十三頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「クモガ」「ヒロガリマシタ」「木ノハガ」「雨ガ」「カミナリガ」等の「ガ」は鼻濁音であり「ゴロゴロ」の「ゴ」は濁音である。「空イッパイ」を「エッパイ」と訛らないやうに注意する。

「クモ」のアクセントは、雲・蜘蛛いづれも「クモ」で、「アメ」は雨が「アメ」、飴が「アメ」である。

文字　新字――空　雨

語句語法　次の二つを比較して敬語の用ひ方に注意させる。

オカアサンハ、イソイデアマドヲオシメニナリマシタ。

ワタクシハ、オカアサントイッショニアマドヲシメマシタ。

三十六　ニジ

教材の趣旨

「ユフダチ」から「ニジ」に發展する。勢よく降つてゐた夕立が、からりと晴れ、あたりが明かるくなつて、日がきらきらとさして來る。蟬が嬉しさうに鳴きだす。ふと向かふの空を見あげると大きなニジが半圓形になつてかかつてゐる。さつきのものすごい夕立にくらべて、これは

また何とはれやかな美しい風景であらう。子どもが「オカアサン、ニジガデマシタヨ。キテゴランナサイ」と大きな聲で呼ぶ。おかあさんはすぐ出てきて「マア、キレイナニジダコト」といひながら子どもといつしよにしばらく空の虹に見とれる。自然も人生も子どもの心に卽して嬉しさで滿ちみちた表現である。

前課とあはせて自然現象の端倪すべからざる變化と、限りなき自然の美と、これを背景として活躍する母子の情愛とを感得させるべきである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心として、兒童の體驗と結んで話合をさせる。ニジを見たことがあるか、ニジはどんな時にあらはれるか、ニジはどんな形をしてゐるか、どんな色をしてゐるか、ニジを見てどんな氣持がするか、等の話をさせて文章に導入する。

發音を正し、雨後の氣持のよさやニジの美しさを感じさせつつ讀ませ、文字語句を指導して次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 五十四頁の

ユフダチガヤミマシタ。大キナニジガデマシタ。オカアサンガ、「キレイナニジダコト。」トオッシャイマシタ。

を讀ませて、それが本教材の要約であることに氣づかせる。またこれを手がかりとして教材に卽して話合をさせるのもよい。

コトバノオケイコ 五十四頁の「ユフダチ　ユフガタ　ユフヤケ　ユフハン」「ムカフノ空　ムカフノ山」によつて、カナヅカヒに注意させる。

また「大雨　アヲ空　アサ日　ユフ日」によつて、「雨」「空」「日」などの文字を習得せしめ、語彙の擴張をはかる。

コトバノオケイコ 五十五頁の文を讀ませて「ウレシサウ」「タノシサウ」「オモシロサウ」などの副詞句の使ひ方を知らせ、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ 五十五頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば　文字　語句　語法等

發音　「ユフダチガ」の「ガ」、「アタリガ」の「ガ」、「日ガ」の「ガ」、「セミガ」の「ガ」、「ニジガ」の「ガ」は、み

な鼻濁音である。

「ユフダチ」――ユーダチ　「ウレシサウ」――ウレシソー　「ムカフ」――ムコー　「マア」――マー　「キレイ」――キレー

「アカルク」を「アカルー」と訛らないやうに注意して指導する。

「ニジ」の訛音と方言が多い。注意して指導すべきである。

「ヒ(日)ガ」は「ヒガ」であり、「ヒ(火)ガ」は「ヒ|ガ」である。アクセントに注意する。

文字　新字――日ヒ（カフ）

語句語法　「セミガ、ウレシサウニナキダシマシタ」は擬人的な表現である。

「マア、キレイナニジダコト」の「マア」「コト」は、いづれも感動をあらはすことばである。

「オッシャイマシタ」は、敬語であることに注意させる。

三十七　アリ

教材の趣旨

夏はアリの最も活潑に働く時である。自分の體よりも大きな獲物を運ぶアリを見てゐると、どこからあれ程の力が出るかと不思議に思はれる。たくさんのアリが協力して食糧を運搬する有様を見ると、この小い生物が、戮心協力の生ける標本とさへ思はれる。自然の觀察一では、六月に「麥畠と虫とり」の中でアリを取扱ふことになつてゐるが、それを受けて、兒童の體驗を生かしながら取扱ふことができるであらう。

教材は七七を基調とする動的な韻律を持つてをり、主體的擬人的に表現されてゐる。特に「アリガナランデ、セッセトトホル」は、「セッセトイソガシサウニトホル」といふ意味で、この句は三度くりかへされて、この詩全體に統一感を與へてゐる。この「セッセ」と働くアリの一心不亂な表情が、次の「マジメナカホシテ」であつて、「マジメナカホ」の「カホ」は、アリ全體の表情と見るべきである。かうした擬人的な表現は漸層的に高まり、次の「ヤ、コンニチハ」「コンニチハ」の對話を導き出し、更に「オジギシテ」といふ人間らしい動作にまで及ぶのである。

取扱の要點

挿畫を中心に、兒童の體驗と結んで話合をさせる。アリは暑い日でもよく働くこと、アリに就いて自然の觀察でならつたこと、アリが行列を作つて通ることに就いて話合をさせ、文章へ導入する。

發音を正し、韻律を生かして讀ませ、文字語句を指導して讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 五十六頁の

アリガナランデトホリマス。
イソガシサウニトホリマス。
タクサン、タクサントホリマス。
「ヤ、コンニチハ。」
「コンニチハ。」
アイサツヲシテトホリマス。

を讀ませ、本教材の理解に資し、又話合の手がかりとする。

コトバノオケイコ 五十六頁の

ミチノヒダリガハヲトホリマセウ。

を讀ませて話合をさせ、左側を通行すべきことを考へさせ、實行させるやうに指導する。

コトバノオケイコ 五十六頁の

デアフ
デアヒマス

の例によつて、「デアフ」「デアヒ」のカナヅカとに注意させる。

コトバノオケイコ 五十七頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文を書かせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

發音　「アリガ」の「ガ」、「オジギ」の「ギ」はともに鼻濁音である。「アツイ」の「ツイ」は重母音を含んでをり、「アチー」等と訛るのを矯正する。「アリ」の「リ」を明瞭に發音しない地方では注意して指導する。又「デアフ」は「デアウ」で、「デオー」といはないやうにする。「アツイ」(暑)は「アツイ」であり、「アツイ」(厚)は「アツイ」である。アクセントに注意する。

文字　讀替——小ミチ（チヨ）

語句語法　「カホシテ」「オジギシテ」は、「カホヲシテ」「オジギヲシテ」といふ場合も多いが、

「カホスル」「オジギスル」は複合したサ行變格の動詞と見るべきである。

備考

自然の觀察一「麥畠と虫とり」と連絡して取扱に考慮する。

（以上七月）

三十八　川アソビ

教材の趣旨

前課では蟻の行列を眺めた。本課では池をほつて水をたたへ、魚をとつてその池にはなし、魚の形や動きなどをつぶさに見る生活に發展する。人物は勇と正男の二人である。初めに川の砂をほつた。すると下から水が湧いてくるので、二人は喜びながら池をつくつた。池の水は初めはにごつてゐるが、しばらくするとすんできれいになる。そこで魚をとらうといふことになる。正男が「メダカヲ二ヒキ」とる。勇も負けずに「エビトドヂャウ」をとる。二人は魚を池の中にはなす。ど

んな形をしてゐるか、どんなにして泳ぐか、ここに子どもの自然の觀察がある。メダカは小さいが、いかにも元氣ものらしくすいすいと泳ぐ。ドヂャウはものぐさで、ときどきによろりと動く。エビははしこく、透明で、時に見失ふことがある。かうした自然に對する子どもらしい感興から、子どもの科學が導き出されるのであるが、ヨミカタ教材として注意すべきは、それが生活の表現であり、ことにその小さい動物の特徴をとらへた文章であることである。即ちどこまでも國語の教材であつて、自然の觀察への契機にはなるが、自然の觀察そのものではないことに注意して取扱はなければならない。

取扱の要點

挿畫（掛圖）を中心とし、兒童の體驗と結んで話合をさせる。川遊びをしたことがあるか、何をして遊んだか、どのやうにして魚をとつたか、どんな魚がとれたか、その魚をどうしたかなどの話をさせて、文章に導入する。

發音を正し、川遊びの樂しさを心に描かせながら讀ませ、文字語句を指導して、次第に

讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 五十八頁の「イサムサントマサヲサンガ、イケヲツクリマシタ。ソレカラ、ザカナヲトリマシタ。ソノサカナヲイケニハナシマシタ」を讀ませて、それが、本教材の要約であることに氣づかせる。

コトバノオケイコ 五十八頁の

「ハジメハ水ガニゴッテキマシタガ、ダンダンキレイニスンデイキマシタ。」

以下の文を讀ませて、生々した文のあらはし方に注意させる。

コトバノオケイコ 五十九頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音 「水ガ」の「ガ」、「ニゴッテ」の「ゴ」、「サガシマシタ」の「ガ」、「オヨギマス」の「ギ」、「キマシタガ」の「ガ」、「メダカガ」の「ガ」は鼻濁音。「ゲンキ」の「ゲ」は鼻濁音ではない。

「キレイ」——キレー　「入レヨウヨ」——イレヨーヨ　「ソコノハウ」——ソコノホー

「スキトホッテ」——スキドーッテ　「ドヂャウ」——ドジョー

「二ヒキ」を「ニシキ」、「ドヂャウ」を「ドンジョー」、「エビ」を「イビ」、「見エマス」を「メーマス」、「イ

クウチニ」を「イグウチニ」などと訛る地方では、注意して矯正する。

文字 新字——下（シタ）出テ　入レヨウ（イレヨウ）　目（メ）ダマ　見（ミ）エマス（ヂャウ　ハウ　ニョ）

語句語法

「サカナヲトッテ入レヨウヨ」の「ヨ」は感動の助詞であるが、ここでは、さそひかける意味を強めてゐる。

「メダカガ二ヒキトレタ」「ボクハ、エビトドヂャウヲトッタ」——前者は受身的語法で可能の意味をあらはし、後者は能動的な語法である。この二者で正男、勇のそれぞれの性情があらはれてゐることに留意する。

備考

ヨイコドモ上「ナッヤスミ」、**ヱノホン一**「オサカナ」「水アソビ」、**カズノホン一**二十七頁と連絡して取扱に考慮する。

三十九　メダカサン

教材の趣旨

前課で、メダカとエビとドヂャウを取つて觀察した兒童の眼を、更にたくさん集つてゐるメダカの群に導き、童心に映るままを表現する韻文を教材とした。メダカがたくさん集つてゐる有樣を、「オホゼイヨッテナンノサウダン」と見、それが何かに驚いて、ぱつと四散する樣子を、「ワットニゲテッタ」と感じたのである。そこには、メダカ卽子ども、子ども卽メダカの境地がある。「メダカ、メダカ」といはないで、「メダカサン、メダカサン」と、したしみをもつて呼びかけてゐることと相俟つて、いかにも子どもらしい心情が表出されてゐる。

この教材は、自由詩であるが、最初の「メダカサン」の反復が韻律を呼びおこし、その韻律が全體を支配してゐることに注意すべきである。

取扱の要點

挿畫を中心として話合をさせる。メダカは群をなして泳いでゐること、人が足音をさせたり、影がさしたりすると、パット四方へ散つてしまふことなどを、兒童の體驗と結んで話合をさせ、文章に導入する。

韻文であるから、發音を正し韻律を生かして讀ませ、話合と相俟つて讀みを確實にする。

適當に全文を書寫させる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「ミンナガ」の「ガ」、「ニゲテ」の「ゲ」は鼻濁音である。「オホゼイ」は「オーゼー」、「サウダン」は「ソーダン」と發音する。

「メダカ」の方言は非常に多いから「メダカ」を標準として指導する。「オホゼイ」を「オージェー」と訛らないやうに注意する。

「ワット」は、元來叫びの擬聲から來た副詞であつて、「ワットニゲル」といへば、「ワットサケビナガラニゲル」ことである。蟻に「ヤ、コンニチハ」といはせたと同樣、擬人的なあらはし方である。「ニゲテッタ」は、元來「ニゲテイッタ」とあるべきであるが、韻文的制約によつて許容的に用ひた。

備考

前課の發展として取扱に考慮する。

四十　トビトカメ

教材の趣旨

本教材から第三部にはいる。第一部では、もりあがつてくる兒童の素朴單純なことばをとらへて教材化し、第二部では挨拶や躾のことばを身につけさせながら子どもの生活を表現し、第三部では、童話及び童話化した教材によつて長文の讀解力を養ひ、併せて空想の世界を豐かにする。

本教材は、トビとカメが海に就いて話しあふ現代的な童話である。一羽のトビが天空高く飛んでゐる。それを見つけた池のカメが、好奇の眼を輝かしながらトビにたづねる。「あの山の向かふに何があるか」とたづねたがるこの頃の兒童のあこがれが、カメによつてあらはされてゐるとも見られる。トビはさすがに高く飛びまはつてゐるだけに

廣い世界を見てゐる。カメはいはゆる井戸の蛙で、「コノイケヨリヒロイノデスカ」の問に對して、トビもちよつと答へやうがなかつたが、「ドウシテドウシテ」と否定しながら、「空ノヤウニヒロイ」と教へた。トビはそれでもものたりないので海の歌をうたつた。

教材には寓意も諷刺もないが、結局兒童に感銘さすべきものは海である。四面環海のわが國であるが、全國のこの期の兒童で海を見てゐるものは意外に少ないであらう。しかも海國日本の意識を高揚して國防に目ざめしめることは、頗る緊要である。

「イケニフネ」の教材を出發點として、海への憧憬をさらに一歩進めたのが、この教材であることに留意すべきである。

取扱の要點

挿畫（掛圖）を中心として、トビのこと、カメのこと、ウミのことなどに就いて、兒童の知つてゐることを話させる。トビのとんでゐるところを見たことがあるか、トビはなんといつて鳴くか、カメを見たことがあるか、どこに住んでゐるか、カメに就いて何

かお話を知つてゐないか、ウミに就いて何か知つてゐることはないか、等の話合をさせてから、文章に導入する。

發音を正し、韻文は韻律を讀みの上に生かし、文字語句を指導して、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 六十頁の

ムカフノ空ニニジガ出マシタ
ウミノムカフカラフネガクル

センセイサヤウナラ
空ノヤウニヒロイノデス

トビガ空ヲトンデキマス
イケニカメガキマシタ

によつて、カナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ 六十頁の

マサヲサンガトビニナリマシタ。
ハナコサンガカメニナリマシタ。

フタリハオハナシヲシマシタ。
ドンナオハナシヲシタデセウ。

を讀ませ、それに就いて話合をさせてから、教材の對話の部分を劇的に話させる。

コトバノオケイコ 六十一頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

發音 「トビガ」の「ガ」、「カメガ」の「ガ」、「ナニガ」の「ガ」、「ウミガ」の「ガ」、「フネガ」の「ガ」は鼻濁音。

「ドウシテ」——ドーシテ 「カウイッテ」——コーイッテ 「ムカフ」——ムコー 「ビイヒヨロロ」——ビーヒョロロ 「日本」——ニッポン

「トビ」を「トンビ」、「カメ」を「ガメ」などと訛る地方では注意をして指導する。

「海」は「ウ|ミ」、「鷹」は「ウ|ミ」、「亀」は「カ|メ」、「瓶」は「カ|メ」のアクセントに注意して指導する。

文字 讀替——日本（ニッポン）（ヒヨ）

語句語法 「ヒロイヒロイ」「ドウシテドウシテ」は、何れもことばの反復によつて語勢を強めたものである。

「カウイッテカラ」の「カラ」は、トビの前のことばをうける。
「ピイヒョロロ」は、トビの鳴き聲であり、これを三度くりかへして、韻文の全體に統一感を與へてゐる。

備考

ヨミカタ―「イケニフネ」の發展として取扱に考慮する。

四十一　シタキリスズメ

教材の趣旨

新しい童話「トビトカメ」の後をうけて、古來傳承する舌切雀の童話を教材とした。ただ童話そのままを掲げないで、最も明朗で興味ある部分を取り、それを四つの場面にあらはして劇的に展開させた。元來舌切雀には殘酷な要素も介在し、「かちかち山」の童話とともに、教育的には考慮される部分がある。單にこれをお話として口頭で語るのは、餘

り深刻な感じも與へないからさしつかへないが、教材の文章として、何べんもくり返し讀ませる點で考慮すべきものがある。

第一の場面は、オヂイサンが杖をつきながらはるばるスズメの宿を訪ねて行くところ、第二の場面は、スズメたちが大喜びでオヂイサンを迎へるところ、第三の場面は、オヂイサンにスズメたちが踊を踊つて見せるところ、第四の場面は、ツヅラをもらつて歸るオヂイサンを、スズメたちが見送るところである。第一の場面に於ける「シタキリスズメ、オヤドハドコダ」のくり返しは、前課の最後の「ウミノムカフヘフネガイク、ピイヒョロロ」の韻文の餘韻をうけつつ、韻文とも見られ、散文とも見られる未分化の樣式で書かれてゐる。第二の場面は、對話と地の部分より成り、第三の場面は、純粹な叙述の文章、第四の場面は、オヂイサンとスズメたちの對話が主となつてゐる。かうした全體の構成と表現は、やがてあらはるべき劇教材への準備にほかならない。

取扱の要點

舌切雀の話に就いて兒童の記憶を整理し、挿畫(掛圖)を中心として話合をさせ、文章に導入する。

發音を正し、文字語句の指導をなし、段落や地の文、對話の文を意識させて、次第に讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 六十二頁の「オヂイサンハ、スズメヲカハイガリマシタ」以下「大キナツヅラヲモラッテカヘリマシタ」までを讀ませ、これを手がかりとして、舌切雀の話を要領よく話させる。

コトバノオケイコ 六十二頁の

ヨクオイデクダサイマシタ。

サア、ドウゾオアガリクダサイ。

によつて、兒童にこの文の意味を如何に動作にあらはすかを考へさせ、適當に指導して、ことばをいひながら動作をさせる。

コトバノオケイコ 六十三頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「オアガリ」の「ガ」、「ニギャカ」の「ギ」、「オミヤゲ」の「ゲ」、「アゲマシタ」の「ゲ」、「ゴキゲンショウ」の「ゲ」は鼻濁音であり、「ゴチソウ」「ゴキゲンショウ」の「ゴ」は濁音である。

「シタキリ」の「シタ」を「ヒタ」「ヘタ」「スタ」等と訛る地方がある。「スズメ」には方言が非常に多い。「オヂイサン」も「オズーサン」「オジジ」「オジャン」「オジンチャン」「オンチャン」等の方言が多く、「オザシキ」を「オダシキ」と訛り、又「ゴチソウ」を「ゴッツォー」と訛る地方がある。その他「タイソウ」「サヤウナラ」には地方的な言ひ方が多いから、矯正につとめる。

語句語法 「オイデクダサイマシタ」「オアガリクダサイ」「オイデクダサイ」等の敬語に注意して適切な指導をなす。

「オヂイサンハ、タイソウヨロコビマシタ」——物語の敍述であるから、敬語が用ひてないことに注意すべきである。

備考

ヱノホン一「カハイイトリ」と連絡して取扱に考慮する。

四十二　オ月サマ

教材の趣旨

教材は仲秋の滿月を主題とする。自然への愛着は、我が古來傳統の感情であり、趣味であつて、この感情趣味こそ先づ國語を通して啓培されなければならないものである。といつて、この期の兒童に大人同樣に客觀的な靜寂な自然が味ははるべきでない。そこにこの教材の主體的童話的な表現がある。

「日ガクレマシタ」の冒頭に次いで「オホシサマガ目ヲサマス」のである。既に自然は兒童の心を反映し、兒童の心を包んで擬人的に動いてゐる。やがて「ススキガオイデオイデ」をする。その招きに從つて「オ月サマガカホヲ」出す。それを歡迎するやうに、「ヤア、オ月サマガ出タ」といふ聲が流れる。コホロギがうれしさうに鳴き出す。すべてのものに魂

があり、すべてのものが有心に結合して、人間的な劇を演じてゐる。かうした自然の童話化にこの文章の表現があるのである。

「ヤア、オ月サマガ出タ」

この聲の主が誰であるか。――もちろん附近にゐた子どもの聲に違ひないが、しかしそれはこの文の作者の叫ばうとする聲でもある。敢へてその主を穿鑿するまでもなく、その場面に流れる如く通つた聲であり、その聲自身が月に向かつて挨拶をしたのである。

マルイ、マルイオ月サマデス。

アカルイ、アカルイオ月サマデス。

「マルイ」といひ、「アカルイ」といふ修飾語の反復とともに、「オ月サマデス」の述部も亦反復されてゐる。そこに兒童言語の表現形式があるとともに月の讃美がある。さうして、ここだけが現在形になつてゐるのは、ここに文の頂點があり、心の安住があるからである。

コホロギガ、ウレシサウニナイテキマス。

大人から見れば無心に鳴くコホロギも、兒童の心には、美しいお月さまが出たから喜んでうれしさうに鳴くのである。

この文章と不卽不離に、次の「ウサギウサギ」の童謠が掲げてある。いはば「オ月サマ」の餘韻であり、又見方によつては、前後對照して月二題の趣をなす。

古來傳承の童謠も數は多いが、この歌ほどふくらみを持ち、なつかしい旋律を持つたものは滅多にないであらう。名月の夜に、今も子どもたちはこの歌を異口同音に歌ひ、この歌の主題たる兎と同じやうに子どもはねまはる。さうして、それがとりもなほさず子どもらしい月の鑑賞に外ならないのである。

取扱の要點

挿畫〔掛圖〕を中心に、兒童の體驗と結んで月に就いて話合をさせる。十五夜のお月さまはまるいこと、十五夜のお月さまの美しいこと、お月見にはどうするかといふこと、その他星やすすきやこほろぎに就いて話させてから、文章に導入する。

文章は靜かに讀ませる。發音を正し、文字語句を指導し、月の美しさを語るやうに讀ませて讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 六十四頁の

コンヤハ十五ヤオ月見デス。ススキヲカザリマセウ。オダンゴヲアゲマセウ。

ワタクシタチモ、ウサギニナッテ、トンダリハネタリウタッタリシマセウ。

を讀ませ、お月見の夜のうれしさに就いて話させてから、「ウサギウサギ」の童謠を讀ませる。韻文であるから、韻律を讀みの上に生かすやうに指導することが大切である。

コトバノオケイコ 六十四頁オホシサマ以下によつてカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ 六十五頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音　「日ガ」の「ガ」、「オホシサマガ」の「ガ」、「森ノ上ガ」の「ガ」、「ススキガ」の「ガ」、「オ月サマガ」の「ガ」、「コエガ」の「ガ」、「アガリマシタ」の「ガ」、「コホロギガ」の「ギ」、「ガ」、「ウサギ」の「ギ」、「十五ヤ」の「ゴ」は何れも鼻濁音である。

「カホ」は「カオ」、「イフ」は「ユー」、「コエ」は「コエ」、「コホロギ」は「コーロギ」、「ウレシサウニ」

は「ウレシソーニ」と發音する。

「ホシ」を「ホス」、「目」を「メー」、「サマシマシタ」を「サマスマスタ」、「ススキ」を「シシキ」、「オ月サマ」を「オチキサマ」、「スッカリ」を「シッカリ」、「十五ヤ」を「ジーゴヤ」又は「ズーゴヤ」などと訛る地方では矯正に力める。

「オ月サマガ出タ」――地方によつて「デタ」を「デキタ」といふところがある。「デル」と「デキル」の區別をはつきり教へる必要がある。

文字　新字――森　オ月サマ（イフ）

語句語法　「オホシサマガ、目ヲサマシマシタ」「ススキガ、オイデオイデヲシテキマス」「オ月サマガ、カホヲダシマシタ」「コホロギガ、ウレシサウニナイテキマス」等何れも擬人的な表現であり語法である。

「マルイマルイ」「アカルイアカルイ」「ウサギウサギ」といひ、「オ月サマデス」を二度くりかへし、「ナニ見テハネル」「十五ヤオ月サマ見テハネル」といふのは何れも同じ語の反復で、兒童の言語に一般的な形である。

「ナニ見テハネル」は問であり、「十五ヤオ月サマ見テハネル」は答であつて、この問の文と答の文がしつくりと一體になつて童謠が構成されてゐることも注意すべきである。

備考

自然の觀察―「お月さま」「うさぎ」ウタノホン上「オ月サマ」ヱノホン―「オツキミ」「オツキミノゴチソウ」と連絡して取扱に考慮する。

四十三　モモタラウ

（以上九月）

教材の趣旨

我が國童話の王座を占め、五大童話中の隨一たる桃太郎の説話を教材とする。

日本一の誇を黍團子に象徴し、孝行・正義・仁恕・尚武・明朗・進取――殆ど修身の德目の大部分を無雜作に具體化したやうなこの童話である。よし自由主義時代にたまたま侵略的だといふ批評を蒙つたことはあつても、この日本的な童話の價値をどうすることもできなかつたので

ある。

この物語の起源が室町時代にありとする説は大體うなづけるところであるが、しかも地方に傳承する瓜子姫物語を通して竹取物語に溯り、更に伊弉諾尊の投げ給うた桃の實の故事に稽へれば、源流の遠さにはかり知られぬものがある。學者の穿鑿も至れり盡くせりで、或は西王母の仙桃の故事に及び、黍團子を孔子家語に尋ね、犬猿・雉を鬼門に向かふ申酉戌の變形だとする。

それらはともかくとして、童話としての興味はその内容の發展變化とともに、よく備はつた話説の形式にある。一少年と犬猿・雉といふ弱小動物が、鬼といふ怪物の大軍と戰つて大勝利を獲る。小者が大なる者に對して勝つのは、あらゆる童話の形式であり興味である。更に犬と猿と雉が現れるに從つて、同じ敍述が三度くりかへされる反復も亦童話の形式であり興味である。兒童に對して取扱ふ場合には、説話の意味よりも、寧ろかうした形式の興味を考へておくことが大切である。

教材は十七頁に亘る長文である。これによつて讀む興味と讀破する力を養ふのが本教材の主たる目的であるが、幼い頃から祖父母たちに語り聞かされた物語であり、兒童の熟知する主題であるから、專ら文字文章を通して、目によつてこれを讀む喜びにひたらせることが取扱の中心となるべきである。

取扱の要點

本教材は非常な長文であり、しかも話の内容は、兒童が大體理會してゐることであるから、話合を省略してまづ讀ませるがよい。

通讀・部分讀みを十分にさせ、文字・語句を指導し、話合と相俟つて讀みを確實にする。

コトバノオケイコ 六十六頁の文章を讀ませ、それが本教材の要約であることに氣づかせ、又これを手がかりとして兒童に要領よく桃太郎の話をさせる。

コトバノオケイコ 六十七頁の

ムカフカラ犬ガ來マシタ
オニノタイシャウニムカヒマシタ
モモタラウヲムカヘマシタ

によつて、「ムカフ」のカナヅカヒに注意させる。

また「オヂイサン　オバアサン」と「ヲヂサン　ヲバサン」とを比較させて、そのカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ　六十八頁・六十九頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

發音　「オバアサンガ」の「ガ」、「モモガ」の「ガ」、「ナガレテ」の「ガ」、「男ノ子ガ」の「ガ」、「キビダンゴ」の「ゴ」、「犬ガ」の「ガ」、「オニガシマ」の「ガ」、「サルガ」の「ガ」、「キジガ」の「ガ」、「タタカヒマシタガ」の「ガ」、「カケゴエ」の「ゴ」は、いづれも鼻濁音である。

「オヂイサン」は「オジーサン」、「オバアサン」は「オバーサン」、「キラウ」は「キロー」、「ウマレマシタ」は「ンマレマシタ」、「モモタラウ」は「モ、モタロー」、「ムカフ」は「ムコー」、「ヤウス」は「ヨース」、「タイシャウ」は「タイショー」、「カウサン」は「コーサン」、「カケゴエ」は「カケゴエ」と發音する。

「センタク」を「センダク」、「ヒロッテ」を「ヒローテ」「ヒラッテ」、「コシラヘテ」を「コサエテ」、「モラッテ」を「モローテ」、「ヌイテ」を「ヌイデ」、「人」を「シト」、「ヒキマス」を「シキマス」と訛る地方に於いては正しく發音するやうに指導する。

「タルマ」の「ル」を明瞭に發音するやうに指導する。

「桃」は「モモ」、「股」は「モモ」、「名ヲ」は「ナヲ」、「果ヲ」は「ナヲ」のアクセントに注意する。

文字　新字讀替――来マシタ　中男子勇マシク　少シ　犬　門　戸　刀　人

（ラウ　シャウ）

語句語法

「オヂイサントオバアサンガアリマシタ」の「アリマシタ」は、物語の敍述に使はれる語法であることに注意する。

「ドンブリコドンブリコ」は擬聲語で、桃の流れるさまを具體的にあらはしてゐる。

左の如き語句によつて敬語の使ひ方に注意させる。

キビダンゴヲコシラヘテクダサイ。

ドコヘオイデニナリマスカ。

一ツクダサイ。

モノヲトツタリイタシマセン。

ドウゾ、オユルシクダサイ。

本教材は、長文ではあるが、接續詞は殆ど使つてないから、叙述が、きびきびとはこばれてゐる。

備考

ヨイコドモ上の「ツヨイコ」の發展として取扱に考慮する。

ウタノホン一「モモタラウ」、ヨノホン一「モモタラウ」と連絡して取扱ふ。

四十四　カタカナ圖表

五十音濁音・半濁音・拗音の圖表を掲げる。

カタカナ圖表の取扱は、卷一の教材の進展に伴なひ、新しく提出される發音及び文字に關聯して、常にその發音及び文字が圖表中如何なる位置にあるかを注意せしむべきである。殊に發音の練習訛音の矯正に際しては、五十音圖の行と列とに卽して取扱ふ心構が大切である。例へばいはゆるイ・エの混同、シ・ス、チ・ツ、ニ・ネ、ヒ・フ、ミ・メの混同の如きは、イ

列・ウ列・エ列の關聯に於いて發音させることによつて正しい練習をさせることができ、又訛音もこれによつて矯正することができるのである。又ヒ・シの混同、フィ・フェの訛音、デ・レ、ド・ロ等の混同の如きは、ハ行・ラ行・ダ行等、行の關聯に於いて正しい練習をさせることを期すべきであり、キ・リ等の發音の曖昧なのはイ列と、カ行・ラ行と、行・列兩方面から正しくすることが大切である。かくの如く、發音の基礎的練習には常に五十音圖を頭に置いて適當に取扱ふことを期すべきである。

以上は主として卷一の教材の發展に伴なひ、隨時になすべき取扱に就いて述べたのであるが、特に清音に關する文字の提出の終つた時、濁音に關する文字の提出の終つた時、及び卷一の教材の全部を終つた時、その都度この圖表を利用することによつて、音韻及び文字の全體的練習をなさしめる。その際單にアイウエオ、カキクケコ等、行の取扱のみに終らず、アカサタナハマヤラワ、イキシチニヒミイリヰ等列の取扱を十分に行ひ、殊に清音の各列は朗讀・暗誦・暗寫せしめるまでに反復する

ことが大切である。

拗音に至つては、巻一の教材に於いて實際に提出せられるものは頗る少いから、專ら圖表によつて取扱を擴充しなくてはならない。唯ここに注意すべきは、拗長音に至つては種々のカナヅカヒがあつて、必ずしもこの圖表の表記法を基礎としないことである。

なほ拗音圖表中に、クヮ及びグヮを併せ掲げることもあるが、その音はカ、ガを標準とする以上、表記は寧ろカナヅカヒに屬するから、ここには掲げないことにした。

新出讀替文字一覽（ヨミカタ　一）

〔左傍ニ――ヲ附シタモノハ讀替文字デアル。ナホ（　）ヲ附シタモノハ讀替文字ト見ナス。〕

頁	行	新出讀替文字
六	一	ア
		カ
		イ
七	一	サ
		ヒ
八	一	ハ
		ト

頁	行	新出讀替文字
八	二	コ
九	一	マ
		ヌ
		ン
十	四	ウ
	一	ノ
		ル

十				十二				十三				十四				十八				十九			二〇
一		二		一		二		一		三		一		三		一		三		一		三	
タ	バ	ザ	ヘ	メ	ス	チ	テ	ガ	ヨ	ラ	ナ	モ	ピ	リ	ユ	（ユフ）	ヤ	ケ	キ				
十五			十六			十七				二〇	二一		二二					二三					
一		三	一	二	三	一	二	四		三	一	三	一		二	三		一					
シ	レ	ロ	デ	オ	ソ	フ	ク	ミ	セ	ニ	ワ	ツ	（ヤウ）	ゴ	ダ	（イッテ）	キ	ホ	ム				

															二三
四	一	五	五		二	七	五								三
ギ	（カウ）	ジ	グ	エ	パ	エ	ズ	ヲ	ベ						
	二七	二五			二四										

															二八
ゾ	ド	（タウ）	ビ	（シャ）	（ハ）	（サウ）	（ヒ）	（ヘ）	チ						
	三一			三〇		二九									

															三二
四	三	四	三	一	六	五	四	二	一						
（ガウ）	（ホ）	（ショ）	（ジャ）	ポ	プ	ポ	ブ	ネ	ペ						
	三五			三三											

															三五
上	ヅ	木	ゼ	六	五	四	三	二	一						
	七	三	一		七		六		五						
	三七		三六												

三八 三 小サナ（チャウ）
四 ゲ
三九 二 アマノ川
四〇 三 山
四二 六 （セウ）
五 五本
四三 一 石
二 七
八

四三 二 九
十
四 手
四四 六 大キナ
四六 五 草
四八 八 松
四九 一 （キャウ）
五〇 一 空イッパイ

五一 八 雨
五二 二 日

五四 四 小ミチ
五五 三 （チョ）
五六 一 下
五七 四 入レヨウヨ
五八 五 （ヂャウ）
五九 三 （ハウ）

五九 四 （ニョ）
五 月ダマ

六三 一 （ヒョ）
六八 五 旧本
三 森
五 オ月サマ
七一 八 （イフ）
一 來マシタ
七三 四 （ラウ）

七三	五	中カラ	
	六	男	
		子	
七五	七	勇マシク	
七六	一	少シ	
	二	犬	
八一	六	門	
	八	戸	
八三	二	刀	
	四	（シャウ）	
八四	五	人	

運筆順序

（特に筆順の誤り易いもの、又は二様以上あるものに就いて、藝能科習字と連絡しできるだけ統一して掲げた。）

上	一一（又ハ）一二一
川	ノ一一
手	一二一丿
草	丨二ノ日十
雨	一一フ一ミミ
出	一ムム
來	丆一八（又ハ）十从八
男	田ニフノ
勇	マ田ニマノ
門	冂ニフニ

鉛筆による書き方指導上の注意

姿勢

一、椅子にやや淺く腰をかけ、兩脚は少し開く。
一、下腹を前に出し、尻を引いて脊柱を正しくする。
一、胸を机におしつけぬやうにする。
一、左手を紙上にのせ、左肱を前に張らぬやうにする。

執筆並びに運筆

一、右腕は輕く机上にのせ、脇の下を開いて腕を伸ばす。
一、低學年では掌の右側を紙につけて書くが、高學年に及んで次第に輕くつけ、遂には手首のみをつけて運筆するやうに指導する。
一、四本の指は離れぬやうに密着させる。
一、鉛筆と紙面との角度は、右後へ六十度乃至七十度とする。
一、鉛筆は中指の爪のつけ根のあたりから、食指の根本にかける。

一、鉛筆は輕く持つて、あまり下を持たぬやうにする。
一、運筆は毛筆の如く强弱緩急をつけず、低學年に於いては字形を主とし、上達するに隨つて速度を加へ緩急をつける。

その他

一、鉛筆は直徑の二倍乃至三倍の斜面に削り、芯はなるべく尖らせないで使ふやうに躾ける。
一、鉛筆の芯をなめるくせをつけないやうにする。

ヨミカタ一の發音

（ガギグゲゴは鼻濁音を示す。）

アカイ　アカイ　アサヒ　アサヒ

ハト　コイ　コイ

コマイヌサン　ア　コマイヌサン　ウン

ヒノマルノ　ハタ　バンザイ　バンザイ

ヘータイサン　ススメ　ススメ

チテ　チテ　タ　トタ　テテ　タテ　タ

ガー　ガー　アヒル　ヨチ　ヨチ　アヒル

ハシレ　ハシレ　シロ　カテ　アカ　カテ

ココマデ　オイデ　ソロソロ　オイデ

フー　フー　フー　フクレタ　フクレタ　カミフーセン

ソラガ　ハレタ　ウシガ　ナク　モート　ナク

ピーチク　ピーチク　ヒバリガ　アガル　テンマデ　アガル

ユーヤケ　コヤケ　アシタ　テンキニ　ナーレ

ワタシガ　アルク　オツキサマガ　アルク

オハヨー　ゴザイマス。イタダキマス。イッテ　マイリマス。

ホンダ　イサムサン。ハイ。ワタナベ　マサオサン。ハイ。
スズキ　ハナコサン。ハイ。ハヤシ　ハルエサン。ハイ。

ホンダサンガ、ラッパノ　エ　オ　カキマシタ。
ワタナベサンガ、グンカンノ　エ　オ　カキマシタ。
スズキサンガ、サクラノ　エ　オ　カキマシタ。
ハヤシサンガ、フジサンノ　エ　オ　カキマシタ。

センセー、サヨーナラ。
オカーサン、タダイマ。

ヒコーキ、ヒコーキ、アオイ　ソラニ　ギンノ　ツバサ。ヒコーキ、
ハヤイナ。

イサムサンガ、オジサンノ、トコロエ、オツカイニ　イキマス。
シロモ、ヨロコンデ　ツイテ　イキマス。

モシ　モシ、キヌコサン　デスカ。
ハイ、ソー　デス。
ワタクシワ　ハナコ　デス。イマ、ハルエサンガ、キテ　イラッシャ
イマス。アナタモ、アソビニ　イラッシャイマセンカ。
ハイ、アリガトー。スグ　マイリマス。

ゴメンクダサイ。

キヌコサン デスカ。ヨク イラッシャイマシタ。ドーゾ、オアガリクダサイ。

ペンキ キツネ ネコ コブタ タンポポ ポンプ プカプカ ドン。
ドン

カクレンボスル モノ、ヨットイデ。
ジャン ケン ポン ヨ、アイコ デ ショ。
モー イー カイ。マーダ ダ ヨ。
モー イー カイ。マーダ ダ ヨ。
モー イー カイ。モー イー ヨ。

キ オ ツケ。ミギエ ナラエ。ナオレ。バンゴー。
イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク。

アメガ ヤミマシタ。スズシー カゼガ フイテ キマス。
キノ ハ ガ、ソヨソヨ ウゴイテ イマス。

イケニ、フネオ ウカベマシタ。
フネニワ、ホ ガ アリマス。
カゼオ ウケテ、ハシリマス。
ミズノ ウエオ、ズンズン ハシリマス。

ホー ホー、ホタル コイ。
チーサナ チョーチン サゲテ コイ。
ホー ホー、ホタル コイ。
ホシノ カズホド トンデ コイ。

タナバタノ　アマノ**ガ**ワ。
ピカピカト　オホシサマ。
ニコニコト　オホシサマ。

ニーサント　フタリデ、ハコニワオ　ツクリマシタ。
ヅチオ　タカクシテ、ヤマオ　ツクリマシタ。
ヤマノ　ソバニ、カワオ　ツクリマシタ。
ヤマニ、チーサイ　キオ　ゴホン　ウエマシタ。コケモ　ツケマシタ。
カワノ　フチニ、イシオ　ナラベマシタ。ハシモ　カケマシタ。
スッカリ　デキテカラ、オジーサンニ　ミテ　イタダキマシタ。
オジーサンワ、
「ホホー、コレワ　ヨク　デキタネ。」
ト　イッテ、ホメテ　クダサイマシタ。

ココワ、ドコノ　ホソミチ　ダ。
テンジンサマノ　ホソミチ　ダ。
ドーゾ、トーシテ　クダサイナ。
ヨーノ　ナイ　モノ、トーシマセン。
テンジンサマエ　マイリマス。
ソレナラ、トーシテ　ア**ゲ**マショー。

オミヤノ　イシダン、イチニサン、
シーゴーロクシチ、ハチクジュー、
ニジューゴダンデ　ゴシンゼン。
ニド　オジ**ギ**シテ、テオ　ウッテ、
モヒトツ　ウッテ、オジ**ギ**シテ、
ワタクシタチワ　ゲンキ　デス。

オトーサンガ、
「アサガオガ サイタヨ。」
ト オッシャイマシタ。
イッテ ミルト、ハチウエノ アサガオガ、フタツ サイテ イマシタ。
ムラサキノ オーキナ ハナ デス。
ボクワ、クレヨンデ シャセーオ シマシタ。
ラジオノ ピヤノガ、キコエテ キマシタ。
「モー ジキ オボン デスカラ、オハカノ、ソージニ イキマショー。」
ト、オカーサンガ オッシャイマシタ。ネーサント フタリデ、ツイテ イキマシタ。
オハカノ マワリノ クサオ トッタリ、オハカノ イシオ ミズデ

アラッタリシマシタ。
オハカノ ソバノ ハギワ、アカイ ハナガ フタツ ミツ サイテ イマシタ。
「ハギワ、オジーサンノ オスキナ ハナ デシタヨ。」
ト、オカーサンガ オッシャッテ、ソノ ネモトニ、ミズオ オカケニ ナリマシタ。
イモートオ ツレテ、ノハラエ ハナオ ツミニ イキマシタ。
ハジメニ、ナデシコノ ハナオ ミツケマシタ。
ソレカラ、オミナエシノ ハナオ ミツケマシタ。
マツノ キノ カゲニワ、キキョーノ ハナモ サイテ イマシタ。
イモートワ、キキョーノ ツボミオ ソット ツマンデ、
「カワイラシーネ。」
ト イーマシタ。

ワタクシタチワ、テニ　モチキレナイホド　ツンデ、ウチエ　カエリ・マシタ。

クロイ　クモガ、ソライッパイニ　ヒロガリマシタ。
キノ　ハ　ガ、ザワザワト　オトオ　タテマシタ。
オーツブノ　アメガ、オチテ　キマシタ。
オカーサンワ、イソイデ　アマドオ　オシメニ　ナリマシタ。
ピカリト　ヒカリマシタ。
オーキナ　カミナリガ、ゴロゴロト　ナリマシタ。
ワタクシワ、オカーサント　イッショニ　アマドオ　シメマシタ。
アメガ、ザーット　フッテ　キマシタ。

ユーダチガ　ヤミマシタ。
アタリガ　アカルク　ナッテ、ヒガ　サシテ　キマシタ。

セミガ、ウレシソーニ　ナキダシマシタ。
ムコーノ　ソラニ、オーキナ　ニジガ　デマシタ。
ワタクシワ、オカーサンオ　ヨビマシタ。
「マー、キレーナ　ニジ　ダ　コト。」
ト、オカーサンガ　オッシャイマシタ。

アリガ　ナランデ、セッセト・トール。
アツイ　ヒナカノ　コミチオ　トール。
マジメナ　カオシテ、セッセト　トール。
「ヤ、コンニチワ。」「コンニチワ。」
デアウト、チョット　オジギシテ、
ソレカラ　ダマッテ、セッセト　トール。

カワバタノ　スナオ　ホルト、シタカラ　ミズガ　デテ　キマス。

イサムサント　マサオサンワ、スナオ　ホッテ、イケオ　ツクリマシタ。

ハジメワ　ミズガ　ニゴッテ　イマシタガ、ダンダン　キレーニ　スンデ　イキマシタ。

「サカナオ　トッテ　イレヨーヨ。」

ト、イサムサンガ　イーマシタ。

フタリワ、カワエ　ハイッテ、サカナオ　サガシマシタ。

「メダカガ　ニヒキ　トレタ。」

ト、マサオサンガ　イーマシタ。

「ボクワ、エビト　ドジョーオ　トッタ。」

ト、イサムサンガ　イーマシタ。

イケエ　ハナスト、メダカワ　ゲンキヨク　オヨギマス。

ドジョーワ、ソコノ　ホーエ　シズンデ、トキドキ　ニョロリト　ウゴキマス。

エビワ　スキトーッテ、メダマダケガ、クロク　ミエマス。

スイスイ　オヨイデ　イク　ウチニ、ドコエ　イッタカ、ミエナクナル　コトガ　アリマス。

メダカサン、メダカサン、

オーゼー　ヨッテ　ナンノ　ソーダン。

ア、ミンナガ　ワット　ニゲテッタ。

トビガ、ソラオ　トンデ　イマシタ。

イケニ　イル　カメガ　キキマシタ。

「トビサン、ナニガ　ミエマスカ。」

「ヒロイ、ヒロイ　ウミガ　ミエマス。」

「コノ　イケヨリ　ヒロイノ　デスカ。」

「ドーシテ　ドーシテ、ウミワ、ソラノヨーニ　ヒロイノ　デス。」

コー　イッテカラ、トビワ　ウタイマシタ。
ウミノ　ムコーエ　フネ**ガ**　イク、ピーヒョロロ。
ウミノ　ムコーカラ　フネ**ガ**　クル、ピーヒョロロ。
ニッポンワ　ウミノ　クニ、ピーヒョロロ。

シタキリスズメ、オヤドワ　ドコ　ダ。
シタキリスズメ、オヤドワ　ドコ　ダ。
「オジーサン、マー、ヨク　オイデクダサイマシタ。」
「サー、ドーゾ　オア**ガ**リクダサイ。」
スズメワ、オーヨロコビデ、オジーサンオ　オザシキエ　トーシマシタ。
スズメ**ガ**、オジーサンニ　イロイロ　ゴチソーオ　シマシタ。
オーゼーデ、ニ**ギ**ヤカニ　オドリマシタ。
オミヤ**ゲ**ニ　ツズラオ　ア**ゲ**マシタ。

オジーサンワ、タイソー　ヨロコビマシタ。
「サヨーナラ。」
「サヨーナラ、ゴキ**ゲ**ンヨー。」
「ドーゾ、マタ　オイデクダサイ。」

ヒ**ガ**　クレマシタ。
オホシサマ**ガ**、メオ　サマシマシタ。
モリノ　ウエ**ガ**、アカルク　ナリマシタ。
ススキ**ガ**、オイデオイデオ　シテ　イマス。
オツキサマ**ガ**、カオオ　ダシマシタ。
ドコカデ、
「ヤー、オツキサマ**ガ**　デタ。」
ト　ユー　コエ**ガ**　シマシタ。
オツキサマワ、スッカリ　モリノ　ウエニ　ア**ガ**リマシタ。

マルイ、マルイ　オツキサマ　デス。
アカルイ、アカルイ　オツキサマ　デス。
コーロギガ、ウレシソーニ　ナイテ　イマス。

ウサギ、ウサギ、ナニ　ミテ　ハネル。
ジューゴヤ　オツキサマ、ミテ　ハネル。

ムカシ　ムカシ、アルトコロニ、オジーサント　オバーサンガ　アリマシタ。
オジーサンワ、ヤマエ　シバカリニ、オバーサンワ、カワエ　センタクニ　イキマシタ。
カワカミカラ、オーキナ　モモガ、ドンブリコ　ドンブリコト　ナガレテ　キマシタ。オバーサンワ、ソノ　モモオ　ヒロッテ、ウチエ　カエリマシタ。

オジーサンガ　ヤマカラ　カエッテ　クルト、オバーサンワ、ソノ　モモオ　ミセマシタ。
オジーサンワ、
「コレワ　コレワ、メズラシー　オーキナ　モモ　ダ。
ト　イーマシタ。
オバーサンガ、モモオ　キロート　シマシタ。
スルト、モモガ　フタツニ　ワレテ、ナカカラ　オーキナ　オトコノコガ　ンマレマシタ。
オジーサンモ　オバーアサンモ、タイソー　ヨロコビマシタ。オジーサンワ、モモタロート　ナ　オ　ツケマシタ。
モモタローワ、ダンダン　オーキク　ナッテ、タイソー　ツヨク　ナリマシタ。
アルヒ、モモタローワ、オジーサント　オバーサンニ、
「オニガシマエ　オニタイジニ　イキマスカラ、キビダンゴオ　コシ

ラエテ　クダサイ。」
ト　イーマシタ。フタリワ、キビダンゴオ　コシラエテ　ヤリマシタ。
モモタローワ、イサマシク　デカケマシタ。
スコシ　イクト、ムコーカラ　イヌガ　キマシタ。
「モモタローサン、モモタローサン、ドコエ　オイデニ　ナリマスカ。」
「オニガシマエ　オニタイジニ。」
「オコシニ　ツケタ　モノワ、ナン　デスカ。」
「ニッポンイチノ　キビダンゴ。」
「ヒトツ　クダサイ、オトモシマショー。」
モモタローワ、イヌニ　キビダンゴオ　ヤリマシタ。イスワ、ケライニ　ナッテ、ツイテ　イキマシタ。
マタ　スコシ　イクト、ムコーカラ　サルガ　キマシタ。
「モモタローサン、モモタローサン、ドコエ　オイデニ　ナリマスカ。」
「オニガシマエ　オニタイジニ。」

「オコシニ　ツケタ　モノワ、ナン　デスカ。」
「ニッポンイチノ　キビダンゴ。」
「ヒトツ　クダサイ、オトモシマショー。」
サルモ、キビダンゴオ　モラッテ、ケライニ　ナリマシタ。
マタ　スコシ　イクト、コンドワ　キジガ　キマシタ。
「モモタローサン、モモタローサン、ドコエ　オイデニ　ナリマスカ。」
「オニガシマエ　オニタイジニ。」
「オコシニ　ツケタ　モノワ、ナン　デスカ。」
「ニッポンイチノ　キビダンゴ。」
「ヒトツ　クダサイ、オトモシマショー。」
キジモ、キビダンゴオ　モラッテ、ケライニ　ナリマシタ。
モモタローワ、イヌト、サルト、キジオ　ツレテ、オニガシマエ　ワ、タリマシタ。
オニワ、モンオ　シメテ、マモッテ　イマシタ。

キジガ、トンデ イッテ、ウエカラ テキノ ヨースオ ミマシタ。
サルワ、スルスルト モンオ ノボッテ、ナカカラ モンノ トオ
アケマシタ。
モモタローワ、イヌト イッショニ セメコミマシタ。キジワ、トビ
マワッテ オニノ カオオ ツツキマシタ。サルト イヌワ、ヒッカ
イタリ カミツイタリシマシタ。
モモタローワ、カタナオ ヌイテ、オニノ タイショーニ ムカイマ
シタ。
オニノ タイショーワ、チカライッパイ タタカイマシタガ、トート
ー マケマシタ。
オニワ、ミンナ コーザンシマシタ。
「コレカラワ、ヒトオ クルシメタリ、モノオ トッタリ イタシマ
セン。ドーゾ、オユルシクダサイ。」
ト イーマシタ。

モモタローワ、オニオ ユルシテ ヤリマシタ。
オニワ、イロイロノ タカラモノオ サシダシマシタ。
モモタローワ、タカラモノオ モッテ、オニガシマオ タチマシタ。
タカラモノオ ツンダ クルマオ、イヌガ ヒキマス。サルガ アト
オシオ シマス。キジガ ツナオ ヒキマス。
「エンヤラヤ。エンヤラヤ。」
ト、カケゴエ イサマシク カエッテ キマシタ。
オジーサント オバーサンワ、タイソー ヨロコンデ、モモタローオ
ムカエマシタ。

綴り方指導要項

指導の發展段階

第一期　兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。

第二期　兒童の見聞する事象、日常の行動などに就き、見方、考へ方を指導して生活を豐富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。

第三期　文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多樣ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。

第四期　第三期に準じてこれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豐かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第一學年

一　指導要項

言語發表の指導

○兒童の日常使用する言語による發表を盛ならしめる。

(イ)日常の生活に於ける獨り言、挨拶、會話など、素朴なことばを取りあげ、それを手がかりとして自由に發表する態度を養ふ。

(ロ)言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、氣長に適當な方法を講じ、興味と自信を持たせて積極的に語るやうにする。

(ハ)方言、訛語、語法上の誤などは、順次これを矯正して正しい國語が使へるやうに導く。これも指導上氣長な辛抱が必要である。

○日常生活の中から、何を發表するか、それを發見し把握する仕方を懇切に指導する。

(イ)日常の生活に於いて、見たこと、行つたこと、考へたことなどを發表させる機會を多くする間に、一定の事柄を中心として發表する力を得させる。

(ロ)話合、野外遊歩、見學などに際し、その場で設問すること、提示した繪畫や實物、兒童の描いた繪などに就いて說明させること、學校、家庭、その他に於ける遊びや學習や、飼育、工作、栽培などの經過を話させることによつて、次第にまとまつた發表をさせる。

(ハ)進んでは、各自の生活を思ひ起させ、記憶をたどつて、雜多な事象の中から感覺的に印象づけられたもの、興味をそそられたもの、感動したことなどを捉へる練習をさせる。

これが練習にあたつては、初めはごく單純素朴なものをとりあげ、次第に複雜豐富なものに向かはせることが大切である。

これは綴り方にはいる最も根本的な方法であるから、十分に基礎づけておかなければならない。

○他教科他科目の指導中でも、言語發表の練習をさせる。

(イ)少しでも多く言語發表をさせ、生活を反省させ、記憶を喚びさまし、題材を發見し把握する契機を與へる。

(ロ)言語發表をしようとする兒童は、事柄を時々刻々に思ひ出しながら、ことばにするのであるから、必ずしも整然たる筋を求めることなく、その發表欲を滿足させることが大切である。

文章表現の指導

○言語表現から文章表現にうつる間に、過渡的な方法として繪畫を描かせる。

(イ)話す事柄を日常生活の中から、發見し、發表することだけでも、兒童にとつてはかなり程度の高い精神的な作業である。これを文字に移すのは更にむづかしいことである。

この困難な仕事を躓くことなくさせるために、いろいろ工夫して善導することが大切である。

(ロ)繪を描かせることは有効な方法の一つである。それは繪を描くことによつて、ただ事物を羅列することから、進んで、物と物、事件と事件との關係や秩序が組立てられるやうになるからである。

更に繪は何枚か續けて描くことにより、時間的な展開を示すことができ、事物の動きを具象化することが會得されるのである。

(ハ)繪を描かせて、それをことばで説明させたり、或は文字を書き入れさせたりして表現能力を養ひ、次第にこれを綴り方に導く。

○題材をなるべく廣く取るやうに導く。

(イ)日常の生活に於いて、見たこと、行つたこと、考へたことなどを題材として文章に表現するやうに導く。日常の遊びや仕事や學習や作業などを、そのまま記述することが綴り方であるといふ氣輕な心持で綴り方に向かはせ、生活のあらゆる機會を利用して書く事柄の具體的な指導を行ふ。

(ロ)文章表現への自發的な興味を喚起するやうに導く。

日記、手紙、詩などのやうな形で記述させることによつて、綴る興味を昂める。

兒童相互の綴り方を讀みあひ、又短い文、詩など適當な文例を示し、興味とともに兒童の能力を引出す機會を多くする。

(ハ)他教科他科目との緊密な聯關を保ち取材の範圍を廣くする。たとへば理數科に於ける草花や動物などの觀察、栽培、飼育等と連絡して生活の興味と表現との自然な結びつきをはかる。

○思ふままに記述をさせ書寫能力を養ふ。

(イ)とりたてて、構想や腹案等の指導を行はず、經驗の順序によつて、自由に記述させる。

(ロ)用語は兒童の生活語から出發し、次第に正しい國語の表現に向かはせる。

綴り方は方言だけで書けるものではない。方言だけで書けといへば、かへつて兒童の筆は澁つてしまふ。讀み方、その他の讀物、話し方、

その他の言語生活に於いて、正しいことばづかひや正しいいひまはしをよく練習させなければならない。

誰にもわかるやうに、はつきりといひあらはし書きあらはすやうにさせる。そのために、自分の文を度々讀みなほす習慣を養ひ、訂正の仕方を敎へる。

(ハ)表記の基礎的指導を行ひ、書き方と關聯して書寫能力を練る。

カチヅカヒ・句讀點などは讀み方に準ずることを建前として指導する。

書き方と聯關して、文字を正しく書き得るやうにし、且氣輕に鉛筆が持てるやうに練習する。

二　指導要項例

第一學期

○簡單な話合

(イ)挨拶や應答がはつきりいへるやうにする。

(ロ)見たこと、したこと、聞いたこと、考へたことなどの話合をさせる。

(ハ)おもしろい話、をかしい話、珍しい話などを、話合からとりあげるやうにする。

○生活の言語發表

(イ)野外遊歩、見學など、その場で問答したり、又見聞したことに就いていはせたりする。

(ロ)提示した實物や繪畫、兒童の描いた繪などに就いて、いろいろの發表をさせる。

(ハ)遊び・學習・飼育・工作・栽培などの經過を發表させる。

○發表をとりあげる

(イ)兒童の發表した面白い個性味のある短い話を書きとめておいて、みんなに聞かせてやる。

(ロ)兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、説明したことなどを、その時の様子と結びつけてみんなに話してやる。

○繪による發表

(イ)日常の生活におけるいろいろのことを、繪で發表させる。

(ロ)繪日記・紙芝居など、連續した繪話を作らせる。

(ハ)短いことばを書き入れ、繪とき、繪入りの文を書かせる。

○發聲及び表記の基礎的練習

(イ)話合や言語發表における兒童のことばをとりあげて、發聲の基礎練習をする。

(ロ)興味ある短い文を選んで、その視寫・聽寫をさせる。

第二學期

○夏休の繪日記

(イ)學級で展覽し、お互の作品をよく見るやうにしむける。

(ロ)題材のとらへ方のよい作品をほめて、取材の仕方を指導する。

○行動の叙述

(イ)自分のしたことを、お話するやうに書かせる。

(ロ)うちの人のことや、身のまはりの自然のことにもふれて書くやうにする。しひてまとまつた話にさせなくてもよい。

○發表をとりあげる

(イ)第一學期に準ずるものをとる。

(ロ)とりあげたものを適當な方法によつてよく讀ませ、題材のとらへ方やあらはし方のちがひに注意させる。

○短い文の視寫・聽寫

(イ)書き方と聯絡して書かせ、特に促音・濁音・長音・句點・字配りなどに氣をつけさせる。

(ロ)書寫は、まづよいものをほめることによつて、自發的につとめるやうに仕向ける。

○郵便ごつこ

(イ)役割をきめて郵便ごつこをさせる。

(ロ)生活の實際を通信しあふやうにする。

○紙芝居の製作

(イ)繪と文とを使つて、連續した表現をさせる。

(ロ)想像によるもの、自分の行動をあらはすもの、自然をうつすものなどを書かせる。

○冬休の綴り方

(イ)戰地の兵隊さんへあてた年賀狀の指導をする。

(ロ)繪日記の書き方を指導する。

第三學期

○冬休の繪日記

(イ)第二學期夏休後の方法に準ずる。

(ロ)題材のとらへ方のほかに、あらはし方のよい作品をほめるやうにする。

○遊びを書かせる

(イ)正月の遊び、かくれんぼなど、遊びのおもしろさを中心にして、自分の行動をくはしく書かせる。

(ロ)對話を入れること、對話にかぎをつけること、句點を正しくうつことを指導する。

○うちの人

(イ)親しみの心で、うちの人のことをくはしく書かせる。

(ロ)その人の様子のよくあらはれたところをほめるやうにする。

○手紙の文

(イ)兵隊さんから來た手紙などを讀みあふやうにする。

(ロ)兵隊さんや病氣の友だちによびかけた文を書かせ、手紙を書く準備をする。

○詩

(イ)感動したことがらを、短いことばで書かせる。

(ロ)改行・分節などには、あまりこだはらず、感じたままに表現させるやうにする。

(ハ)程度にあつたよい作品を鑑賞させる。

○作品の朗讀

(イ)自分の書いたものを、お話のやうに讀むやうに仕向ける。

(ロ)人の綴り方を喜んで聞くやうに導く。

○自分でなほすことの練習

(イ)自分の綴り方を何べんも讀みなほすやうにさせる。

(ロ)書き足りないところを見出して、それを補ふ方法を敎へる。

○一年間の綴り方

一年間の綴り方をまとめさせ、それをよく讀みかへして、生活を反省させる。

三　參考文題

（次に掲げた文題は指導上の參考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。）

第一學期

四月

オウチノコト　（おうちの人、赤ちやん、おもちや、犬、猫、鶏、牛、馬、花などに就いて氣樂に話させる。）

ガクカウノコト　（はじめて學校へ來た時のこと、みんなとの遊び、先生のこと、敎室のことなど。）

ツウガクノコト　（學校に來る途中で見たり聞いたりしたこと、誰といつしよに來たか、どんなことをお話したかなど。）

テンチャウセツ　（式のこと、國旗のこと、先生のお話のことなど。）

五月

エンソク　（前の晩のこと、その日の朝のこと、途中のこと、お辨當のことなどを順に話させる。）

ウンドウクヮイ　（大體「遠足」に準じる。自分のしたこと、人のしたことなど。）

オセック　（かしは餅、私のうちの鯉のぼり、學校の鯉のぼりなど。お節供に何をして遊んだかなど。）

ハナトコトリ　（好きな花、朝顔の芽生え、好きな小鳥、小鳥の鳴き聲などに就いて。その他小動物など。）

六月

オテツダヒ　（お使ひ、子守、庭はきのお手傳ひ、水くみなどに就いてくはしく話させる。）

アソビ　（ままごと、かくれんぼ、兵隊ごつこ、なはとび、水遊びなど、その時の樣子を誰にもわかるやうに話させる。）

アメ　（雨でこまつたこと、雨の日にうちで遊んだこと、雨の日の通學など。）

ヒカウキ　（飛行機を見た時のこと。どんな形をしてゐたか、どんな音がしたかなど、その時の感動をそのままにいひあらはさせる。）

エホンノハナシ　（またおもちやの飛行機をとばしたことなど。繪本に書いてあつた繪の話などを中心に。買つてもらつた時、いただいた時のことなどをいつしよに話させてもよい。）

七月

タナバタ　（うちの七夕祭、學校の七夕祭など。天の川のことなどに觸れて話させる。）

ガクゲイクヮイノコト　（何が一番おもしろかつたか。出演したにいさん、ねえさん、お友だちのこと、劇、お話などを思ひ出して話させる。）

オボン　（うちのおぼん、おぼんにしたこと、お墓參りなどに就いて、經驗を中心に。）

ソトデアソンダコト　（水泳、魚釣り、箱庭つくり、花つみ、蟬とり、線香花火など、行動を中心にして話させる。）

オマキリシタコト　（神社、お寺にお參りした時のこと。いつ、誰とどんな日に。）

コノゴロノヤサイ　（畠または庭さきのいんげん、きうり、なすなどに就いて。）

第二學期

九月

ナツヤスミノオハナシ　（夏休中の生活を思ひ思ひに話させ、その中のあるものを記述させる。書いた繪を整理して説明を加へさせる。）

アラシノ日　（あらしの日のうちのこと、庭の草や木のこと、たんぼのこと、通學途中の見聞など。）

ムシ　（とつた虫、見た虫、虫の鳴き聲など。いなごとり、ばつたとりなど、興味の中に觀察を織り込んで書かせる。）

オ月見　（お月見の用意、いろいろなそなへもの、お手つだひなど、うちの生活に聯關させて。）

ガクカウエン　（このごろの學校園に就いて書かせる。繼續觀察をやや加へ日記風に書かせてもよい。）

十月

エンソク　（途中の見聞を書かせる。斷片的な短いことばで詩の形になつてもよい。）

山ノボリ　（時間的に全體を記述させる。或は自分のしたことを中心に書かせてもよい。）

ウンドウクワイ

オマツリ　（お祭の來るまでのこと、前の晩のこと、お參りした時の樣子、お祭の御馳走、お小遣のことなど、くはしく。）

タンボノヤウス　（いねかり、いねこき、おちばひろひなど、自然の樣子といつしよに書かせる。）

キイタハナシ　（友だちとの話、うちの人から聞いたこと、おもしろかつたラジオの話、讀んだもののあらすぢなど、友だちに話すやうに。）

ヨンダ本

十一月

メイヂセツ　（式の樣子、學校から歸つて遊んだこと、天氣のこと、明治節に就いて聞いたお話、菊の花のことなど。）

コノゴロノクダモノ　（柿、栗、りんご、みかん等、栗ひろひ、柿もぎ、みかんとり、いもほりなどに就いて書かせてもよい。）

ヘイタイサンニ　（特に慰問文の指導としないで、うちの樣子、村や町の樣子、學校の樣子などをお話の形式で書かせる。）

エ日キ　（自然の觀察を繪日記に書かせる。雲の日記、コスモスの日記、雞の日記など。）

エバナシ　（讀んだ話を紙芝居風に書かせ、その説明を書かせる。）

十二月

冬ノアサ　（早起、ラジオ體操などに聯關させて、寒い冬の朝の自然や行動を書かせる。）

カヒモノ　（おとうさんおかあさんといづしよに買物をしたこと、自分で物を買つたこと、買物ごつこなどの體驗を書かせる。計算の興味を附隨させて。）

シモヤケ　（自分のしもやけ、友だちのしもやけなど、手袋や足袋、火鉢などに聯關させて書かせる。）

モチツキ　（お正月の用意、すすはき、障子のはりかへ、餅つき、その他樂しいお正月を待つ氣持を行事に聯關させて書かせる。）

第三學期

一月

グヮンジツノアサ　（元日の朝の行事を體驗のままくはしく書かせる。）

ヱ日キ　（お正月の三日間、或は五日間の生活の中から、特におもしろかつたことを繪と文で書きあらはす。）

オ正月ノアソビ　（たこあげ、はねつき、すごろく、相撲、雪合戰など。）

シャシン　（寫眞をとつた時のこと。家にある寫眞、家庭全部でとつた寫眞などに就いて、くはしく書かせる。説明的になつてもよい。）

キモノ　（着物、えりまき、外套など、いつ、誰に買つてもらつたか、どんなに大切にしてゐるか、どうしてよごしたかなど書かせる。）

二月

マメマキ　（誰が豆まきをしたか、そのときの樣子、その夜のこと、うちの人たちの年齡のことなどをくはしく書かせる。）

キゲンセツノ日　（式のこと、先生のお話のこと、何をして遊んだかなど。）

ユメ　（見たゆめ、ひとのゆめの話、どんなゆめが見たいかなど。）

日ナタボッコ　（ひなたぼつこをしてゐる時のいろいろな觀察。實際にひなたぼつこをさせて、詩の形で書かせてもよい。）

學ゲイクヮイ　（學藝會の樣子をくはしく書かせる。）

三月

オヒナサマ　（おひなさま、去年のお節供、お節供の御馳走、お客さまのこと、誰と何をして遊んだかなど。）

オカアサン　（地久節、母の日に聯關させて、おかあさんをよろこばせたこと、やどういふ時にどういふことをしたら、おかあさんがよろこばれるだらうといふやうなことを書かせる。）

ウグヒス　（うぐひすの樣子や、鳴き聲などに就いて。その他の小鳥のことでもよい。）

二年生ニナル　（二年生になる樂しさ、うれしさを書かせる。「二年生になつたら」といふ氣持を多少感想風に書かせるのもよい。）

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

兒童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。又人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

第二期

兒童の見たこと、聞いたことなどに就いて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聽く態度を養ふ。

第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、又男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。

なほ、話をしたり聞いたりするときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心がまへを養ふ。

初等科第一・二學年

指導要項

(一) 話し方は、讀み方指導を中心に、これが基本的指導をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 讀み方、話し方を一體と考へ、讀み方の教材たる挿畫(掛圖)文章等を中心として、話合をさせる。

(2) 話合に於いては、すべての兒童に話す機會を與へることにつとめて、言語發表を盛にし、これを適正に指導する。特に言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、適當な方法を講じ先づ氣輕に話すやうに仕向ける。

(3) 讀み方教材を通して、正しい發音、ことばづかひになれさせ、教材を朗讀暗誦すること、言語を身振にあらはすこと、對話を實演することなどにより、正しい話し方に導く。

(二) 話し方は、綴り方指導に於いても、これが積極的指導を行ひ、特に左の事項に留意する。

(1) 綴らうとする主題を中心にして、兒童の見たこと、聽いたこと、考へた

こと等の話合をさせ、言語發表の修練をさせる。

(2) 綴り方を單に書かせるだけでなく、それを朗讀し、また聽くことになれさせ、まとまつた話をしたり、聽いたりする修練をさせる。

(3) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、これを話し方として適正に指導する。

(三) 他教科、他科目の指導と聯關して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身・禮法と聯關して、挨拶・返事・姿勢・態度等の躾をなす。

(2) 音樂と聯關して、發音・發聲を正すことにつとめる。

(3) 理數科に於ける觀察や作業と聯關して、事物・事象とことばとの正しい結合を圖り、正確な言語の使用に導く。

(4) 兒童の圖畫・工作に就いて、自分の經驗や思つたことを發表させ、話し方の修練をなす。

(5) お話會・學藝會等に於いて、他教科・他科目の學習・諸行事・童話・讀物等を

話題として、大勢の前で話すことの初歩的指導をなす。

(四) 話し方の指導は、兒童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1) 特に初期の話し方指導に於いては、教師は兒童の親しい話相手となり、話の誘導者となり、又兒童相互の仲介者となつて、すべての兒童に氣輕に話す機會を與へることにつとめる。

(2) 教室に於ける問答、話合はもとより、教室外に於けることばづかひに就いても常に留意して、一般的または個人的に指導する。

(3) 教師はつとめて醇正なことばを使用し、特にこの時期では、丁寧なことばづかひをして、兒童をして知らず識らずの中に、それに倣はせるやうにする。

(4) レコード・ラジオ等を選擇利用して、正しいことばになれさせる。

(5) 家庭と協力して、挨拶その他日常語を正しく使ふやうに躾ける。

K131.8-5-1

昭和十六年四月三十日印刷
昭和十六年五月二日發行

（非賣品）

著作權所有

著作兼發行者　文部省

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　共同印刷株式會社